304
Y27

大東亞建設讀本

天泉社

②

0002002000

0002002-000

３０４－Ｙ２７ウ

大東亜建設読本

山川時郎・著

天泉社

昭和１７

AAC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

304
Y27

大東亞建設讀本

川時郎著

一億同胞に訴ふるの書

東京 天泉社

304
Y27

★世界史轉換★

江渡狄嶺序
山川時郎著

大東亞建設讀本

東京 天泉社

詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ衆庶ハ各〻其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑〻東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト釁端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提携スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尙未タ牆ニ相鬩クヲ悛メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ

945
C1

東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剰ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增强シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益〻經濟上軍事上ノ脅威ヲ增大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衞ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名御璽

昭和十六年十二月八日

序

著者は私の十數年來の友人であり、研學好道不倦の士である。嘗つては農村問題に一方の論客たり、又兩三年前からは「日本政經研究會」を興して、「現下世界史轉換の時代に於ける我が日本の新しき使命」、その指導的役割、その政經新體制を究明し、實現せんと志しつゝある。而も、その究明を深むるに當り、その實現の具體案も重要なることながら、最も著者の「遺憾とし、深憂に堪えざるところ」としたものは、實に「その解決を基礎づくる原理性の缺如、思想性の喪失」であるとし、その爲めには、如何にも「日本的行とその領域としての日本的場を確把」せなくてはならぬとし、昨年より「場論研究會」を創めて、私も共にその同人の一人たるのである。

私は昭和十二年、支那事變の起つた年末、「今次の事變併に將來の推移に對する國人自覺についての我が現當の願望」と題して、時局に對する一片の所志を述べて朝野の人士に贈つたが、不幸にしてそれは何人にも顧らるゝところとはならなかつた。而もその中に豫め默識しおきしところのものは、大東亞戰の勃發と共に、まがりなりにも日に月に實にせられつゝあるのを見て、私は

轉た感慨無量のものがある。願くはこの「はつくにとたかまのことをひんがしのみたみもろともむすびてん」「大東ルネーザンスの歴史を創る」時代の曙に、我が皇國日本の進路に些かの過ちだにもなからんことを、これは布衣、私の草廬にありての現在の唯だ一つの祈願である。ただ然しながら、その指標には、私の確信するところによれば、大本として「場に於ける行」の思想原理と現實行動との外には斷じてなく、而もその眞實の理解の世に人なきことを、私は心ひそかに憂ひとしつゝあるものである。

著者は、本書について、私への書信の中で、「解説的といふ註文なので思ふやうなものが出來ず」といつてゐれば、或は、著者が抱懷し、希圖してある「日本的な行と場」とからの指導理念とそれからの具體的な構想とについては、本書にはその充分な論述が出來なかつたではないかとも思はるゝが、然しそれは、たゆまざる著者が將來に待つとして、本來かゝる志向を持つ著者の解説は、決して世間一般の平面的無思想性のものとは自らその選を異にするものであらうことは、私の信ずるところである。

終りに歌詩に托して時局下の我が志を述ぶ。

○

十二月八日

今ぞきくあじあの民の
　あけぼのの
大のりことに襟を正して

今ぞ立つ　五首

（我ら日本人としての覺悟の意を歌ふ）

今ぞ立つあじあの民の
　あけぼのに
大和おのこはさきがけをして

今ぞ立つあじあの民の
　あけぼのに
　三千年來の忠(マコト)ためさん

今ぞ立つあじあの民の
　あけぼのに
　我が日の本のありと知らずや

今ぞ立つあじあの民の
　あけぼのを
　神靈とはに守らせたまへ

今ぞ立つあじあの民の
　あけぼのに
　必勝祈る草深き屋に

日は來る　五首

（全亞細亞人に呼びかくる意の歌）

日は來るあじあの民の
　あけぼのの
　世紀の史(フミ)をここに創る日

日は來るあじあの民は
　今の今
　本來あじあのさだめさだむる

日は來るあじあの民の
解放に
天の許さぬしころ討つべき
日は來るあじあの民の
大同に
立て咸一にひんがしの民
日は來るあじあのうみの
大うみの
こゝらぎ浦の平らけん日は

○

捨生取義眞男兒
忘死盡忠是日人
執戈把鍬一體心
願爲萬世開太平

○

常非常いくさばに立つ
立たぬ身も
やまとごころにかはりあらめや

無邪思野にて　江渡狄嶺

序

皇紀二千六百一年十二月八日、畏くも　大詔を仰いで、日本民族は世界史の創造に起ち上つた。有史以來、未だ嘗つて見ざる歴史的偉業も、今や着々大なる成果を收めつゝある。

十二月八日を轉機として、内外の情勢急湍の如く一變し、今や一切を新たにして出發すべき時であるが、現下の主要課題は、何といつても大東亞戰爭の完遂と大東亞共榮圏の建設にあり、そのためには國家と國民の總力を結集して、目標の達成に邁進せなければならない。日本民族は、この偉業を完成した時、はじめて文字通り世界史的民族、世界史を創る民族となるのである。

日本民族のかゝる歴史的使命に關する意識は、日本國民の一人々々が把持すべきものであり、不徹底ながら本書も、かゝる意識の下に執筆されたものであるが、思想も敍述も極めて未熟不完全にして、本書が日本民族の誇りに充ちた尊き使命感の實踐に、果して些かなりとも役立ち得るや否やは、著者自ら疑問とするところである。

更に、本書の取扱ひたる大東亞建設に關する諸問題の解明に際し、その據るべき基準は、一面強固なる國體の信念と、日本歴史の深き認識と、確乎たる日本世界觀と、綜合的にして高き政治の指導性にあり、他面、「場に於ける行」の哲學的基礎にあるべきは、著者の深く信ずるところであるが、本書一篇の解明が、果してそれに成功せるや否やも、深き懸念の存するものがあるが、この點に關しては、大方諸賢の御指教と御鞭撻を俟つて、今後一層の精進を期したいと考へてゐる。

最後に、本書出版に際し、御懇篤なる序文を下されし恩師江渡狄嶺先生に深く感謝すると共に本書の出版を快諾されし天泉社主小泉準一氏、竝に、出版に際し、特別なる御鞭撻と御厚情を下されし長友河野新悟郎君に深く謝意を表する次第である。

皇紀二千六百二年四月二十二日

山川時郎

大東亞建設讀本

目次

詔書

序　江渡狄嶺

自序

第一章　世界史の轉換と大東亞の建設

世界史轉換としての大東亞戰爭……一

第一節　世界史の轉換……一

第二節　歐米東亞侵略小史……八

第三節　米英の對日包圍陣結成と大東亞戰爭の勃發……一七

第四節　大東亞戰爭の世界史的意義……二四
第二章　大東亞建設の原理……三〇
第五節　大東亞建設の理念……三〇
第六節　大東亞の地政學……三五
第七節　「人」による「人」の建設……四一
第三章　大東亞國防の協力建設……五〇
第八節　國家總力戰と國防國家體制……五〇
第九節　大東亞國防體制の確立……五八
第一〇節　國防經濟力の充實……六一
第四章　大東亞政治の協力建設……六九

第一一節　大東亞戰爭の完遂と國內體制の刷新……六九
第一二節　大東亞政治の協力建設……七六
第一三節　大東亞國土計畫……八七
第一四節　大東亞民族政策……九四
第一五節　大東亞建設と日本の人口政策……一〇三
第五章　大東亞經濟の協力建設……一一三
第一六節　大東亞經濟の協力建設……一一三
第一七節　大東亞金融圈の建設……一二〇
第一八節　大東亞工業の建設……一二九
第一九節　大東亞農業の建設……一三五
第六章　大東亞文化の協力建設……一四一

第二〇節　大東亞文化の協力建設……一四一
第二一節　大東亞宗教對策……一五〇
第二二節　大東亞教育體制の建設……一五五
第二三節　大東亞科學技術の建設……一六〇
第七章　大東亞建設の指導者としての日本……一六六
第二四節　日本の歴史……一六六
第二五節　日本の土と血……一七二
第二六節　大東亞建設の指導者としての日本……一七六
附錄
東條首相大東亞戰爭演說集
一　大詔を拜し奉りて……一八七
二　第一次。大東亞宣言……一九一
三　第二次。大東亞宣言……一九八
四　第三次。大東亞宣言……二〇四
五　印度への聲明……二一一

—終—

世界史の轉換と大東亞の建設、

第一章　世界史轉換としての大東亞戰爭

第一節　世界史の轉換

現下世界史發展の根本特質は、第一に、世界の現狀を打破して世界新秩序を建設せんとする日獨伊及びそれと盟約を結ぶ樞軸國家群と、世界の現狀を維持して世界の舊秩序を守らんとする米英及びそれに追隨する反樞軸國家群との、歷史的な生死を賭した對立抗爭として規定され、第二に、かゝる對立抗爭を通じて日本を先頭とする樞軸國家群が、正に壓倒的な勝利に向つて前進しつゝある時代と規定される。

然らば、世界新秩序とは何んであるか。或は世界舊秩序とは何んであるか。

先づ世界舊秩序の特質は何處にあるか。

第一は、米英のユダヤ的金權資本による全世界の搾取といふ點にある。第二は、かゝる金權資本の力によつて世界の陸地と海洋を獨占的に支配してゐるといふ點にある。第三は、かゝる領土

的支配が何等地域的秩序及び地政學的必然に立脚せず、抽象的な世界法と國際的秩序の理念に基礎を置いてゐるといふ點にある。第四は、世界經濟に立脚して資本の恣意、通商の自由、海洋の自由を强調してゐる點にある。第五は、西歐文明傳統の唯物思想、自由主義、個人主義、功利主義に立脚して、物質的繁榮と個人の幸福を主眼としてゐる點にある。

世界新秩序の特質は何處にあるか。

第一は、舊秩序のユダヤ的金權支配に代るに、萬邦協和、民族共榮の道義的秩序に立脚してゐる點にある。第二は、世界の陸地と海洋の獨占的支配に代ふるに、各民族各々その處を得たるブロック的生活圏に立脚してゐる點にある。第三は、抽象的な世界法による國際的秩序に代ふるにブロック的生活圏の上に、地政學的な地域的秩序を建設せんとしてゐる點にある。第四は、一應世界經濟の解體を宣言して、自給自足的にして有無相通の共存共榮的な廣域經濟を確立せんとしてゐる點にある。第五は、物心一如、國家への奉仕、公益優先、職域奉公を强調する點にある。

舊秩序が十九世紀の世界秩序なら、新秩序は正に二十世紀の世界秩序である。また、舊秩序が正に行詰りの狀態にある單なる西歐的原理に立脚してゐるなら、新秩序は西洋と東洋を融合統一した新しい世界原理に立脚してゐる。

然して、正に我が日本こそ、明治維新から現在の大東亞戰爭に至るまで、雄大なる構想の世界新秩序建設、雄渾極まりなき世界史轉換のイニシアティヴを取つて來た。

嚴密なる意味に於て、日本は明治維新によつて、初めて世界史の發展に意識的に參加して來たのであり、日本世界史は正に明治維新を契機として成立した。

明治維新當時、我が日本は、內には權威を失墜した德川幕府が正に崩壞の前夜にあり、外には阿弗利加と亞細亞と太平洋を既に征服して、尙飽くことを知らざる英米露佛等の諸列强が、唯一つ取り殘された太平洋の孤島である我が日本に、東西南北からの包圍陣を形成して迫り來る狀態にあり、洵に內憂外患交々至つて、不滅なる神州正に興亡の岐路に直面するに至つた。幸ひにして先づ討幕を完成して王政復古を翼贊し奉つた明治政府の指導者は、力を攘夷に集中して漸くにして切迫せる危機を乘り切ることが出來た。

こゝに注目すべきは、亞細亞と太平洋の大半の地域を征服して、東進し西漸し南下し北上して我が日本に迫り來つた歐米の諸列强に對して、我が日本がはじめて一大反擊を企てたといふ歷史

的事實である。こゝに我が日本は世界史の發展にはじめて一歩を印したのである。

明治維新に於ける內外の危機を漸くにして切り拔けた日本は、一應軍事、政治、經濟、文化、教育に至る各般に亙つて、西歐文物の長所を急速に取り入れ、ひたすら富國强兵の道を進んだ。

續いて、朝鮮の獨立問題に絡んで、支那との間に國論が衝突し、遂に干戈を交へるに至つたが戰爭は幸ひにして日本の壓倒的勝利を以て終り、支那は朝鮮の獨立を確認するに至つた。

然るに其後十年、三國干涉によつて支那に恩を賣つた帝政露西亞が、滿洲にその勢力を扶植し、更に野望を逞しうして朝鮮を併呑せんとするに及び、日本は東洋平和と、朝鮮の獨立保障と、自國防衛の爲に敢然として起ち上り、結き滿洲の原野に馳驅し、日本海の激浪を蹴つて露西亞を擊破し、その東亞侵略の野望を挫折せしめた。

日淸・日露の兩戰勝によつて、日本の勢威とみに上り、從來東洋に於ける片偶の蕞爾たる一小國であつた日本は、堂々一躍世界列强の班に伍するに至つた。

つゞいて、第一次世界大戰が起つた。それは實質は英獨の世界爭覇の戰爭であつたが、日本は日露戰爭直前の日英同盟の誼を恩として英佛米等の聯合國に參加し、戰勝國に列した爲に、南洋に於ける獨領の諸群島を委任統治するに至ると共に、莫大な經濟的利益を獲得するに及んで、世界政治に於ける日本の地歩は更に飛躍的に高まり、同時に東亞に於ける唯一の安定勢力となるに至つた。

かくして、明治維新以來拮据經營、內外共に躍進に躍進を續けて來た我が日本が、第一次世界大戰を契機として、漸く東亞唯一の安定勢力となるや、戰勝の餘勢に驅られて世界完全制覇の野望を逞しうせんとした米英兩國は、極度に狼狽して態度を豹變し、從來とは打つて變つて陰に陽に日本壓迫の手を擴げて來た。

かくして、大戰後三年目の大正十年(一九二一年)、米國の發意によつて、ワシントンに軍縮會議を開いたが、米英は海軍主力艦比率の協定に於て、米英の各五に對して日本を三の劣勢に制限すべく强要し、同時に日英米佛の太平洋四國條約によつて太平洋の現狀維持を策し、更に支那に關する九國條約を締結して支那の國際共同管理に一歩を進めんと企圖した。なほ、昭和五年に至つてロンドン條約の締結を勸奬し來り、補助艦艇の比率をも制限して、我が海軍力を英米に對し絕對的劣勢の地位に追ひ落さんとした。

しかのみならず、米英は世界市場よりも日本を遮斷せんとし、關稅障壁を高めて輸入を制限し移民法を制定して入國を拒否し、軍備縮少、反戰主義、平和主義を宣傳して我が國內輿論を分裂に導かんとした。

更に、我が國が英靈十萬の骨を埋めて確保した生命線たる滿洲に對しても、支那を使嗾して奪還を企つるが如き陰謀を敢てするに及び、遂に昭和六年九月滿洲事變が勃發するに至つた。

滿洲事變は我が日本の世界新秩序建設への具體的な第一歩であつた。事變勃發の翌年には、日本の協力と滿蒙三千萬民衆の輿望を擔ひ、王道樂土・民族協和を理想とする滿洲帝國が誕生した。

滿洲國の誕生は、現狀維持に立脚する國際聯盟の諸國家竝に聯盟を事實上指導してゐた米國にとつては一大脅威であつたため、國際聯盟はあらゆる手段を盡して日本に不當の制裁を加へんとした。玆に至つて、我國は昭和八年三月、畏れおほくも大詔を仰いで止むなく國際聯盟を脫退するに至つた。

滿洲國は順調に發展したが、滿洲國の獨立によつて日支の關係は憂ふべき狀態に陷り、支那は米英の援助を藉りて日滿の提携を阻害し、剩さへ抗日救國を叫んで排日侮日を縱まゝにした。

日本は止むなく東亞安定の爲に、蔣政權の膺懲を決意するに及んで遂に支那事變は勃發した。事變は政府によつて最初現地解決、不擴大の方針を採られたにも拘らず、事變發生の必然性によつて全面的に擴大し、遂に蔣政權を四川省の奧地にまで追ひ込んだが、米英の援助によつて蔣政權は抵抗を續け、遂に五星霜を經過するに至つた。

元來、支那事變はそれ自體に於ては處理、解決し得ざる本質を內包してゐた。蔣政權は踊らされてゐる傀儡であつて、主體者ではなく、主體者は蔣政權を操つてゐる米英そのものであつた。

かくして、支那事變が進むに從つて、その本質が現實的に曝露されたばかりでなく、米英それ自身が、積極的に重慶、蘭印を誘つて、我が周邊に武備を增强し、經濟斷交を敢てし、正に日本を壓殺せんとするに及んで、我が國は一切の障碍を破碎せんため蹶然として起ち上り、米英擊滅の大東亞戰爭を宣戰するに至つた。

かくの如く、日本は明治維新以來、たとへ最初は明確に至高の戰爭目的を意識し自覺してゐなかつたとはいへ、終始世界維新の爲、世界新秩序建設による東亞竝に世界永遠の平和の爲に戰つて來た。

日露戰爭正に酣なりし明治三十七年、先覺岡倉天心は「日本の目覺め」を英文にて紐育から發表し、烱眼にも既に日露戰爭の世界史的意義について次の如く喝破してゐる。

「龍の逆鱗に觸れた。そして我々は奮起したのである(日露戰爭)。遼東の巉岩を越え、黃海の波濤を蹴り、我が軍は鎬を削つて戰つた。我々は單に祖國の爲にのみ戰つたのではなかつた。最近の維新の理想の爲に戰ひ、古典文化の貴い世襲財產の爲に戰ひ、我々が全亞細亞の燦然たる更生を夢みた、泰平協和の夢の爲に戰つたのであつた。」(岩波文庫)

省みれば、滿洲事變及び支那事變の發展としての大東亞戰爭は、世界史發展そのものによつて日本民族に運命づけられた戰爭であり、正に世界史を轉換すべき歷史的戰爭である。然して、明治維新が日本世界史の發端であるならば、大東亞戰爭はその完成を將來に約束するものである。

第二節　歐米東亞侵略小史

西曆十五世紀末葉から十六世紀初頭、卽ち今から約四百五十年以前より開始された、西歐の東亞侵略の魔手は、東亞を東と西から挾擊する形で迫つて來た。これを假りに一方を西力制亞東掠路と名づくるならば、他方を西力制亞西侵路と稱することができる。

東掠路は葡萄牙、和蘭及び英國の取つた路で、結局ボンドといふ經濟的武器によつて統一され、最初は阿弗利加の南端である喜望峰を迂廻し、一八六九年スエズ運河の開鑿以後は、同運河を通過し印度洋を經て迫り來る勢力であつた。

これに反して西侵路は、最初西班牙が開拓し、後に至つて米國これを繼承し、ドルを經濟的武器とし、始め南阿米利加南端のマゼラン海峽を通過し、一九一四年パナマ運河の開通以後、同運河を經て迫り來つた勢力であつた。

これら歐米諸列强の世界制覇並に東亞侵略の消長を見るならば、十六世紀は葡萄牙、西班牙の時代であり、十七世紀は和蘭の時代であり、十八・九の兩世紀は英國の時代であり、二十世紀の前半大東亞戰爭直前までは、米を主とした米英兩國の時代であつたと見ることが出來る。

歐羅巴に於ける十字軍の遠征の結果、東西の交通大いに開け、當時全盛を誇つたサラセン文化が西歐基督敎社會に移入されるや、西歐の社會はとみに開明に進んだ。當時西歐の社會で特に珍重がられた東洋の絹織物、香料、藥物、胡椒などは、すべてサラセン人によつて輸入されてゐた

のであるが、トルコがシリア、埃及の地を占領するに及んで、サラセン人の貿易は妨げられ、その輸入が杜絶したため、東洋の產地と直接取引の氣運が勃興して來た。

この時、イタリア人マルコ・ポーロ（一二五四―一三二三年）は陸路蒙古に至つて元の世祖忽必烈に用ゐられ、止まること十七年、其間支那內地を跋涉して「東方見聞錄」を著した。その中で彼は、支那の富有なこと、南洋の香料、眞珠、寶石等の豐富なこと、殊に東方海中にあるジパング（日本）は無盡藏の金銀を產し、國王の宮殿は黃金で屋根を葺いてゐること等を書き立てたので、東洋に對する關心を非常に高めるに至つた。

其後、東洋から輸入された磁石が改良され、航海術が發達したので、當時歐羅巴に於ける唯一の强國であつた葡萄牙と西班牙は、莫大な國帑を費し、冒險に富んだ航海者を選び、相前後して海外探檢の擧に出發するに立つた。

先づ葡萄牙は歷代王室の奬勵により、十五世紀以來熱心に阿弗利加の西海岸に探檢的航海を試み、バーソロミュー・ヂヤスは印度に達すべき新航路發見の命を受け、一四八六年阿弗利加の南端喜望峰に到達したが、暴風に遭つて引返した。續いてヴアスコ・ダ・ガマは喜望峰を迂回し、一四九八年遂に印度のカルカツタに到達し得て、印度に基地を獲得することができた。

一五〇九年有名なアルブケルケが印度總督となるや、翌年ゴアを略取して根據地となし、東洋貿易の獨占權をサラセン人より奪ふに至つた。葡萄牙は更にセイロン、マラツカを收め、つづいて東進して南支那海に出て、廣東に來つて明と交易し、澳門の永代租借權を獲得して東洋貿易を獨占した。一五四三年には我が國に漂着して種子島に鐵砲を傳へた。

これと同時代に西班牙に於ても海外探檢熱が勃興し、西方に航路をとつたコロンブスは一四九二年新大陸に近き西印度諸島を發見し、次いでアメリゴ・ベスプツチは南亞米利加の沿岸を探檢し、更にマジエランによつて世界周航が企てられ、一五一九年西班牙の港を出發し、一五二〇年マジエラン海峽を通航し、一五二一年フイリツピン諸島を發見し、彼はここで土人に殺害せられたが、殘存者等は此處を出發して印度洋に出で、更に亞弗利加の南端を迂回し、一五二二年西班牙に無事歸還した。

西班牙は更に中南米の征服を試み、一五一八年コルテスにより墨西哥を、一五三三年ピサロにより祕露を、アルマグロにより智利が征せられ、中南米に植民地を得た。續いて一五七二年、曩

に發見したフイリツピン諸島を征服してこれを領有するに至つた。

かくの如く、葡萄牙及び西班牙は先驅して新大陸、新領土の發見或は奪取によつて富强を致したが、近代的植民の方法を理解せず、餘りにも掠奪的であつたため、資源涸渴すると共に土民の反感を買ひ、次いで勃興し來つた新興の和蘭や英國に壓倒せられ、昔日の勢威を失墜するに至つた。

葡萄牙、西班牙に次いで世界制覇の舞臺に登場して來たのは和蘭であつた。和蘭は初め西班牙の一屬領であつたが、その國民勇敢にして獨立を愛し、一五七九年英國の援助を得て獨立し、商工業の發達を來したが、その商船隊が西班牙の領海から閉鎖されるに及んで、自己の新しい世界を求めて太平洋に航行し、一五九六年東印度に到達してより、漸次セイロン以下印度に於ける葡領を奪ひ、更に西進して葡西兩國とカロリン群島の猛烈な爭覇戰を展開して遂に兩國を驅逐し、一六〇二年には「東洋物產の獨占的獲得」を目的として、葡西兩國が未だ企て及ばざりし近代的植民會社としての東印度會社を創立した。續いて第四代の總督クーンは、一六一九年ジャバ島を征服してバタビヤ市を建設し、これを蘭領東印度の總根據地となした。

かくして、和蘭は、西はセイロン、マラツカからジャバ、スマトラ、ボルネオ、セレベス、ニューギニアの大地域を占領し、一六二四年にはわが臺灣も和蘭の領有するところとなり、我國の貿易を全く獨占するに至つた。

英國の和蘭獨立援助を快よく思ひ居らざりし西班牙は、エリザベス女王の新敎政策に痛く不滿を感じ、日頃の怨恨を晴さんとして一五八八年艅艫相銜んで百三十隻の無敵艦隊を英國擊滅のために派遣したが、ハワード、ドレーク等の率ゐる英吉利艦隊によつて邀擊され、無殘にも全滅させられて了つた。

爾來、西班牙の海上制覇の權威は急劇に失墜し、俄然英國が西班牙に代つて、「七つの海」の支配權を握り、爾後英國は三百年に亙つて世界の海上制覇をなすに至つた。

英國がはじめて印度に來航したのは一五七九年であるが、一六〇〇年和蘭より二年早く、東印度會社を起して印度經營に着手した。この會社は最初純然たる商略的のもので、商業上の獨占を目的としたものであるが、基礎强固となるに及んで漸次政略的となり、やがて軍隊を養成し、その所有船を武裝するに至つた。一六一二年印度の最初の領有に成功するや、次いでモゴル帝國の

衰運に乘じて、漸次其の領地を蠶食してマドラス、ボンベイ、カルカツタ等をその手に收めるに至つた。

其後、十八世紀の中期から後期にかけて、クライヴ、ヘースチングスその他の植民地經營の勇士相次いで出づるや、印度に於ける佛蘭西の勢力を完全に驅逐し、更に多くの土侯國を壓服し、我が孝明天皇の嘉永二年、一八四九年全印度の征服を完了し、一八五八年「印度統治法」を發布して、ヴイクトリア女王が印度帝國の皇帝を兼ねて卽位するに至つた。

更に、英國は一八二四年第一次ビルマ戰爭、一八五二年第二次ビルマ戰爭、一八八五年第三次ビルマ戰爭の過程を經て完全にビルマを征服し、その領土と化した。

また、英國は一七七〇年ジェームス・クツクが、濠洲の東海岸のボタニー灣を發見してより十七年目の一七八七年に、濠洲に囚人の移民を送つて土民を壓服して全土を收め、こゝに囚人の植民地を建設し、次いで一八四一年にはニュージューランドを掠取した。

尙一七八七年東印度會社はペナン島を領有してマレー植民地の建設に着手し、續いてペナン對岸のウエズリー州を併合し、マラツカを和蘭より奪ひ、一八一九年炯眼なスタンフオード・ラフルズによつてマレー半島の南端シンガポールが買收され、かくしてマレー全州に地歩を築き、一八四三年には阿片戰爭によつて支那をして香港を割讓せしめ、支那大陸發展への基地を確保した。

かくして英國はシンガポールを中心として、紅海の入口のアデンからボンベイ、セイロン、カルカツタ、ラングーン、マラツカ、香港と、印度洋と西南太平洋の全基地をすべて領有し、東亞に足跡を印してより三百年間、十二月八日の大東亞戰爭の直前まで、東亞の海に君臨してゐたのである。我が滿洲事變から支那事變にかけて、英國が米國と共に、如何に露骨な對日敵性を示して來たかは、玆に改めて詳說するまでもないことである。

最後に米國は歐米諸列强の東亞並に太平洋の爭奪戰に後れて登場したため、最初甚だ不利な立場をとらねばならなかつた。

米國は一七七六年獨立以後、買收竝に戰爭により西部に向つて國境を擴張し、一八六一年の南北戰爭を經て一應國家的統一が完成するや、漸次對外進攻政策を取り、一八六七年露西亞よりアラスカを買收し、一八九八年キユーバのハバナ港にあつた軍艦メーン號が原因不明で爆沈されたのを口實に米西戰爭を起してキユーバを保護國とし、ポルトリコを獲得し、フイリツピン諸島及

びグアム島を奪ひ、更に布哇の王朝に反對する革命派を支持して結局これを併合し、以てフイリツピン及び布哇を太平洋並に東亞に對する進攻作戰の根據地となし、一九一四年にはパナマ運河を開鑿して大西洋から太平洋への直通路を開き、兩洋作戰の連絡を可能ならしめた。

更に、米國は一八九九年國務長官ヘイの名に於て支那の門戸解放、領土保全を提唱して、支那に對する深き關心を表現し、一九〇五年には日露間の媾和を斡旋した恩を笠に着て、滿鐵の買收計畫を工らみ、次いで第一次世界大戰の後、一九二一年華盛頓條約を强要して我國の海軍々備を劣勢比率に導き、同じく支那に關する九國條約によつて、事實上支那をして米國を中心とする國際管理の狀態に置かんと企て、一九二四年には極端なる排日法を制定して、米國西海岸より勤勉な日本人を驅逐せんとした。

滿洲事變起るや、英佛等の國際聯盟の指導國と提携して日本を壓迫し、遂に日本をして聯盟脱退を餘儀なくさせ、支那事變勃發するや終始妨害の擧に出づるのみならず、進んで蔣政權を支援して事變の解決を遷延せしめ、英蘭等を誘つて日本の周邊に對日包圍陣を結成し、日本を壓服せんとするに及び、遂に我が國は大東亞戰爭を宣戰するに至つたのである。

第三節　米英の對日包圍陣結成と大東亞戰爭の勃發

支那事變の處理と東亞新秩序の建設を眼目とする日本の自主的外交は、近來まことにすさまじいものがあつた。

昭和十五年九月獨伊對英佛の第二次歐洲大戰勃發するや、同月二十九日、日本は獨伊兩國と三國同盟條約を締結し、以て世界新秩序建設の理想を明かにし、併せて米國の參戰阻止を圖つた。

つづいて、同年十一月三十日、日本は新生中華民國政府を承認し、その間に善隣友好、共同防衛及び經濟提携の三原則に立脚して、日華基本條約を締結し、同時に日滿華三國共同宣言を中外に發表し、東亞新秩序建設の基礎を確立した。其後日華の間には經濟提携强化が具體化され、更に十六年七月一日獨伊その他歐洲樞軸國の南京政府承認となつて、新中國の發展漸くその緒につくに至つた。

昭和十五年十一月十日、光輝ある二千六百年の祝典を擧行、肇國の大精神を顯揚し、人類の福祉と萬邦協和への日本の大理想を宣明し、洋々たる將來への飛躍を約束するに至つた。

かくの如く、事變處理竝に世界新秩序建設に向つてそれ〴〵巨大な一歩を進め、日本の國礎愈々固く、帝國外交も漸く軌道に乘つて來たが、昭和十五年九月には佛蘭西政府の同意の下に、皇軍は北部佛印へ進駐を開始し、同年十二月二十三日には日泰友好和親條約を締結し、共榮の理想と平和的意圖の下に、日本の南進態勢は茲に愈々その第一歩を踏み出すに至つた。

越えて昭和十六年三月、日本は泰・佛印の紛爭を居中調停し、更に五月九日には右兩國の和平條約を斡旋し、茲に始めて東亞の問題を東亞的に解決するに至り、更に五月六日には日・佛印經濟協定の調印、つづいて七月二十九日には日佛印共同防衛協定成立して、直ちに皇軍の南部佛印進駐となり、ここに泰佛印の兩國が我が共榮圈の建設に協力するに至つた。

これと平行して、日本は北方の安全と平和を確保するために、昭和十五年四月十三日ソ聯との間に中立條約を締結し、つづいて六月十一日には日ソ通商協定を成立させた。間もなく六月二十二日、獨ソの開戰となつたが、右中立條約によつて日本は獨自の立場をとることができた。

此間我國は昭和十五年九月以來、蘭印との間に平和的な經濟交渉を續けてゐたが、十六年六月十七日に至り、妥結の見込みなく交渉打ち切りとなり前途多大に憂慮されるに至つた。

日本の外交針路は、日華基本條約といへ、日ソ中立條約と云へ、泰佛印間の紛爭調停と云へ、更に蘭印への經濟交渉といへ、一つとして世界竝に東亞永遠の平和を念願しての外交でないものはなかつたが、かくして日本の世界竝に東亞に於ける地位が、日に日に强化さるるや、米英の對日壓迫、對日攻勢は愈々熾烈となり、遂には蘭印・重慶を誘つて對日包圍の陣形、即ち所謂ABCDの對日包圍陣を結成するに至つた。

即ち、米英は對蔣援助を强化して莫大な援蔣借款を供與すると共に、各種の軍需品を供給し、皇軍の南部佛印への進駐となるや、米國はその報復手段として直ちに英蘭を誘つて、昭和十六年七月對日資產凍結令を斷行（米英は二十六日、蘭は二十八日）するに至つた。獨ソ開戰により我が對歐貿易は遮斷され、勢ひ日ソ通商協定も實行困難に立ち至れる時、我國輸出入貿易の七割を占むるこの經濟斷交は、日本の生存そのものを脅かすものであつて、武力による挑戰にも比すべき敵對行爲であつた。

米英は一方かゝる對日經濟包圍陣の强化と共に、他方軍事包圍の手を進め、二月十五日ワシントンに於て米英濠蘭の對日强壓連絡會議、四月九日マニラに於ける米英蘭の對日共同防衛協議、

八月一日ルーズヴエルト、チヤーチルの對樞軸最高戰略協議の洋上會談、十月四日米英東亞軍首腦部のマニラに於ける作戰會議等を企てゝ、日本の周邊に武備を增强し、軍事包圍の態勢を完成するに至つた。

かくして東亞を永遠に支配と隷屬の下に置かんとした米英は、重慶を飽くまで援助して支那事變の處理を阻害し、共榮圈の建設に協力せんとする泰及び佛印をも軍事的に强壓せんとして、故意に日本の南進を阻止せんとした。

元來、滿洲事變は、日本の世界新秩序建設を目標としての東亞新秩序建設への新しい而も具體的な一歩であり、それは更に獨伊をも動かして、獨伊による歐洲新秩序建設への出發となつた。

支那事變は滿洲事變の理想を繼承し、それを更に廣大なる地域に於て實現するものであつた。支那事變が進轉し、抗日蔣政權が奥地に遁入して汪精衞氏を主班とする新生中華民國が誕生し、日本と協力するに及んで、東亞新秩序の建設は巨大な一歩を進められた。

かくの如く、滿洲事變及び支那事變が世界並に東亞新秩序の建設を目指す聖戰であるならば、それは當然世界舊秩序の存在を豫想するのである。そして、その世界舊秩序の最高支配者は云ふまでもなく米英なのである。

かくして、米英は滿洲事變及び支那事變に對しては、終始一貫して執拗なる妨害の態度を取り陰に陽に對日壓迫の行動を繼續して來た。ここに於て滿洲事變及び支那事變は、既にその勃發當初より、それ自體に於ては決して處理解決されず、結局世界的規模に於てのみ解決し、處理せねばならぬ性格と運命を內包してゐた。

勿論日本は飽くまで平和的態度を持し、それ自體に於て、云はば東亞の內部に於て解決せんと絕えざる努力を續けて來た。獨伊對英佛の第二次歐洲大變が勃發せし時も、支那事變がそれに捲き込まれることを極力警戒し、第二次歐洲大戰に對しては不介入方針が堅持された。

それにも拘らず、米英の無暴なる挑戰と、執拗なる妨害工作により、日本の希望と努力は空しく消え去つたのである。

米英の主導による對日包圍陣は益々强化され、軍事的にも經濟的にもそれは鐵環の如く迫り來つて、日本の生存は正に危殆に瀕するに至つた。

而も日本は隱忍自重、事態を平和的に解決せんとの希望を失はず、昭和十六年四月以來、對日

壓迫の元兇たる米國に對し、東亞竝に太平洋の平和維持について會談を申込んだが、米國は我が公正妥當なる提案を拒否し、何等現實の事態を認識せざる原則的架空論を固執して、支那及び佛印よりの我が陸・海・空軍の無條件全面撤兵、南京政府の否認及び日獨伊三國條約の破棄等、日本の絶對に容認し得ざる米國の一方的立場を强要するに及んで、日米會談は遂に十一月二十六日、八ヶ月に亘る日本の誠意の披瀝と眞摯なる努力にも拘らず、空しく決裂するの止むなきに至つた。決裂の責任が無論米國側にあることは云ふまでもない。

かくして、日本は自存自衛起つて一切の障碍を破碎せんとし、畏くも十二月八日大詔を仰いで對米英戰に蹶起するに至つた。

忠勇無比、勇猛果敢なる我が皇軍の將兵は、開戰劈頭ハワイの眞珠灣を襲つて一擧に米國の太平洋艦隊を全滅し、マレー沖海戰に於ては英國東洋派遣の主力艦二隻を轟沈させて英東洋艦隊に起つ能はざる打擊を與へた。

「開戰直後十二月十日に日佛印軍事協定成立し、十二月十一日に日泰攻守同盟締結されて泰國は日本との盟約を軍事的に强化し、更に同日、獨伊の對米宣戰布告と共に日獨伊三國間に單獨不媾和の條項を含む對米英戰完遂の新軍事協定が締結され、大東亞戰爭完遂の外交態勢は愈々整備强化されるに至つた。

續いて、戰線は全太平洋水域と陸地に擴大し、我が陸・海・空軍の猛進擊に抗する術もなく、香港の陷落、グアム、ウエーキ兩島の占領、マニラの陷落、マレー半島の席卷、シンガポールの陷落と隣く間に赫々たる大戰果を收めた。

難攻不落のシンガポール制覇成るも皇軍は追擊の手を緩めず、ボルネオ、セレベス、スマトラ、ジャバと相次いで全蘭領印度を制壓し、ビルマへ進擊してラングーンを陷れ、今や濠洲と印度の作戰を構想するまでに立ち至つた。

海軍の奮戰もまた目醒ましく、上陸作戰の爲の輸送船團の活躍は云ふまでもなく、眞珠灣襲擊及びマレー沖海戰につづいてスラバヤ沖海戰、ジャバ沖海戰その他數多くの海戰によつて、殘存米英蘭印太平洋艦隊を捕捉殲滅し、剩さへ我が潛水艦は米國太平洋沿岸にまで出沒して、米國をして恐怖の餘り色を失はしめるに至つた。

かくして、我が皇軍は四ヶ月を出でずして、ABCD對日包圍陣を木葉微塵に粉碎し、無類の

大戰果を確保したが、これはいふまでもなく御稜威の下、我が陸・海・空軍の世界戰史にその比を見ざる、水も漏さぬ一體緊密な協同作戰の賜なのである。特にハワイ眞珠灣襲擊の際に活躍せる特別攻擊隊の純忠、國に報ゆる行動に對しては、日本人としてたゞ〳〵感涙に咽ぶ以外、その感情を表現する術を知らないのである。

「皇祖皇宗ノ神靈上ニアリ」、天佑神助を信じて皇軍將士の勇戰奮鬪するところ、大東亞戰爭の前途は輝しい榮光に充ち滿ちてゐる。

第四節　大東亞戰爭の世界史的意義

正に我國にとつて乾坤一擲の大東亞戰爭は、世界史創造の大戰爭である。然らば大東亞戰爭の性格竝にその世界史的意義は如何なる點にあるか。先づこれを結論的に要約すれば、大東亞戰爭は次の六つの性格を有つてゐる。

第一に、大東亞戰爭は世界觀の戰ひである。第二に、大東亞戰爭は世界新秩序建設のための戰爭である。第三に、大東亞戰爭は討米英の世界戰爭の有機的一環である。第四に、大東亞戰爭は東亞民族解放のための大解放戰爭である。第五に、大東亞戰爭は大東亞共榮圈建設のための建設戰爭である。第六に、大東亞戰爭は長期持久戰爭である。そして大東亞戰爭は、如上の理由により、見透しとして勝利の榮冠を以て約束されてゐる。

これを更に具體的に說明すれば、先づ第一に、大東亞戰爭は世界觀の戰ひである。

大東亞戰爭は單なる武力制覇の戰爭ではなくして、文化體系を異にする世界史爭奪のための戰爭である。卽ち米英の信奉する近代民主々義的世界觀に對する、八紘を宇と爲す皇道的世界觀の抗爭であり、米英的覇道的秩序に對する日本的道義的秩序の戰ひであつて、それは生死を賭して終局まで戰ひ拔かねばならぬ世界觀の爭覇戰である。

第二に、大東亞戰爭は世界新秩序建設の爲の戰爭である。

日本は大東亞に、獨伊は歐羅巴に新秩序を建設しつゝあるが、それを妨害して來たのは米英であつた。こゝに米英が日獨共同の敵となつた。

米英を中心とする世界體系は、世界史發展の必然によつて崩壞に直面してゐる。それは軍事的にもその支配領土と支配海洋を維持する力を喪失し、政治的には各被支配民族に對する權威を失

墜し、經濟的には自由主義經濟としての世界經濟が既に解體に瀕し、かくして米英的舊秩序はあらゆる點から維持し難くなつてゐる。

かゝる舊秩序に最後の一擊を加へて、その解體と沒落を早め、その跡に共榮的、廣域的な道義的新秩序を建設せんとするのが、大東亞戰爭の目標である。

第三に、大東亞戰爭は討米英の世界戰爭の有機的一環である。

世界新秩序の建設は、世界舊秩序の支配者である米英を擊滅することによつてのみ可能である。こゝに、個別的に戰はれた亞細亞と歐羅巴の戰爭は、共同の目的を意識することによつて、討米英の世界戰爭として飛躍的に發展するに至つた。從つて、それは終局まで戰はるべき底の熾烈なる世界戰爭である。

大東亞戰爭開始の直後、日獨伊はかゝる世界戰爭完遂の責任を分擔し、併せて戰略・戰術の一致を期する爲、軍事協定を締結したが、それはかゝる軍事協定の締結なくしては、世界戰爭を勝利を以て完遂し得ないからである。

從つて、世界戰爭の勝利なくして大東亞戰爭の終局の勝利はあり得ない。日本の勝利は獨伊の勝利となり、獨伊の勝利は日本の勝利となつて、世界戰爭の勝利を達成すると共に、各自の勝利を確保し得るのである。

第四に、大東亞戰爭は東亞民族解放の爲の民族解放戰爭である。

米英は日本の敵であるばかりでなく、東亞民族全體の敵である。米英は日本の生存を脅かして來たのみならず、東亞の諸民族を過去數世紀に亙つて威壓して來た。

然るに、悲しい哉、東亞の諸民族は獨力以て米英の壓政を排除し、その羈絆から脫却することはできなかつた。こゝに、日本は自己の生存を維持すると共に、東亞民族全體の生存を維持し、以てアジア人のアジア、本來のアジアを取り戻す爲に、支配者米英に對して鉾を取つて起ち上つたのである。大東亞戰爭は、正に强きを挫き、弱きを助ける日本武士道傳統の精神に立脚しての、東亞民族解放の一大義戰である。

第五に、大東亞戰爭は大東亞共榮圈建設の爲の建設戰爭である。

今次聖戰の一つの特徵は、一面戰爭、一面建設卽ち作戰卽建設なるところにある。日本は戰爭發端以來、一面作戰を遂行しつゝ、一面民族を解放し、或は獨立させつつ、直ちに共榮圈の建設

を進めて來てゐる。

從來の如く、戰爭が終つて媾和談判があり、それより建設に入るのではなくして、作戰に重點を置き乍らも、(一)近き將來のより大なる決戰に備へ、(二)大東亞の終局的な國防體制を確立するために、(三)生產力擴充のために、(四)自國民及び共榮圈內諸民族の生活の安定を計る爲に、(五)最後に米英的世界經濟の紐帶より完全に離脫して、廣域的自給自足の經濟體系を確立するために、作戰に卽應しながら建設を進めて行かねばならない。

こゝに於て、共榮圈內の諸民族に對する進んだ民族政策と共に、資源作戰が極めて重要であつて、資源作戰の成果を基礎として、次の作戰と新しい建設がその緖につくのである。

第六に、大東亞戰爭は長期持久戰である。

大東亞戰は如上四つの性格によつて、長期持久戰となる可能性と必然性を有つてゐる。

大東亞戰爭は米英の世界制覇、世界體系に對する鬪爭である。米英はまだ〳〵物資に惠まれ、而も極めて執拗な國民性を有つて居り、簡單に屈服を豫想され得ない。緖戰に於ける大敗の結果、當分はゲリラ戰に蠢動するであらうが、フル・スピードで再軍備を完成し、準備成り次第、所謂

【大東亞戰爭に於ける奉天會戰竝に日本海々戰】の一大決戰を挑んで來るに違ひない。また事實上かくの如き決戰を經ることなしに、大東亞戰爭終局の勝利は得られない。

ここに於て、我々は最後的決戰にも必勝を期するため、長期戰を豫想して、更に一段の奮勵努力により、その準備を完成し、以て敵國の再起反擊の企圖を挫折せしめねばならない。

如上述べた六つの性格こそ、正に大東亞戰爭の世界史的意義を示すものであり、この性格によつて、大東亞戰爭は從來一切の戰爭とその形態と性質を異ならしめるものであつて、大東亞戰爭が正に世界史轉換の爲の一大歷史的戰爭である所以がここに存する。

世界史轉換の爲の大東亞戰爭の完遂こそ、正に日本の歷史的使命である。

第二章　大東亞建設の原理

第五節　大東亞建設の理念

大東亞建設の根本理念は、一如同仁の無上の大御心を奉戴して、大東亞共榮圏内諸民族のすべてが、安定と平和の幸あるよき生活をなし得るよう導くことにある。萬邦共榮と平和の念願こそ、我が肇國以來の傳統的な精神である。

新しき創造は何時も古き傳統に立脚してのみ成就される。歴史的傳統なくして歴史的創造はあり得ない。明治の御維新が神武創業への復古によつて達成された如く、大東亞建設の根本理念も、その淵源を遡れば、肇國の精神竟に歴代の御詔勅によつて明示されてゐるといふことができる。

天照大神の詔に、「是ノ漂ヘル國ヲ修理固成セ」と仰せられた。即ち、くらげなす混沌を修め鑒へて道義的國家の創造、國生みを御宣言遊ばされたのである。

神武天皇の御即位建國の大詔に、「夫レ大人ノ制ヲ立ツルヤ、義必ズ時ニ隨フ。苟クモ民ニ利スルアラバ、何ゾ聖ノ造タルニ妨ハム。上ハ則チ乾靈ノ國ヲ授ケタマヒシ德ニ答ヘ、下ハ則チ皇孫ノ正シキヲ養ヒタマヒシ心ヲ弘メム。然ル後ニ、六合ヲ兼ネテ以テ都ヲ開キ、八紘ヲ掩ヒテ宇トス、亦可カラズヤ」と仰せられた。即ち、全世界を掩ひて家と爲さむとの思想であつて、爲サムコト、こゝに中外に施して悖らぬ日本の最高國是は決定された。

下つて、明治元年三月十四日、畏くも　明治大帝は億兆安撫國威宣布の御宸翰を賜はりて曰く、「朕茲ニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ、列祖ノ御偉業ヲ繼述シ、一身ノ艱難辛苦ヲ問ハス、親ラ四方ヲ經營シ、汝億兆ヲ安撫シ、遂ニハ萬里ノ波濤ヲ拓開シ、國威ヲ四方ニ宣布シ、天下ヲ富岳ノ安キニ置カン事ヲ欲ス」と。これ「五箇條の御誓文」と共に、新らしき世界史の創造、八紘一宇の建設に御出發遊ばされた、　明治大帝の實に雄渾極まりなき偉大なる御精神の發現に外ならない。

更に支那事變勃發してより三年、重慶支援の米英の對日敵性は日を次いで露骨となるや、　今上陛下には痛く時難を御宸念遊ばされ、昭和十五年九月二十七日、竟に日獨伊三國條約締結を御決意遊ばされ、「大義ヲ八紘ニ宣揚シ坤輿ヲ一宇タラシムルハ實ニ皇祖皇宗ノ大訓ニシテ朕カ夙

夜眷々措カサル所ナリ」「惟フニ萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンセシムルハ曩古ノ大業ニシテ前途甚タ遼遠ナリ」と仰せられ、八紘一宇の大精神を改めて御宣揚なされた。

次いで　今上陛下は昨年十二月八日大東亞戰爭に際し、畏れ多くも大詔を渙發あらせられ、「抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ夤々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ」と仰せられた。

帝國政府はこの大詔の大御心を奉戴して歷史的な聲明を發表した。「抑々東亞ノ安定ヲ確保シ世界平和ニ貢獻スルハ、帝國不動ノ國是ニシテ、列國トノ友誼ヲ敦クシ、此ノ國是ノ完遂ヲ圖ルハ帝國カ以テ國交ノ要義ト爲ス所ナリ」「只英米ノ暴政ヲ排除シテ東亞ヲ明朗本然ノ姿ニ復シ、相携ヘテ共榮ノ樂ヲ頒タント翼念スルニ外ナラズ」。

以上列聖の大御心竝に肇國三千年の歷史を省みるならば、皇國日本の大道は炳として明らかであり、それがそのまゝ大東亞建設の根本理念となるのである。

寔に我が國が「大和國」と號し、我が民族が「大和」民族と稱するは、名は體を表はすといふ如く適切無比の表現である。我が大和民族位平和を念願し、攝取不捨の偉大なる包容力を以て、異民族と外界文化を受容し、攝取し、陶冶して、日に新に、日に日に新に、より偉大なる國家と優れた文化を創造し、建設し來りたる民族は、世界にその比を見ない處である。

もとより、世界歷史に於て、希臘の智慧、基督の愛、佛陀の慈悲及び孔子の仁等の高き敎へと道德が說かれ、それ〳〵大きな足跡と影響を當代竝に後世に遺した事實はあるが、然し現人神としての無上位の　天皇を上に戴き、君民一體、世界に比類なき磐石の如き强固な國家的組織を形成し、三千年の長き間、絕えず平和への努力を續けて來つたといふが如きは、洵に世界史の一大偉觀でなくて何であらう。

勿論上代の三韓征伐から元寇の役を經て、明治以後の日淸、日露の戰役及び第一次世界大戰から、滿洲事變、支那事變、更に今日の大東亞戰爭に至るまで、日本は屢々外征の師を起したことは歷史に明らかな事實である。然し、それは皇國の尊嚴を傷つけ、皇國の獨立を危殆に瀕せしめんとした暴擧を敢てするに至つた敵國に對して、大義に立つて膺懲の大鐵槌を下し、神武不殺、

一殺多生の活人劍を揮ふたまでである。

大東亞戰爭直前の情勢は、正に皇國興亡の岐路に直面してゐた。所謂ＡＢＣＤ對日包圍陣は軍事的にも經濟的にも完成し、此の儘に推移せんか、我が國は座して死を待つ結果に至るなきやを憂慮された。

此の時、突如宣戰の大詔は渙發あらせられた。支那事變以來、一部國内に鬱積した重苦しい陰慘な空氣、稍もすれば傍觀者的態度に陷らんとする態度は一瞬にして清掃された。寔に神々しくまた清々しい朝であつた。國民は大御心の深きに感泣し、一死報國の決意を新たにした。大詔には、「帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衞ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ」と仰せられた。

日本はその光榮と自存の爲に意を決して起ち上つた。それは日本の必死の生存權の爲めであつた。その限りに於てそれは日本の立場の主張である。日本は生きるために、日本の生活圏を確保するために、起たざるを得なかつたのである。

しかし、日本は單に日本の立場の爲にのみ起ち上つたのではない。日本は日本の立場を生き拔くと共に、米英の帝國主義によつて搾取支配されてゐる大東亞十億の民族を解放して、アジア人のアジア、卽ち大東亞共榮圏を建設して、東亞永遠の平和、延ひては世界の平和に寄與せんとする大義の爲に起ち上つたのである。換言すれば、日本はその光榮と自存の爲めであると共に、萬邦共榮の道義の爲に、日本の「立場」を大東亞の「場」に於て實現する爲に起ち上つたのである。

畏れ多くも、大御心は對立を超えた無上と拜され、例へば一天高く懸つて萬物を照破する太陽の、如きものと表徵されるのであつて、暗きも謬れるも、その廣大無邊に遍ねき光によつて正され淨化されるのである。

我々は心を謙虛にして、この大御心のまにまに、廣き包容力と大らかな心を以て、容るべきは容れ、棄つべきは棄て、攝取すべきは攝取し、折伏すべきは折伏し、圓融無礙、東西文化の全遺産を正しく繼承し發展して、新らしき世界史の創造、新しき國生みに邁進し、以て萬邦共榮の樂土を建設して皇基を振起すると共に、世界の平和に寄與すべきである。

第六節　大東亞の地政學

大東亞と呼ばれる東南亞細亞は、大陸圏と海洋圏の交錯する地域である。

先づ大陸圏は、世界の屋根と云はれるパミル高原を頂點として、そこより一連の峨々たる山脈が四方に射出してゐる。北東に延びるものは、タリム盆地を抱く天山山脈から、ゴビ沙漠を包むアルタイ、ヤブロノイ兩山脈及び興安嶺を連ねて遠く西比利亞の東端スタノボイ山脈に續いて居り、東は崑崙山脈を經て支那大陸に續き、南東は西藏高原及び世界最高のエベレスト山を含むヒマラヤ山脈を經て印度の沃野に接して居り、西はイラン高原を經てペルシヤ灣に臨んでゐる。

これらの高地はそれ〴〵太平洋及び印度洋に注ぐ大河川の淵源をなし、東方西比利亞と北滿に跨がる黑龍江から、支那大陸の黃河、揚子江、更に南して印度支那半島のメコン、メナム、イラワジの諸河川、印度に至つてガンジス、インダスの兩大河を起し、西南亞細亞に於てはエウフラテス河の源を成してゐる。

然して、これら諸大河の下流々域は、概ね一望千里見渡す限りの大沃野を形成し、亞細亞的水田農業の基礎を成してゐる。

次に、大東亞の海洋圏は眞に廣大無邊の大水域を包含してゐる。北はカムチヤツカ半島とアリューシヤン列島に包まれるベーリング海を基點として、オホーツク海、日本海、黃海、東支那海及び南支那海と、東北から西南にかけて斜線を描いて連鎖を形成し、それよりマラツカ海峽の東南は濠亞地中海卽ち大東亞海に連なり、西南はベンガル灣と亞剌比亞海を含む印度洋に接觸してゐる。オホーツク海から大東亞海に至る連鎖內海の外側は、廣大な太平洋水域である。

大陸の東北は親潮と云はれる寒流の影響によつて寒帶圏を形成し、大陸の東南は黑潮と稱せられる暖流によつて熱帶圏を形作り、暖流寒流の交錯する地域に溫帶圏を形成してゐる。

かゝる大陸と大洋の綜合された一大地域としての大東亞の地理的環境は、その廣大な地域にふさはしい尨大な人口集團を包容してゐる。卽ち、全世界の人口を假りに二十四億と算定すれば、その約半の十一億二千萬の人口がこの地域に密集してゐるのである。

そして、この人口集團は大體五つの人口ブロックに分つことができる。その一は、我が日本及び朝鮮、滿洲を含む約一億四千萬の人口ブロックであり、その二は、四億五千萬の支那の人口ブロックであり、その三は、三億九千萬の印度の人口ブロックであり、その四は、支那と印度の中間に位する印度支那、タイ、ビルマ及び海峽植民地を含む六千萬人の印度支那半島の人口ブロッ

クであり、その五は、大東亞海の多島海に位置するジャバ、スマトラ、ボルネオ、比律賓等を含む南洋島嶼の八千萬の人口ブロックである。

かゝる大陸と大洋が連續し、山岳と沃野が接觸し、寒流と暖流が交流し、温寒熱の三帶が竝存し、然して地文と人文の交錯するところに、大東亞圏の第一次的な地理的特性がある。

和辻哲郎博士は世界の風土的特徴を、牧場型、沙漠型、そしてモンスーン(季節風)型の三つに規定した。牧場型は希臘、羅馬に起源する西歐の文化を生んだ風土の型であり、沙漠型は亞剌比亞、猶太、埃及の宗教と文化を生んだ風土の型であり、モンスーン型は印度、支那の東方亞細亞の文化を生んだ風土の型である。

モンスーンは季節風である。特に暑熱と濕氣を多量に含んだ夏の季節風であり、熱帶の太洋から陸に向つて吹く風である。

大東亞の西南部はかゝる季節風の吹き捲る地域であり、それが多量の雨を齎らして、そこに亞細亞特有の風土を形成せしめてゐる。

更に、我々は基本的な生産の様式に從つて、大東亞の地域と西歐の地域の特徴を區別し、歐羅巴とアメリカを含む西歐の地域を麥作地域とするならば、大東亞は一大米作地域であると稱することができる。そして、麥作地域と米作地域はそれ〴〵國家社會の制度、組織、風俗、習慣等を異ならしめてゐるが、その最も特徴的な點は、米作地域がいづれも土着を基礎として集約的にして自給的なるに反し、麥作地域は多く收利を根本として商業的、資本的なるところにある。西歐に於ては、近代資本主義の發展によつて、農業に於ても機械を主とした大經營の資本主義が發展したのに反して、東洋に於ては農業に關する限りかゝる資本主義化は行はれなかつた。それは東洋の農業に、封建遺制が殘存してゐるからだといふ單純な理由のみによるのではなくして、更に本質的な水田農業それ自體の特性によつて、西歐の麥作地域に於けるが如く資本主義化の途を辿ることがなかつたのである。

かくの如く、東南亞細亞は風土的にモンスーン的形態であることによつて、生産的には水田耕作の地域である。「水なければ米作なし」と東洋の古い諺が云つてゐる如く、稻は最も多濕性の禾本科植物であつて、稻の成長には高い温度と多量の水を必要とするのであるが、亞細亞の季節風はそれを充分に供給する。ここにモンスーン地域に水田耕作が發生した所以がある。そしてかゝ

る水田耕作の基礎の上に、アジア特有の宗教的な農耕文化が發展するに至つたのである。

また米は多くの食物の中で、最も豐富なカロリーを含有してゐるから、水田地帶の人口收用力は實に尨大であつて、ここに「亞細亞の大群集」が發生する秘密がある。例へば支那や印度は、歐羅巴の如く都市の發達も工業の發展もなかつたが、歐羅巴と同じ位の面積に於て、それ〴〵歐羅巴に匹敵する尨大な人口を密集させてゐるといふことは、正に驚くべき事實である。

大東亞の各地域には、大東亞の國防を充分に整備し得るだけの豐富な國防資源が既に開發されて或は埋藏されてゐることは明白な事實であるが、先づ第一に、大東亞は農業地域であり、その民族は農業民族であり、その文化は農耕文化であるといふことが、大東亞の地政學的特質の最も基本的なものであるといふことができる。

最後に、簡單に地政學に就てデツサンするならば、人文地理學に起源を有ち、ラツツエル等によつて發展され、カール・ハウスホーフアーによつて一應體系づけられた地政學は、極めて近代的な學問であつて、盟邦獨逸に於ては、歐羅巴新秩序建設の問題に絡んで急速に發展せしめられた。我が國に於ても、地政學は哲學に於ける歴史哲學と共に、時代の寵兒とも云はれる學問であるが、地政學は一言にして云へば地理と歴史、歴史と地理の一如の學問、民族を含む生活空間の學問であり、また從來の學問、科學が、稍もすれば、人間の主體的意志、主體的作用も無視した純粋に客觀的な分析、研究であつたのに反して、地政學は客觀的、環境的、地理的な研究に、政治的な豫斷や歴史的實踐の態度を導き入れたものであつて、それは最近の物理學や哲學の如く、主體的・客體的、客體的・主體的な科學なのである。

また、この學問は、政治的方向と指針の基礎を與へるものであるため、歴史の轉換期には多少とも地政學的な思考が發達する。例へば明治維新前、林子平は既に地政學的觀察をなし、吉田松陰は「地を離れて人は無く、人を離れて事は無し、故に人事を論ぜんと欲せば先づ地理を觀よ」と喝破した。日清、日露の戰役を經て、正に日本が隆々と發展して來た時、志賀重昂などは地理の歴史的、政治的理解を深め、經世的な地政學的思想を展開した。

大東亞の地政學は、それ〴〵國防地政學、資源地政學、民族地政學等々に具體的な研究の歩を進められねばならないが、それに就いては後段に於て若干觸れる機會があると思ふ。

地政學がカール・ハウスホーフアーの云ふ如く、「世界新秩序建設計畫の科學的武器」であるな

らば、大東亞の地政學は正に大東亞共榮圏建設の科學的武器と稱することができる。大東亞の「ありどころ」、大東亞の生活空間、更に嚴密には大東亞の「場」と、そこに生活し生産する民族を、正しく認識し理解することによつてのみ、大東亞の國防的・政治的・經濟的・文化的な建設を適確に推進し得るのである。

此の意味に於て、大東亞の地政學は、大東亞建設の計畫と指針の基礎を提供する必須的な學問であるといふことができる。

第七節　「人」による「人」の建設

大御心を奉戴し、大東亞の地域に共榮圏を建設するに際して、最も大切なことは「人」に依る「人」の建設であるといふことを深く理解することである。建設の指導者若くは主體者も「人」(日本人)であれば、建設の協力者も「人」(諸民族)である。

我々日本人は建設の指導者、主體者として、大東亞の建設を日本から考へることは一向差支へないことであり、また日本の指導なくして大東亞の建設は決して達成されないが、しかし、それと共に、「萬邦をして各々其の所を得しめ兆民をして悉く其の堵に安んせしむる」といふ大御心を奉戴して、共榮圏内各民族の立場をよく理解し、各民族がその文化の自主性を取り戻す運動に協力し、それを強く支援せねばならない。

米英蘭等の白人帝國主義は、たゞ自國の繁榮と發展の爲に、その植民地の資源のみを開發し、民族と文化の發展に意を用ふることがなかつた。

これに反して、我々の建設は、日本と共榮圏内全民族の眞の福祉と共存共榮の爲に、その資源を開發すると共に、また人間と文化をも開發せねばならない。かくして大東亞の建設は、飽くまで「人」による「人」の建設を主眼とせねばならない。

勿論、作戰の進行中は、作戰に必要なる軍需資源が、先づ第一に開發されねばならぬことは止むを得ぬことであり、更にまた、大東亞國防體制確立の爲にも、それに必要なる資源の開發は絶對に遲延を許されないが、大東亞道義秩序建設の根本目標が、「人」による「人」の建設にあることは否定することができない。

建設の協力者としての「人」である民族については、後段「大東亞民族政策」の項に於て詳述

するから、ここでは建設の主體者としての「人」について若干闘説して見たいと思ふ。

過ぐる第七十九帝國議會の衆議院豫算總會の席上、東條首相は次のように云はれた。

「米國の軍備計畫は一笑に附してはゐない。しかし戰爭は三つの要素から成り立ち、第一は人間、第二は訓練、第三は物であるが、私は第一、第二が極めて重要であると考へる。物は第三位である。人と訓練を主力とするわが帝國と、物を中心とする米國の行方を考慮するとき、われには戰勝の確信がある。」

「場」に立たぬ「行」はなく、物に關はりなき人のないことは明らかであるが、けれども「場」は何時も行の領域としての「場」であり、物は人あつての物であることを考へるならば、この首相の説明は、言簡なれども意味實に深長にして、こゝに物質中心、機械中心の米英に對して、物質や機械よりも人間を重んずる傳統的な日本の特徴がある。

米國が誇示する如く、假りに何萬臺の飛行機や戰車を製作し、何百艘の艦艇を建造しても、それを、自動的に或は電波ででも自由自在に動かすことができない限りは、それを操縱し、驅使する人、而も卓拔な精神力を有ち、優秀な技術と猛烈な訓練を經た「人」を必要とする。かゝる「人」なき限り、それは畫に描ける飛行機や軍艦と同じであつて、鎧袖一觸、數の多寡を問はないことは、十二月八日以後の皇軍の大戰果に於て歴史的な實例が示されてゐる。

然して、斯る「人」は一朝一夕にして養成し得られるものではなく、殊に卓拔な精神力に至つては、悠久の古より傳はる民族の歴史的傳統に根ざしたものであつて、かゝる歴史的傳統なき民族、或は近代の物質中心、機械中心の文明による生活の安易化によつて、骨の髓まで蝕まれてゐる民族の到底模倣し得るところではない。

かく考へると、日本民族は實に惠まれたものを有つてゐる。畏れ多くも「教育ニ關スル勅語」には、「我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ、德ヲ樹ツルコト深厚ナリ」と仰せられてゐるが、日本といふ國はそも〳〵このような國柄であつて、それが水戸學によつて大成された國體の精神や、葉隱などに端的に表現されてゐる武士道精神などによつて、三千年間民族的自己鍛錬を續けて來たのである。

かゝる歴史的精神を緯とし、それに颱風的性格といはれる日本風土の酷烈なる自然を經として、日本民族の精神は生成されて來た。

然らば、大東亞建設の指導者或は主體者としての「人」は、如何な資格を具へたものでなければならないか。

先づ第一に、大御心を奉戴しその實踐に挺身するものでなければならない。大御心は無上と拜され、無上心に基く無上行として、廣大無邊の慈愛の源と理解せられる。さればかゝる大御心を共榮圏内全民族におし及ぼし、各々がその所を得しむるよう導かねばならない。建設の指導者が道德的權威を保つことはもとより必要であるが、また同時に極めて寛大な心性を以て懇切に指導し、各民族がその個性を生かし、その自主性を延ばし得るよう飽くまで協力せねばならない。

第二に、指導者は常に大東亞の地政學的特質について理解を深めねばならない。人間の「行」が何時も「場」に於ける行であるように、建設は何時も一定の地域、一定の國土の上に於ける建設なのである。

一定の地域、一定の國土とは横には特殊の地理的構造を有ち、縱には特有の歷史的傳統を有つ「ありどころ」である。一定の地理と歷史、歷史と地理の交錯綜合された所に、一定の地域の特性がある。一定の地域とはどこにもある普遍的な地域ではなくして、そこだけの特定の地域である。

然らば一定の地域の地政學的特質を十分理解することなくしては、具體的な建設を進めることはできない。

鄕に入つて鄕を知らずしては、鄕を指導し鄕を建設することはできない。自分は高く止つてゐて、操人形を手操り寄せるような態度では、後進民族を指導することはできない。各民族の生活と文化の地盤に立ち、その歷史と傳統に浸つて、共に苦しみ共に樂しみ、協力しつゝ指導するのでなければ充分の成果を擧げることはできない。

廣大無邊の大御心、萬葉の歌人達の大らかな心、歷史的に包容的な日本精神とは凡そ緣の遠い一部の偏狹な「日本主義」の立場を、大東亞の諸民族に押しつけるならば、それは決して、世界新秩序建設に指導的役割を果すべき、雄渾極まりなき構想を有つ「大」東亞共榮圏の建設とはならないであらう。

第三に必要なのは、大膽なる實踐的氣構へ、勇猛果敢な挺身者の心組である。

大東亞の建設は實に難事中の至難事である。幸ひ作戰は順調以上に進捗し、全國民は御稜威の下、陸・海・空軍將士の健鬪に感謝感激措く能はざるものあるが、それだけ大建設の責務は重且

つ大である。

省みれば、英國の世界制覇或は東亞侵略は、彼國幾多の勇猛果敢なる人士の活躍によつて成就されたのである。

先づ、英佛の海岸を脅かし、遂に英國の主人となつたノルマンは、山嶽の如き波濤の中に出沒し、時には身を鯨魚の腹中に葬ることもあつたが、それに屈せず萬里の波濤を開拓した。

これらノルマンの血を享けたアングロ・サクソン民族は、西班牙無敵艦隊を破つたハワードやドレークを始めとして、阿弗利加を探檢したリヴイングストン、印度を征服したクライヴやヘースチングス、シンガポールと海峽植民地を掠奪したラツフルズ、太平洋を渡つてハワイを發見し濠洲に初めて上陸したクツク等諸勇士の冒險的な植民地の發見と開拓によつて、その世界及び東亞の制覇を確立したのである。

勿論、大東亞民族解放の義戰に起ち上つた日本の我々は、かゝる海賊的な掠奪的冒險を憎むものであるが、生死を省みず萬里の波濤を開拓する氣慨に至つては、他山の石として何か敎へられるものがある。

然し、我々は十二月八日のハワイ眞珠灣襲擊に際し、正に鬼神を泣かしむる純忠無比の精神を發揮した「特別攻擊隊」の尊き軍神を、我が民族の中に有つてゐることに絶大な誇りを感ずると共に、大東亞建設への全日本人の心構へは、かゝる米英的な海賊的勇猛果敢ではなくして、これら軍神が模範を示した純一無雜な勇猛果敢であることを強く念願したい。

第三章　大東亞國防の協力建設

第八節　國家總力戰と國防國家體制

高度國防國家とは如何なる國家か。高度國防國家とは國家總力戰に即應する國家形態である。

國家總力戰とは如何なるものか。國家總力戰とは、國家の全機能と國民の總力を戰爭の遂行に集中した、第一次世界大戰及びそれ以後の戰爭の新しい形態である。

第一次世界大戰以前の戰爭は、大體に於て武力戰に重點が置かれ、而も比較的短期戰であつて、戰線と銃後はかつきり區別され、戰鬪は國民の中より特別に選ばれた軍隊が擔當し、國民が直接戰鬪或はそれに關聯ある行爲に參加するといふことはなかつた。

勿論、何時の戰爭でも、戰爭である限りそれは國家と民族の一切のエネルギーを集中させ、それを最大限に消耗するものであるから、銃後の國民が戰爭に關係がないといふことは云へないが戰爭そのものの勝敗の運命は、戰鬪に從事してゐる軍隊に委ねられ、銃後國民の如何ともすることのできないものであつた。

然るに、第一次世界大戰を契機として、戰爭の形態は質的に變化した。第一次世界大戰は西洋近代史最後の戰爭であつて、その規模たるや有史以來類例のない尨大なものであり、その戰爭には數十の國家と、數億の民族が運命を委ね、更に戰爭の發端より終局まで約四年四ヶ月の長日月を費したといふ事實により、それ以前の戰爭とは質的に異なれる形相を呈するに至つた。

即ち、かゝる巨大なる戰爭になると單なる武力戰のみによつて勝敗を決することはできない。戰爭の規模が想像を絶する程大なるために、戰爭に終局の勝利を得るためには、質量共に優れた裝備と、かゝる裝備を自由に驅使する尨大な數の軍隊がゐなければならず、尙且つ、莫大に消耗される武器彈藥を間斷なく補給するためには、優秀な生産力を有つた巨大な軍需工場の晝夜休みなき運轉が必要である。また、腹が減つては戰が出來ぬといふ喩の通り、特に戰時に於て需要が增大する食糧を不足なく供給せねばならず、そのためには食糧の增産が企圖されねばならない。

かくして武力戰は經濟戰にまで發展する。

なほ、敵國に働きかけて、或は國内輿論を分裂させ、或は革命や暴動やサボタージュ等を起さ

せて銃後を攪亂させれば、大きな犧牲なくして武力的屈服以上の大なる效果を收めることができる。こゝに思想戰、宣傳戰が加味される。

また、敵側の同盟國を引き離したり、中立國を誘引して自國との同盟關係に引き入れたり、中立國をして飽くまでも中立を嚴守させるといふような手が戰爭の勝利に大きな關係があるので、そこに外交戰が熾烈に戰はされる。

更に、戰時の國家財政は莫大な負擔となり、それを賄ふには結局國債と增稅による外ないが、國民經濟に彈力性を有たせて、かゝる負擔を永續させるためには、極めて賢明なる政治の指導が要請される。

更にまた、戰爭を勝利に導くためには、國民の志氣を昂揚し、犧牲奉公の精神を普及させねばならないが、それには國民の精神を緊張裡に總動員せねばならない。

かくして、戰爭を終局的に勝利あらしめるためには、軍事はもとより、外交、政治、經濟、思想、教育、宣傳等國家のあらゆる機能を動員し、總力を結集して、一切を擧げて唯一つの戰爭目的に集中せねばならない。

こゝに、戰爭が、單純なる武力戰形態から國家總力戰形態に推移した根據がある。そしてかゝる國家總力戰遂行の國家形態が、とりも直さず高度國防國家なのである。

我が國に於ては、滿洲事變を契機として國防國家の要請が起り、ついで昭和九年十月一日陸軍省新聞班から「國防の本義とその强化の提唱」なる小冊子が發表され、軍部によつて始めて國防國家の提唱がなされた。

かゝる提唱は、現狀維持陣營、殊にその代表である政黨方面からは强い反對に逢つたが、內外情勢の緊迫につれて、國防國家の建設は現實的に益々緊要の度を加へ來り、二・二六事件後の廣田內閣は、その政綱の基本を「庶政一新」と「國防の充實」に置き、以て國防國家建設への歩みを進めるに至つた。

その後、第一次近衞內閣が成立し、間もなく支那事變が勃發したが、同內閣は國家總動員法を發令して、國防國家確立の爲め、更に現實的な一歩を進めるに至つた。

ついで、第一次近衞內閣の桂冠後、平沼、阿部、米內の三內閣を經て第二次近衞內閣が組閣されるや、「基本國策要綱」を發表して、國防國家の綱領を決定するに至つた。

同要綱はその冒頭に於て、現下の急務たる國防國家建設の必要を次の如く說明してゐる。

「世界ハ今ヤ歷史的一大轉機ニ際會シ、數個ノ國家群ノ生成發展ヲ基調トスル新ナル政治經濟文化ノ創成ヲ見ントシ、皇國亦有史以來ノ大試錬ニ直面ス。コノ秋ニ當リ眞ニ肇國ノ大精神ニ基ク皇國ノ國是ヲ完遂セントセバ、右世界史發展ノ必然的動向ヲ把握シテ、庶政百般ニ亙リ速ニ根本的刷新ヲ加ヘ、萬難ヲ排シテ國防國家體制ノ完成ニ邁進スルコトヲ以テ刻下喫緊ノ要務トス。」

然らば、かゝる國防國家體制の特質は如何、それは如何なる性格を有つてゐるか。

第一は、國防國家體制は、自由主義國家體制ではなくして皇道國家體制である。(獨伊ではこれを「全體主義國家體制」と稱してゐる。)

自由主義國家體制は、國家の基礎を個人に置く。各個人は內・安寧秩序の維持と、外・外敵の防衛の爲に、相互に契約を結んで任意に國家を形成したのであつて、國家は個人の集合である國民に從屬し、國民の利害を代表する議會によつてその意志を左右される。

これに反して、皇道國家體制に於ては、國家は國にして家なる一國一家であり、國の元首であると共に、宗家の家長であらせられるのが萬世一系の　天皇にてまします。天皇は皇祖　天照大神の御神裔として現人神であらせられ、國民信仰の中心であらせられると共に、現實的には國家の最高元首であらせられ、國民は悉く天皇に歸一し奉り、君民一體となつて、大御心のまにまに生きて、天業を翼贊し奉る。

かくして、皇道國家は、天皇を中心とした一國一家の民族國家であり、國民はすべて臣民であると共に赤子なのである。

かゝる運命共同體としての民族國家防衛の現代的形態が、とりも直さず高度國防國家である。

第二は、統帥と國務の統合といふ點にある。

國家總力戰時代に於ては、軍事は軍人、政治は政治家が、それ〴〵專門的に擔當するといふような統一なき狀態に於ては、敏速果敢なる國家意志を發動することはできない。戰爭は政治の延長であるといふように、政治と軍事との間には密接不可離な關係があり、政戰兩略の一致といふことは、國家行動の最重要部面なのである。

この點に鑑み、第二次近衞內閣は、政戰兩略の一致を實現する爲、隨時政府統帥部の連絡會議

を開催するに至つた。

勿論、皇國の運命に關はる如き軍事外交等の最高國策は、　陛下の御親臨を仰ぎ、政府統帥部の責任者が列席する御前會議によつて決定されることに變りはない。

第三は、經濟に對する政治の優位といふ點にある。

自由主義國家に於ては、經濟が政治を支配する。政府と議會は要するに金權者流の執行機關に過ぎない。それは金權者流の利害を擁護或は補償する制度に過ぎないのである。

然るに、皇道國家體制に於ては政治は經濟に優位する。國家目的を綜合的、計畫的に實現するのが政治の立場であり、國家目的を實現するため、その必要に應じ經濟は再編成され、利潤は制限される。經濟は國家發展の爲に奉仕しなければならない。

第四は、公益優先といふ點にある。

自利は利他と一致する。自利を求めよ、然らば社會の福祉は增進されん、といつてアダム・スミスは「富國論」を書いた。それが歷史的に制度化されたのが資本主義である。

しかし、資本主義の高度の發展は、必ずしも個人的な自利の追求が、社會の福祉と國家の發展を進めないことを、歷史的事實によつて證明するに至つた。

然して、人間は普遍的な世界人でなく、具體的歷史的存在であり、孤立せる個人ではなく國家の公民であり、單なる人類ではなく祖先より血を受けた家族の一員である。人間は民族共同體の歷史的傳統と、國境に圍まれた國土の內で發育し生長する。民族の運命、國家の運命がその儘自己の運命なのである。

かゝる時、國家目的に卽應するため、公益は私益に優先せねばならず、自己の本分を全うするため、職域奉公が實踐されねばならないのである。

第五は、國民組織の確立といふ點にある。

國家總力戰は、一部の政治家や軍人だけでは勝利を達成し得ない。どうしても全國民總力の結集が必要である。

こゝに國家の意志を國民に傳へ、國民の希求や願望を國家に通ずるために、上意下達、下情上通の組織が必要であるが、それが國民組織である。

甚だ大雜把ではあるが、以上が高度國防國家の性格であり、內容である。

第九節　大東亞國防體制の確立

國防の出發は民族共同體の防衛の組織にあるが、國境が前進するに從つて國防圏は擴張する。かつてルーズヴエルト大統領は、「アメリカの國境はライン河にあり」と主張し、更に大東亞戰爭前には、「アメリカの前線は重慶にあり」と强調した。

かゝる地政學的にいつても、何等根據なき架空の言明が、歷史的現實の國防を說明することにはならないが、國防圏は國家の歷史的發展に從つて前進する。

日本は明治維新以後戰爭毎に國防圏を擴大し强化した。日淸戰爭から日露戰爭、日露戰爭から第一次世界大戰、第一次世界大戰から滿洲事變、支那事變を經て今回の大東亞戰爭に至つて、北はオホーツク海を抱きカムチヤツカ半島に接する千島列島と滿ソ國境から、東はハワイに接する太平洋の水域、西は蒙古の大平原から熱河を經て支那大陸の奥地を連ね、南は大東亞海の多島海から亞細亞大陸の南端印度に接する地點に至るまで飛躍的に國防圏を擴張するに至つた。

そこには大洋あり高原あり、沙漠あり原野あり、大河あり沃野あり、ありとあらゆる地勢と氣候と風土を網羅してゐる。その中に於て、日本本土それ自體が亞細亞大陸と太平洋水域に對して獨立不羈、難攻不落の一大戰略的地位を保持してゐると共に、太平洋南方水域の所謂大東亞海の多島海は、何千といふ島嶼を數へて、それがすべて「沈まざる航空母艦」となり、日本の無敵海空軍をして正に「鬼に金棒」の役割をなさしめ、天然の要塞を形成し、不拔の國防體制の基礎を提供してゐる。

かゝる複雜多岐を極むる水陸の一大地域を防衛するには、陸・海・空の軍備だけからいつても、正に世界歷史に比類なき雄大豪壯の規模を要することは說明するまでもない。ここに、大東亞の國防體制が、大東亞共榮圏建設の前提として、確乎不動の基礎の上に、搖ぎなく確立されねばならぬ所以がある。

然らば、高度國防國家の原則に立脚して、大東亞の國防體制は如何に具體的に建設されねばならないか。

第一に、大東亞圏の國防は　天皇の御統帥の下、日本軍の最高權を認めてその指導のもとに、軍事的一元化の形態をとるべきである。

大東亞圏の國防は、單に日本民族共同體のみの防衛組織でなく、大東亞共榮圏全國土と全民族の共同防衛の組織であるから、かゝる共同防衛の組織に、共榮圏内全國家と全民族を如何なる形態に於て參加させ、その協力を求むべきかについては、今後具體的な研究が要せらるゝであらうが、かゝる協力と參加が、日本軍の最高權の下に、軍事的一元化の形態をとつて組み立てらるべきであるといふ、大東亞國防の最高原則は不變である。

第二に、政治の高き指導が要請される。

萬邦をして各々其の所を得しめ、兆民をして悉くその堵に安んぜしむるは、畏くも無上の大御心であるが、この大御心を奉戴して大東亞の諸民族におし及ぼし、日本の指導が米英の支配よりも如何に優れたものであるかを事實を以て示し、大東亞の共同防衛と共榮圏の建設に諸民族をして欣然として參加せしめ、協力をなさしめるには、指導國日本の高き政治と、機宜を失せぬ具體的な政策が要請される。米英の支配に單に日本が取つて代るといふのであるならば、それは眞に聖戰を貫徹する所以ではないのである。

第三に、經濟的に共榮の原理が徹底されねばならぬ。

日本は大東亞の諸民族に對して、歐米の侵略と搾取に代ふるに共榮の理想を以てした。日本民族の矜恃と名譽にかけて、一部財閥の利權漁りの如きは斷乎として排擊されねばならぬ。そしてかつての壓制と支配の過去を、共存と共榮の現實に代へねばならぬ。

第四に、文化的には大東亞諸民族の自主性を取り戻す運動に協力せねばならぬ。

歐米の文化政策は、民族に對する阿片的麻醉と精神的虛勢であつた。かくして住民を何時までも無力な狀態に放置し、以てその隷屬を永久化しようとした。

日本はこれに代へるに民族の傳統を生かし、それを新しき大東亞文化の創造にまで高めるべく根氣强く指導せねばならぬ。

第五に、大東亞の作戰と建設を進めるためには、國體に徹した絶對不敗の國防精神と必勝の信念を把持し、一路勇躍邁進せねばならぬ。

こゝに於て、はじめて大東亞共榮圏の建設も、大東亞不拔の高度國防體制の基礎に立つことによつて、極めて順調に進められるのである。

第一〇節　國防經濟力の充實

高度國防國家建設のためには、不拔の國防精神に立脚すると共に、その物的基礎として國防經濟力の充實を期せねばならぬことは言を俟たない。物心相伴ふてはじめて不敗の國防體制が出來上るからである。

國防物資を國内に自給自足し得ずして外國に依存するならば、國防の安全感を極度に脅かされる。それは國家の安危を外國に委ねるものであつて、その極まるところ國家の獨立にさへ累を及ぼすに至る。須らく國防は自主的ならざるべからず、國防經濟は自給自足を建前とすべきである。

大東亞戰爭勃發の一つの原因が、米英の經濟封鎖にあつた事は極めて明瞭である。然して經濟封鎖は武力による挑戰にも比すべき敵對行爲にして、斯る際國防物資の一部例へば石油にせよ、鐵鋼にせよ、ゴムにせよ、それを敵側に依存せねばならぬとしたら、國防の限界は該國防物資の貯藏量の如何にかゝはるもので、結局戰はずして敵の軍門に降伏する憂ひなしとせぬのである。

世界史發展の必然的動向である數個の國家群の生成發展、指導的國家を中心とする廣域圏の形成は、國防の安全感の要請より來てゐることも事實である。如何なる大國といへども、一國だけで一切の國防物資を自給し得てゐる國はない。例へば米國にしても、加奈陀と南米の資源を加へてさへ自給自足はできないのである。

然るに國防經濟は自給自足を必要とするから、こゝに國防の必要そのものからも廣域圏の要求が生れて來る。ある國家は資本と技術はあつても資源がない。ある國家は資源はあつても資本も技術もない。またその資源も錫とゴムはあるが、鐵も米もない。砂糖と麻はあり餘る程あるが、綿花も石炭もないといふような場合は、一國々々では國防經濟を確立し得ず、結局敵の攻擊に對して有効に自己を武裝することができない。

玆に於て、廣域圏地域の小國家は、該地域の指導國家を中心に、相互に一切の資本と技術と資源を結合し綜合して一個の廣域圏を形成し、以て自國を守ると共に廣域圏全體を守る以外に、國家の獨立と民族の發展を期する道はないのである。こゝに東亞新秩序或は歐洲新秩序の如き共榮圏が成立する一つの根據がある。

これを我國を主體として考へる時、我國は高度國防國家を完成するには、國防の自主性を確保

せねばならず、それには廣地域の自給圏を必要とする。かゝる自給圏を確保できるや否やは、日本にとつて正に死活の問題なのである。然るに米英は日本を經濟封鎖すると共に、かゝる廣地域への日本の自然的な發展を阻止せんとするに及び、日本は自存自衛のため、また東亞共榮圏の防衛と建設のため、米英を敵として起たざるを得なかつたのである。

かくの如く、日本の高度國防國家確立の爲には、廣地域の自給圏が必要であるが、更に進んで廣地域の自給圏としての東亞共榮圏の建設の爲には、日本を主體とする大東亞の國防體制が確立せずしては、その建設の歩を進め得ないし、また終局的に安定を保ち得ない。こゝに、東亞共榮圏の建設と大東亞高度國防體制の確立とは、離すべからざる表裏一體の關係に置かれてゐるのである。

然らば、大東亞の諸民族と協力して共同防衛の立場に立ちながら、大東亞圏の防衛者を以て自ら任ずる日本の國防經濟力は、如何に具體的に充實せらるべきであるか。

先づ國防經濟力は重點的に擴充されねばならぬ。米英を屈服せしむる今次作戰の特質から考へて、制空・制海權の確保強化が最緊要事であるに鑑み、先づ航空工業と造船業が最優先的に擴充されねばならぬことは極めて明瞭である。そしてその爲に必要な戰略的物資である鐵、石炭、石油、電力等が重點的に生産され、開發されねばならない。

日本の航空工業と造船業が、現在どの位の生産力をもつてゐるかについては、數字の發表もないので詳かにし得ないが、今次作戰に於ける海・空軍のすばらしい戰果、陸軍大部隊の上陸作戰を可能ならしむる輸送船團の活躍、なほ將來の作戰にゆとりのある萬全の構へ、更に外米の輸入が順調なる點等から考へるならば、その生産力が質・量共に相當のものであることが理解せられる。

陸軍省整備局岡田戰備課長は、航空機生産力につき、巷間の新聞で次の如く語つてゐる。

「結局現在の所では、米英ソの合計生産力と日獨伊の合計生産力とは相伯仲の所かと見られるが、米國の大懸りな生産が進捗し、ソ英が共に潰滅的打擊を受けないとすると、明年位から敵側の航空工業生産力は段々優勢となる。だがソ聯も英國も相當やられることは必然だし、米國の多量生産機も西にも東にも動けない傾向にあるから恐れるに足らぬ。大東亞の制空を期して米濠、印濠の連絡が遮斷せられては空輸も出來ないし、航空母艦もビシ〳〵擊沈されては手が

出ないだらう。然し何といつても將來大きな力へ膨脹して行くことだけは爭へない。」（「讀賣新聞」一七、三、一一）

幸ひにして、日本は今回の大戰果によつて、鐵、石炭、銅、石油、錫、ゴム、タングステン、マンガン、マニラ麻、米、砂糖等の重要戰略物資を豐富に獲得することができ、こゝに始めて國防物資の自給を確保し得て、高度國防の完成を所期し得る立場になつた。

然し資源は一つの素材であり、死せる物資であつて、今すぐに役立つ生ける物資ではない。死せる物資を生ける物資となす爲には、そこに生産力が加はらなければならない。而もその生産力は科學と技術を最高度に活用した、優秀な生産力でなければならない。

我が國現在の貯藏物資は、例へばポンプの貰ひ水として使用せねばならぬ程貴重なものでありなほ一方猫の手も借りたいほど人間勞働力が不足してゐる時、國防經濟力の緊急な擴充には、生産に對する國家の指導力が加はらねばならない。

これについては、大河内正敏博士はその近著「國防經濟と科學」に於て、次の如く極めて妥當な見解を主張されてゐる。

「從來のやうな卽戰卽決の場合は買溜め貯藏策も効を奏するが、貯藏物資の續くのは時期の問題だ。高度國防國家は決して貯藏策に依存し得ない。國家が生産に對して指導力を持たなければならぬ。」

「國防經濟は飽くまで積極的に物資の生産に專念しなければならぬ。如何にすれば國內の生産で物動計畫を建て得るかが最も大切な點である。それには國家が生産に對する指導力を持たなければならぬ。從來の生産は利潤第一主義の資本主義經濟下の生産方法、生産手段によつて生産が營まれた。國防經濟は生産が第一で利潤は第二だ。」

「生産に對する指導力とは何か。最少の資金、最少の資材、最少の勞力で、最大の生産をなさしむる方法、手段を指導し得る機構を國家が持つてゐることである。紙上の物資增産計畫では駄目だ。生産に對し素人の集りで增産計畫をしたのでも駄目だ。金融業者、財政家等を集めて資金を山と積んでも金だけでは增産は出來ない。科學者、技術者、經營者等それぞれの專門家を動員して始めて指導力が盛り上つて來るのだ。さうして科學的の增産計畫を直接に指導し、實施するのでなければ駄目だ。」（二四―二七頁）

かくして國家が生産に對する指導力を確保し、更に生産を重點的に強化し、科學と技術を最高度に活用し、生産の質と能率を高めるならば、國防經濟力の充實も期して待つべきである。

然して、かゝる國防經濟力の充實に對して、主體的に國體に徹した不拔の國防精神を以てするならば、米英撃滅の高度國防體制を更に一段と強化することができる。

第四章　大東亞政治の協力建設

第一節　大東亞戰爭の完遂と國內體制の刷新

大東亞戰爭はその世界史的な性格からして、必然的に長期化する運命をもつてゐる。勿論如何にそれが長期化しようとも、日本は米英を最後的に撃滅するまで百年戰爭も敢て辭せざる固き決意を有してゐる。

東條首相も去る第七十九帝國議會劈頭、大東亞戰爭指導要諦を闡明し、大東亞戰爭完遂の決意を左の如く力强く表明してゐる。

「そも〳〵帝國の現に遂行しつゝある大東亞戰爭指導の要諦は、大東亞に於ける戰略據點を確保するとともに、重要資源地域を我が管制下に收め、もつて我が戰力を擴充しつゝ、獨伊兩國と密に協力し、互に呼應して、ます〳〵積極的作戰を展開し、米英兩國を屈伏せしむるまで戰ひ拔くことである。」

まことに大東亞戰爭の完遂こそ、國家の總力を發揮して達成されねばならぬ日本民族の世界史的使命である。

然らば、大東亞戰爭が長期化する原因は何處にあるか。それは明かに大東亞戰爭の世界史的な性格から來てゐる。

大東亞戰爭の特徴は、既に「大東亞戰爭の世界史的意義」に於て述べた如く、「世界觀の戰」である點にある。即ち唯物的、功利的な近代自由主義世界觀と、道義的、物心一體的、行的な皇道世界觀との和解することのない執拗な戰ひである。所謂「原理鬪爭」(山崎靖純氏)であつて、中途半端な妥協が許されない、最後まで鬪はれねばならぬ、食ふか食はれるかの戰ひである。如何にそれが深刻悽慘なものであるかは、同じく歐羅巴に於て「世界觀の戰」「原理鬪爭」を戰つてゐる獨ソの死鬪を見れば分るであらう。

かゝる深刻な戰ひに於ては、大敵たりとも怖れず、小敵たりとも侮らず、常に必勝の信念を堅持して最後まで戰はるべきではあるが、敵側が容易に屈服し、簡單に參つて了ふと考へることは危險である。

東部から西部へ、西海岸から太平洋へ、太平洋から亞細亞大陸へと、原野と波濤を開拓しながら前へ々々と進んで來た所謂フロンテイア・スピリツトは、米國を今日あらしめた傳統的精神であつて、それはホイツトマンの詩に表現されてゐる如く、極めて原始的で野性的で粘り强い性格のものであり、かゝる傳統的精神をもつてゐる米國は、フランスの如く簡單には手を擧げないであらうことは想像される。更に、米國は世界の最高指導者を以て自ら任じ、自國から生れた世界文化としての所謂アメリカニズムの優秀性を盲信してゐるのであるが、その盲信と自惚の故に敢て猪突猛進も辭さないのである。

しかし、米英的な舊秩序と舊觀念は、世界史的發展の必然によつて崩壞する運命を餘儀なくされてゐる。「一九四一年十二月七日」までがアメリカ帝國の時代であり、アメリカニズムが世界を風靡した時代であるが、十二月八日以後その時代は永遠に去つて再び還らないのである。それだけ窮鼠却つて猫を嚙む喩の如く、執拗に反擊逆襲し來ることは充分に豫期しなければならない。

ハワイ及びマレー沖海戰大敗後の一月六日、ルーズヴェルト大統領は米國議會に長文の教書を送り、次のような强がりを言つてゐる。

「アメリカは非常なる決意を以て、生産力の擴充に全力を擧げねばならぬ。米國民は壓倒的に莫大な軍需品を短時間に生産し、この世界戰爭を飽くまでも戰ひ拔くのだ。しかも、その手段としては、アメリカの防衛といふ消極的態度でなく、世界到る所で攻勢を採り、如何に高價なる代價を支拂つても、最後の勝利を得るまでは決して戰爭を止めない。我々は日獨伊を粉碎するまで斷じて進擊する。我々は既にそれを始めてゐるのだ。」(吉積情報局第二部長放送)

かく强調して、航空機一九四二年六萬臺、一九四三年十二萬五千臺、戰車四二年四萬五千臺、四三年七萬五千臺、高射砲四二年二萬、四三年三萬五千、商船建造四二年八百萬噸、四三年一千萬噸を二十四時間無休息で生産すべき提案をなし、結局議會に於ては總計八百卅五億五千萬ドルの天文學的大軍擴豫算を承認し、反樞軸聯合諸國の兵器廠たらんとの意圖を表明した。

魂を入れ忘れた軍艦や飛行機は無精卵であつて決して孵化しないから、我々は驚くには當らないが、米英は緒戰の大敗に拘らず大勢を挽回せんと企圖し、準備完了次第執拗な逆襲反擊を試み來るであらうから、我國としてはそれを豫想して、戰はずして勝つ底の大東亞不敗の國防體制を完備しなければならない。

かくの如く、第一に、世界觀と世界觀の戰ひであるといふ點、第二に、その世界觀の戰ひを勝ち拔くための物的基礎として尨大極まりなき軍備擴張をなすといふ點に、大東亞戰爭の長期化する根據があるが、日本としてはそれと共に、作戰しながら同時に建設を進めて行かなければならないと云ふ點に、戰爭長期化の第三の根據がある。かくして、我國は戰爭の長期化を豫想して、開戰直後獨伊との間に、共同の敵米英に對し、最後の勝利を得るまでは絕對に單獨媾和をせぬ旨の軍事協定を締結するに至つたのである。

かくの如く、大東亞戰爭の長期化が避けられないとすれば、問題は如何にすれば長期戰を勝利を以て完遂し得るかといふことである。

東條首相は前述の議會で、「作戰八分、國內二分」と云はれて、作戰と政治に對する見解を披瀝されたが、現段階に於ては作戰がすべてで、國內は二分であればあるだけ、人と機構を最能率的に活用し、力あるものは力を、物あるものは物を、知識あるものは知識を、すべて捧げ盡して、戰爭目的の完遂といふ一點に總結集すべきであり、その爲めに政治、經濟、文化、敎育の全般に亙つて國內體制の刷新が要請されるのである。

翼賛議會の確立を目指す今次總選擧の結果、舊政黨の地盤徐々に崩壞に頻して、新政治勢力の擡頭となり、高度の政治力を結集せんとする翼賛政治體制確立の運動漸く活潑となるに至つた。こゝに於て、「國體の本義に基き、擧國的政治力を結集し、以て大東亞戰爭完遂に邁進せんことを期す」旨の綱領を有する翼賛政治會の發會となり、更に大政翼賛會の再改組と相俟つて、久しく停滯してゐた國內政治體制刷新の方途茲に一應確立されて、前途多大の希望を認むるに至つた。

聖戰の完遂と大東亞の建設は、一億國民の總力の結集と、大東亞十億民族の協力を得ることによつてはじめて成就される。然して、かゝる結集と協力は、たゞ內を淨め、內を整備し、內を强化して、大御心の奉行に一切を捧げ盡すことによつてのみはじめて實現される。自己が燃える事によつてはじめて他を燃やすことができるのであつて、自己維新は世界維新の前提なのである。

國體をいよいよ明徵にすること、國體を明徵にすることによつて日本的主體を强化すること、日本的主體の强化はたゞ自己維新によつてのみ實現されること、自己維新の實現は政治、經濟、文化の各般に亙り、人と機構の一切に亙つて、舊秩序的な、舊體制的な、米英的な、唯物功利的な殘滓を完全に拂拭して、大御心のまにまに天業を翼賛し、職域に奉公して、聖戰の完遂に邁進することにあるのである。

「島帝國日本は、今や共榮圈指導國家としての名實ともに大日本帝國となつたのである。しかし對南方策の立案計畫を圖ると同時に大東亞共榮圈確立に對應すべき、わが國內態勢の整備刷新を圖ることが忘れられてゐる嫌ひがないであらうか。國內の態勢刷新强化されてはじめて南方經營の實を擧げ得る。今にしてこれらの國內改革を斷行するに非ずんば、共榮圈確立の重大責任を完遂するに支障多きを思ふのである。」（藤山愛一郎氏―「讀賣」一七、二、二二）「南方經營に關する政策的技術は無限にある。しかし乍ら、何よりも先づ大前提として必要なことは、前者（米英）よりも必ず高かるべき相續者の使命感意識であり、それを我々の政治にまで結集することである。」（山崎靖純氏「東亞經濟月報」一七年三月號）「惟ふに肇國の大理想を世界に顯現せむとする今次大東亞戰爭を勝ち拔き、わが民族的大業を完遂するには、先づあらゆる國內體制の決戰的整備と强化が高度に要請せらるゝので、殊にその政治新體制の强化確立は最も緊要である。」（大政翼賛會臨時中央協力會議に於ける後藤中央協力會議々長の挨拶）

勝つための革新、聖戰貫徹のための國內體制の刷新强化こそ、長期戰に臨む唯一の態度である。

かくして、大東亞戰爭を完遂して、東亞竝に世界新秩序の建設に邁進するに際し、先づ最初に要請されるものは、大東亞十億の民族を協力させ、一億の國民を大建設に奮ひ起たしむる、國體に徹し、歴史を規範とした、高き政治の指導性でなければならない。

第一二節　大東亞政治の協力建設

大東亞共榮圏建設の根本方針は、日本の一元的計畫的指導統制の下に、大東亞全民族の綜合的な協力體制を組織して大東亞の總力を結集し、以て新秩序の建設に邁進するにある。

即ち、日本を盟主とし、大東亞の全民族を積極的に協力せしることによつて、米英帝國主義を大東亞の地域より完全に驅逐して諸民族の解放を實現し、各々その處を得しめつゝ、軍事的には米英の反擊に對して共同防衛し、政治的には日本の指導の下に協力を持續し、經濟的には有無相通を計つて自給自足を實現し、文化的には各民族の傳統と自主性を尊重しながら大東亞文化の創造に努め、以て共存共榮の一大廣域的生活圏を結成し、東亞民族全體の興隆を圖り、世界新秩序建設に邁進し、東亞竝に世界の平和に貢献せんとするところにある。

かゝる根本方針は、去る第七十九帝國議會において、東條首相によつて左の如く簡明に表現された。

「大東亞共榮圏建設の根本方針は、實に肇國の大精神に淵源するもので、大東亞の各國家および各民族をして、各々その所を得しめ、帝國を核心とする道義に基く共存共榮の秩序を確立せんとするにある。」

然らば、その具體的な建設方針は如何といふに、それぞれ歴史的發達の段階及び戰略地位を考慮して、劃一に墮せざる方法がとられ、大東亞防衛のため絶對必要なる地域である香港及びマレー半島に對しては、多年英國の領土であり、かつ東亞禍亂の基地たりし事實に鑑みて、日本自らこれを確保するのみならず、進んで大東亞防衛の據點たらしむるが、他の地域に關しては、各民族の傳統文化等に應じ、戰局の進展に伴ひ、それぞれ適當なる處置をとるものであつて、米英の桎梏下にありながら、熾烈な獨立運動の經驗を有つ比島やビルマに對しては、同國が日本の眞意を了解して、大東亞共榮圏の一翼として協力するに於ては、日本は欣然として獨立を許容する。

更に、インドネシヤ民族に對しては、日本はその希望と傳統を尊重し、その地域をインドネシ

ヤ人の安住の地たらしめる。濠洲と新西蘭についてはその住民が日本の眞意を了解して來り投ずるに於ては、日本はその福祉と發展に對して、十分の理解を以て助力する。印度に對しては、印度が印度人の印度として、本來の地位を回復せんとする愛國的努力に對し、敢て援助を惜まない。

滿洲國、中華民國、泰國との善隣友好の關係は、これを愈々深め、佛印との協力も更に一層助長する。たゞ重慶政權がなほ無意義の抗戰を繼續するに於ては、日本は徹底的にこれを破碎せんする。

また、獨伊を始め歐洲盟邦諸國とは、提携を愈々緊密にして、相共に世界新秩序の建設に向つて邁進する。

かくの如きが、東條首相によつて聲明された、大東亞共榮圏内の諸國家及び諸民族に對する日本の根本態度であり、具體方針である。

日本の意圖は、米英の支配にとつて代らんとするものではなく、各國家及び民族にそれ〴〵獨立と福祉を與へ、共存共榮相携へて大東亞の建設に邁進せんとするにある。

しかしながら、こゝにいふ「獨立」といふ觀念は、第一次世界大戰後、ヴェルサイユ媾和會議の際、ウイルソンが弱小民族に約束した、民主々義的な所謂「民族自決主義」的獨立概念ではない。民族自決主義は政治的には獨立の形式を與へながら、實質的には大國への經濟的隷屬を強要してゐるのであつて、それは眞の獨立でなく、また民主々義そのものが、個人及び國家の利害關係から出發した觀念であつて、その世界に於ては、「人間の自由」が「資本の恣意」に置き代へられることを何等妨げず、眞の共存共榮は決して實現され得ないのである。

日本が大東亞圏の諸國家及び諸民族に約束する「獨立」或は「自主性」とは、かくの如き形式的獨立、名目的自決ではなくして、世界史發展の必然としての、東亞共榮圏といふ新しい廣域的生活圏の中に於て、各國家及び各民族獨自の役割と立場を強く發揮せんが爲めに、それぞれの位置と、個性と、歴史と、傳統が尊重されねばならぬといふ意味に於ての獨立であり自主性なのである。

東亞共榮圏の中には、日本の如く、世界に比類なき強固な統一國家を形成し、歴史も古く、文化も進み、國防も完璧にして重工業・輕工業共に最高度に發展してゐる國もあれば、國防も完備

せず、重に原料資源のみを生産し、工業も輕工業程度より發展せず、また、その中でも、從來極めて根强き民族運動の經驗をもつた國もあり、未だその經驗をもたない國もあるといふように、極めて多種多樣の國家が存在してゐる。

かくの如き狀態にある時、單に國家或は民族の利害關係から出發して、一律平等の民主々義的な、民族自決主義的な立場から、諸國家或は諸民族の結合を策しても、それは決して共存共榮にもならなければ、安定圈の建設にもならないのである。利害に立脚すれば、利害の對立を生んで內部相剋となり、再び米英に乘ずる隙を與へるに至るは極めて明瞭である。

こゝに於て、新しい政治の形式は、かゝる民主々義的な「獨立」や「自主性」ではなくして、國家及び民族發展の序列に從つて、例へば家長が一家を統合し、或は兄が弟を指導し弟がそれに協力する如き、指導、協力、共榮の道義的秩序の原理であつて、そこにはじめて、自國も他國も共に生きつゝ發展の大道を進んでゆく共榮の樂土が實現されるのである。

かくして、東亞共榮圈建設の指導原理は、米英の自由主義、民主々義ではあり得ない。それは個人の利害關係から出發し、「契約の自由」が「搾取の自由」となつて、結局ユダヤ的金權支配による全世界の自由なる搾取となり、それが政治的に領土的獨占を生じて、弱小國を植民地化する帝國主義となる。かゝる金權帝國主義の支配は被支配民族の反抗を生んで、民族獨立運動を刺戟し、結局支配帝國の內部崩壞を齎らすことは、今次英國の事例に徵して極めて明らかである。東亞共榮圈がかゝる歷史的に腐朽した自由主義、民主々義を採用し得ないのは云ふまでもない。

次に、東亞共榮圈の指導原理はソ聯流の共產主義でもない。共產主義はたしかに資本主義の缺陷を衝き、矛盾を曝露してゐるが、それは結局膿腫に對して膏藥を貼る如き極めて皮相な對症療法に過ぎず、唯物論と階級鬪爭と勞働者專制を信條とするこの思想は、同じ腐朽した地盤に於て資本主義に取つて代るだけであつて、かゝる資本主義を生んだ國家と民族を眞に甦生せしむるものではないのである。

東亞共榮圈建設の指導原理は、我が肇國の理想である、天の下を以て家となす八紘一宇の大精神以外にはないのである。かゝる根本精神の下に、國家を生命とし、民族共同體を一つの結合形式とする思想こそ、新しい指導原理でなければならない。

國家は生命であり、對立を超えた全體であるから、國家內の矛盾や缺陷は對立抗爭によつてで

はなく、たゞ國家的發展の線に沿うて解決されねばならない。もし資本主義が國家的發展及び國防の完成に障碍となるならば、それは止揚されねばならない。止揚されないとしても嚴密な國家的指導と統制に服されねばならない。

また民族共同體に於ては、主權を中心として一定の國土に於て運命を共にし、歴史的傳統の紐帶によつて緊密に結合され、神話と宗教と言語を同じうし、政治と經濟と文化を共通にし、外敵に對しては、民族全體の力を結集して防衛に當ることができる如き、緊密な力が働いてゐるが、斯る親和的にして强固な結合の形式は、東亞的に擴大された規模に於て、新しい指導精神とならねばならない。今や、無上の主權を中心に戴く日本民族の運命共同體は、それを保持しつゝ、大東亞全民族の運命共同體にまで擴大されねばならないのである。

然らば、大東亞共榮圏の建設は如何に進めらるべきであるか。

日本は大東亞圏諸國家及び諸民族の協力を得て、對米英撃滅を完遂せねばならないから、そのためには、先づ前節にも引用した如く、(一)大東亞に於ける戰略據點を確保すると共に、(二)重要資源地域を我が管制下に收めて我が戰力を擴充しつゝ、(三)獨伊兩國と緊密に協力しつゝ積極的作戰を展開し、(四)以て米英を屈服せしむる迄戰ひ拔くことが、現段階の根本目標となる。

かくして、日本の企圖する建設は、緒戰當初に於ては、まづ軍政を施行して戰爭遂行上緊要なる部分より着手し、かつ將來の大建設を準備しつゝ防衛及び治安の確立に伴ひ、逐次民間參與の範圍を擴張せんとするものである。

然らば、軍政の具體的內容は如何といふに、それについては去る四月十一日に、陸軍省軍務局軍務課員加藤中佐談を以て、左の如く根本方針が發表され、その輪廓が明かにされるに至つた。

「南方占領地經營は、右のごとく極めて重大なる意義をもつてゐるので、これが經營には、國家の總力を傾注することが必要である。この見地より、經營の基本に關する事項は企畫院を中心とする關係各廳間において、民間の意見も徵して企畫立案し、實施にあたつては、官民各方面の力を用ひることになり、現にこれを實行してゐる。しかしながら、現地における諸施策が各方面より無統制に行はれたのでは、十分なる成果が期待されないので、現地には軍政が施行され、軍が强力なる力をもつて、一本でやつてゐる。すなはち占領地を陸海軍が分擔して、各々軍政を實施してゐるのである。したがつて、占領地には軍司令官の監督以外のいかなる機關

の進出も許されないのである。現地において軍政を施行してゐるとはいへ、行政を軍人だけがやるといふことではなくて、この主體は各省および民間から選拔せられた文官が占めてゐる。

占領地統治の根本方針に關しては、現地の實情に即する如く行政を行ふことで、殘存統治機構は、なし得る限りこれを利用するとともに、在來の風俗習慣等は十分これを尊重して、不必要なる容喙または改正等はこれを戒めて、もつて原住民の心理に適應するごとく統治することにされたのである。」

如上談話によつて、軍政の根本方針は大體闡明されてゐるが、更に軍政の內容及びその特色について、去る三月十七日朝日新聞東京本社主催の大東亞建設座談會に於て、陸軍省整備局岡田戰備課長によつて、次の如く說明されてゐるので、御參考までに左に引用しておくことにする。

「御汪文のあつた南方々面の軍政方面の內容を申上げてみたい。しかし最高會議できまつてゐる內容を申上げるわけには行かないし、どの程度にやるかわからないが、極めて簡單に申上げる。

軍政の要點といふか根本といふか、これは敵の軍事的勢力を覆滅じたのちに治安を確立することが第一の問題であると思ふ。さうして軍の現地自活を策して、現地經濟力で現地にある軍隊の自活をし、戰力を培養する。それから併せて特に國防資源を確保開發取得して、長期戰に勝ち拔く帝國の持久戰態勢、長期戰的態勢といふものを本當に確立する。この三點が軍政施行の根本的な要諦と思ふ。これを基礎に、あらゆる軍政的な處置が講ぜられる。

過去において行はれた軍政と著しく違ふところは、國防資源を取得開發することだ。この點が日清戰爭、日露戰爭、靑島戰の占領地統治と根本的に違ふところだ。この資源を取ることにおいて日本が國力を培ひ、戰力を賄つて行く、これが違ふ。

敵の經濟封鎖の鐵環を破つて寶庫を獲得した。これで持久態勢を作る。廣域經濟の建設をするといふことが特色であると思ふ。日滿支だけでは自給經濟が成りたゝず、特に石油關係で國の存亡に關する問題に逢着したのだ。南方を掩有して始めて廣域經濟が成立つのであつて、南方の經濟施策こそは、その成否が帝國の死活に關するのだ。したがつて、今回の軍政は非常に經濟的な面が大きいのであつて、この經濟建設が本格的に出來るか出來ないかといふことは、軍政が失敗であるか成功であるかの岐れ目になる。これを成功させない限りは、日本は武力戰

で勝つても、眞に勝つたことにはならない。かういふ處が今回の軍政の特色であると思ふ。」

大分長い引用になつて了つたが、以上によつて、大體軍政の根本方針及びその性格がはつきりしたことゝ思ふ。

まことに、大東亞建設は、對米英戰完遂成否の鍵鑰をなす重大問題であるから、これに鑑み、政府に於ても大東亞建設に關する總理大臣の最高の諮問機關として、大東亞建設審議會なるものを設置した。

この審議會は、「世界的變革に處する帝國百年の長計の確立およびこれと密接不可分なる大東亞共榮圏建設に關する重要事項を調査審議」（首相挨拶）し、併せて、「大東亞建設に關する綜合的企畫ならびにこれが遂行に關する國家總力發揮の完璧を期せんが爲め」（審議會設置要綱）に設置されたものであつて、內閣總理大臣を總裁とし、企畫院總裁を幹事長として、軍部、官界、外交界、貴衆兩院、財界、民間より四十名の學識經驗ある者を委員として選び、軍事及び外交を除く大東亞建設に關する重要事項について、總理大臣の諮問に應じ、調査審議又は建議をなす機關なのである。

委員は各界の大物を網羅してゐるが、內閣參議制を擴張した如き感あり、淸新潑剌たる實踐力に一抹の不安を抱かしめるが、その成果如何は大東亞十億民族の運命に關はり、延いては大東亞戰完遂にも決定的影響を及ぼすものであるから、大戰果に劣らない大政績を擧げらるゝことを深く祈念して止まない次第である。

第一三節　大東亞國土計畫

大東亞國土計畫と大東亞民族政策は、大東亞共榮圏建設の最も重要なる二つの面である。大東亞の政治が、この二つの面の建設工作を達成し得るか否かに、大東亞建設の成否の鍵は懸つてゐる。大東亞の國土計畫が、日本を主體として、太陽を取り卷く衞星の如くに、各々その處を得つつ、一絲亂れざる調和と統制の姿に於て實現せられ、また日本の民族政策その當を得て、大東亞の全民族を共榮圏の建設に振ひ立たしめることができた時、大東亞共榮圏は磐石の基礎の上に置かれるに至るのである。

一般に國土計畫とは何んであるか。特に大東亞の國土計畫とは何んであるか。先づ國土計畫の

指導精神より明かにして行かう。

新しき意味の國土計畫は米國が濫觴であるが、米國の國土計畫は英國のそれと同じように自由主義的であり、アメリカの國土と資源をアメリカ全國民の利益と幸福のために利用する、といふのがその指導精神である。

之に反して、獨逸の國土計畫は、全體主義を以て貫かれ、獨逸の國土に、獨逸民族の全體的利益を目標とした、獨逸民族共同體を建設することを以て指導精神としてゐる。

大東亞國土計畫の指導精神は、皇國の精神より出發し、無上の大御心によつて、大東亞の民族に獨立と解放を與へ、各々その處を得せしめつゝ共榮の樂土を建設せんとするところにある。

次に、大東亞國土計畫の具體的な目標は何處にあるか。それは日本の國土計畫の目標が、日本の高度國防體制の建設にあるように、大東亞の國土計畫の目標は、先づ大東亞防衛體制の確立、即ち大東亞の高度國防體制の建設にある。然して、日本の國土計畫は大東亞の國土計畫の主體となり、大東亞の國土計畫は日本の國土計畫を最後的に完成せしむる如き有機的關係を保つて、その目標とする日本並に大東亞の防衛體制、即ち高度國防體制を完成して行くのである。

然らば、かくの如く、大東亞高度國防體制の建設を目標とする大東亞の國土計畫は、如何なる內容を有つてゐるのであるか。一般に國土計畫とは、民族とその國土の爲めの建設計畫である。大東亞の國土計畫とは、大東亞の民族と大東亞の國土の爲めの建設計畫である。然らばその具體的內容は如何。

第一に、國土計畫は、抽象的な設計ではなく、具體的な土地、一定の國土に對して具體的な工作を施す政策である。日本の國土計畫は、縱に三千年の歷史を有ち、橫に大海に圍まれた統一的な島國である、日本といふ國土全體に對する建設的な政策である。大東亞の國土計畫は、大東亞の複雜多彩の民族、多種多樣の國土を含む大東亞全域に對する政策である。

第二に、國土計畫は個人や公人の計畫ではなく、國家が設定し實行する政策である。政策の主體は國家であり、大東亞國土計畫の主體は、大東亞建設の指導者としての日本國家である。

第三に、國土計畫は部分的、局部的な政策ではなく、綜合的、全體的な政策である。從つて一切を網羅し眞に雄渾な構想をもたねばならない。これを社會的見地からは產業、文化、勞働、厚生、人口、防空その他の面を含み、經濟的見地からは、資金計畫、工鑛業計畫、農林畜水產業計

畫、交通計畫、動力計畫、治山・治水・水利計畫、勞働力配置計畫等一切を網羅し、これらすべてを綜合的統一と聯關の狀態に於て、有機的に設定し實行するものである。

第四に、國土計畫はアウタルキーに立脚すべきである。國防資源や食糧資源を他國に依存せねばならぬとしたら、眞に强固な國防國家は建設し得られない。自給自足の體制は平戰時に拘らず國家百年の大計である。

これを總括すれば、國土計畫とは、國家及び民族の永遠の發展のための、綜合的長期的の建設計畫である。それは、國家百年の大計のもとに、眞に綜合的、全體的な立場に立つ國家の主體的意志と計畫に基く構想を、政治的、經濟的實踐によつて、一定の國土と民族の上に實現せんとするものである。

然して、國土計畫のためには、國土の地理的、歷史的、政治的、經濟的特質の理解が必要であり、それは地政學の領域であるから、地政學こそ國土計畫の導きの絲となる學問であり、地政學の成果に立脚せずしては、國土計畫は眞にその目的を達成するを得ないのである。

なほ、こゝに一言附け加へたいことは、江渡狄嶺先生の「場」の理論こそ、正にかゝる地政學の原理的基礎づけとなるものであるから、眞に雄渾な構想をもつべき國土計畫は、その學問的據りどころを「世界新秩序建設計畫の科學的武器」（カール・ハウスホーファー）である地政學に求め、更に地政學の哲學的基礎である「場論」に立脚すべきではないであらうか。

次に、國土計畫の發展に就て一言するならば、米英の國土計畫はナショナル・プランニングとして都市計畫として出發した。獨逸に於ては、單なる都市計畫や地方計畫ではなく、國土全體の再建々設の爲に計畫せられ、ヒツトラー總統直屬の機關として「國土計畫局」がつくられて、ゲルマン民族百年の國家建設が企てられた。然して、今次大戰に於て獨逸の電擊戰を可能ならしめた一つの根據は、實にかゝる國土計畫の最も重點的な事業として計畫された、自動車道路の建設にありと云はれてゐる。ソ聯の國土計畫は社會主義的であるが、それは國家計畫委員會が擔當し第一次、第二次、第三次に亙る五ケ年計畫によつて、ソ聯特有の國土計畫が進められた。

我國に於ては、德川時代に佐藤信淵が既に、「國土經緯」といふ名に於て國土計畫を考へてゐたが、所謂國土計畫は第二次近衞內閣の「基本國策要綱」から出發してゐる。該要綱の一項に、「綜合國力の發展を目標とする國土開發計畫の確立」といふことが云はれてゐるが、その後、企畫院

に於て研究が進められた結果、昭和十五年九月二十四日「國土計畫設定要綱」が閣議決定となり、續いて同年十月二日、かゝる國土計畫の基幹部分として、「日滿支經濟建設要綱」が發表せられ、國土計畫も具體的な緒につくに至つた。

以上、二つの要綱は日滿支を一體とした國土計畫であるが、大東亞戰爭の輝かしい戰果の結果、今や急速に、大東亞の國土計畫が新に設計され、建設されねばならぬ段階に到達した。

大東亞の國土計畫は、現在生成の過程にあり、今こゝに具體的にその設計を描くことはできないが、「國土計畫設定要綱」による、「日滿支計畫」と「中央計畫」（日本國土計畫）との有機的聯關や、「日滿支經濟建設要綱」に於ける產業立地論、卽ち日本を精密工業、機械工業及び重工業、化學工業の中心とし、滿洲國に鑛業及び電氣事業を發展させ、支那に鑛業及び製鹽業を起して工業原料の大量生產に當らしめ、全般的に日本の輕工業就中纖維工業及び雜工業を漸次大陸に移轉せしめんとする政策、或は日滿支の經濟地域を本土經濟地區（本州・四國・九州）、北邊經濟地區（樺太・北海道・千島列島）、南方地區（臺灣・南支那・佛印等）、大陸經濟地區（朝鮮・滿洲・北支）等に區劃せんとする論者（日下藤吾氏著「國土計畫の理論」）の主張等は、大東亞の國土計畫に於ては、擴張された規模に於て實現されるものではないかと思ふ。

更に、第七十九議會に於て、鈴木企畫院總裁によつて說明された、日滿を通じて全人口の四〇%を農村人口として保有せんとする政策や、滿蒙開拓百萬戶移植民計畫等の所謂國家百年の計畫は、大東亞國土計畫に於ても、何等變更を受けず其まゝ踏襲されるものではあるまいか。

最後に、大東亞國土計畫について、その構想を示唆するならば、

第一に、大東亞國土計畫は、大東亞の國土と大東亞の民族を眞に生かしきる爲に、日本國家の强い主體的意志と計畫の下に實現せらるべきものではあるが、それは、日本も生き、また大東亞の諸國家、諸民族も共に生きる底の、眞に綜合的、全體的の計畫であること、

第二に、大東亞國土計畫は、先づ、大東亞不敗の防衛體制を確立すべきものなること、

第三に、それは大東亞百年の大計に基き、眞にアウタルキーの體制を實現するものなること、卽ち大東亞全體として自給自足の建前をとると共に、各地域的にもでき得る限り自給自足の體制を整へ、例へば食糧の如きは、我國に於ては、外米に對する依存より脫却し、內外地（日本・朝鮮・臺灣）に於て自給自足出來得るよう計畫すること、

第四に、産業立地の問題については、大東亞諸國の産業發展の現狀を省みながら、各産業をして最も有利なる立地を爲さしむるよう配置すること、

第五に、人口計畫に於ては、産業との聯關に於て、勞働力の需給と結び合せて、中支、ジャバ等に於ける過剩人口に對しても適當なる處置を講ずること、

第六に、大東亞の資金計畫、工鑛業計畫、農林畜水産業計畫、交通計畫、動力計畫、治山・治水・水利計畫、勞働力配置計畫等の間に眞に有機的聯關を保たしめること、

等の諸案が考慮さるべきである。

大東亞國土計畫こそ、大東亞民族政策と共に、大東亞建設の前提となるべきものである。

第一四節　大東亞民族政策

如何にせば大東亞の諸民族を共榮圈の建設に積極的に協力せしむべきかと云ふ、日本を政策主體とする大東亞民族政策は、共榮圈の完成にとつて必至的重要性を有する問題である。

大東亞自給體制確立の爲の資源開發はともかく、現在喫緊の急務である作戰の進展竝に國防の完成の爲に、如何に資源を確保すべきかの現實當面の資源政策は、もとより重要なことではあるが、資源の確保開發も結局人が爲すのであり、民族の協力なくしては實現され得ないことを考へるならば、資源政策と併行し表裏して、建設的な民族政策が進められねばならない。

米・英・蘭の民族政策は、土民を隷屬化し、去勢せんとする政策であつた。

第一に、政治的には所謂デバイド・エンド・ルール即ち分割統治政策、換言すれば分離確執の政策であつて、例へば民族内幾多存在する土侯國を分離させ、相互に確執、爭鬪させてその間隙に乘じて巧みに勢力を扶植し、支配權を確立し、或は隷屬を强化する方針をとつた。英國が印度征服の過程に於て、印度内の土侯國に對してとつた政策や、印度教徒と回教徒とを互に反目嫉視させて相爭はしめる政策などは、植民地民族に對する英國の傳統的政策といふことができる。

第二に、經濟的には所謂單一作物を栽培する栽植企業といはれる植民地經營、即ち原住民の生活とは直接關係はないが、支配國にとつて必要な工業原料及び食料生産物等の栽培を强要して、極めて不均衡な不經濟的發展を導き、原住民自身の生活の安定や、自然的にして正常な經濟の發展を極力阻止する方針がとられた。かくして、即ち資源は開發されても、それが原住民の經濟の

發展や、生活の向上のためには少しも役立たないのである。

第三に、文化的には民族の精神を去勢し、その自主性を失はしめんとする方針をとつた。英國が支那に阿片を押しつけて、漢民族を惑溺せしめんとした政策などはその典型的なものである。かゝる政策のもとに、歐米の諸列强は、過去四百年に亙つて、代る々々東亞の民族を支配し、壓迫して來た。

その支配と壓制の下に、四百年間も鐵鎖に繫がれ呻吟して來た東亞の諸民族は、その間、幾度か蹶起して獨立を企てたが、實力なき爲にその都度制壓せられ、以前にも增した隷屬の地位に追ひ遣られた。かくして、米・英・蘭等の支配國に對して、自力を以て獨立を達成することは全く絶望視されるに至つた。

かゝる時、日本の明治維新を契機とする世界歴史への登場は、東亞の諸民族に對して深刻なる影響を與へずには置かなかつた。卽ち、日本は明治維新以來、日本の發展と共にアジア民族の解放、アジア維新の爲に戰つて來たのであり、それが今回の大東亞戰爭に至つて、その規模も最大のものとなり、アジア民族長年の宿願も達成されんとして、アジアの黎明はじめて訪れるに至つたのである。

明治維新はかゝるアジア維新、アジア解放戰の具體的な萠芽であつた。然しながら、明治維新はかゝる歴史的意義を有してゐたとは云へ、未だそれ自體にアジア解放に對する明確な認識と徹底せる自覺をもつてゐなかつた。ただ清朝の志士康有爲、梁啓超等が日清戰爭直後、我が明治維新を範として「變法自强」の改革を企て、我が國に於ても、明治十八年樽井藤吉が「大東合邦論」を發表し、雄大なアジア建設の計畫を描いたことは注目に値する。

日清戰爭が起つた。戰勝の結果、日本はその存在を世界に顯はにし、始めて東亞の盟主たらんとする氣慨を示したが、その東亞への影響としては、清朝の腐敗墮落した政治に憤懣の情を抱く前記康有爲等一部の有識階級に若干の刺戟を與へたに過ぎなかつた。

續いて日露戰爭が起つた。日本の壓倒的な勝利は、多年歐米白色人種の下に、飽くなき搾取と桎梏の軛につながれてゐた、アジア被抑壓諸民族に對して甚大な刺戟を與へ、民族獨立運動に拍車をかけるに至つた。中國革命の元勳孫逸仙は、日本の勝利に對するその驚異の情を次の如く表現した。

「日本がロシアに勝つた。ヨーロッパ人は打ち勝てないものではなかつたのだ。この敗北の驚きは全アジアに反響した。われ〳〵東洋の民族は昂然と頭を上げた。限りなき熱狂がわれ〳〵を捉へた。なるほど支那、印度、ペルシヤ、アフガニスタン、アラビヤ、トルコは未だなほヨーロッパの奴隷であつた。しかしながら、日本の實例はかれらに希望を與へ、且つこの希望を實現するために、かれらが切り拓いてゆかねばならぬ道を示したのであつた。」（大正十三年十二月、日本の神戸商工會議所でなした大亞細亞主義に關する講演）

かくして、明治維新、日清戰爭及び日露戰爭と續く日本の一連の歷史的行動は、アジアの回天として、アジア民族獨立の氣運を釀成する上に實に大きな役割を果した。これは隣國支那の學生が、自國の革命を達成せんが爲に、大正の初期に於て、約三萬人位日本に留學し、而も革命黨たる中國同盟會が、東京に於て結成された事實によつて充分に窺ふことができる。この意味で、日露戰爭はたしかに世界史的意義をもつものである。

しかし乍ら、以上三つの歷史的經驗に於て、日本は一面歐米的なもの〻攝取と共に、他面日本的なもの〻確立に進んでは來たのであるが、未だアジア的なもの〻確立といふ段階には到達してゐなかつた。

かゝる時、第一次世界大戰が勃發した。當時世界の被抑壓民族は、頻りに獨立を翹望してゐたので、この大戰を契機として年來の宿願を達成せんとし、機會を窺つてゐた。

歐米列强はこの氣運を無視することができず、戰後に於ける「完全なる自治」を約束して、これら民族を大戰に動員した。例へば、印度は大戰に際して、英國に對し百二十萬人の尊い人命と二十億圓の戰費を提供した。

然しながら、その結果、戰後に與へられたものは、眞正な自治でもなければ、またアメリカ大統領ウイルソンの所謂民族自決でもなくして、モンターギュ・チエルムスフオード改革法といふ、單に目こぼし的讓步を與へた、申譯的にして形式的な一篇の法律に過ぎなかつた。かくして、第一次世界大戰は、アジア民族の獨立運動としては全く慘憺たる敗北に終つた。

遂に機會は到來した。大東亞共榮圏の建設を目指す大東亞戰爭は、同時にアジア民族の獨立と解放を約束するのである。アジアの諸民族は、自己の力のみでは成就するを得ざりし獨立と解放を、日本の指導と協力により正に達成せんとしてゐる。アジア民族の歡喜これに過ぐるものはな

く、日本の責任これより重きはない。

然らば、大東亞の民族政策は如何に指示せらるべきか。

我が民族政策の根本方針は、先づ第一に、從來歐米列強がとり來れる資本主義、帝國主義、侵略主義の民族政策を一擲してアジア民族を解放し、八紘一宇の理念の下、大東亞共榮圏の建設に自發的、積極的に協力するよう導くものでなければならない。その爲には、諸民族をして近代歐羅巴的な舊世界觀より脱却せしめ、新たに建設的な道義的世界觀を提示し、歐米の覇道的支配の殘滓を完全に清掃して、アジア維新を完遂し、「アジア人のアジア」を建設して、諸民族の安寧と東亞の平和を達成するものでなければならない。

根本方針の第二は、各民族、各人種絶對平等の立場に立つ單純な指導を排し、各々その處を得しむる政策を採らねばならない。大東亞に於ける諸民族の環境と歴史は、それぞれ發達の段階を異にしてゐる。指導國と被指導國、見たる國と弟たる國、重工業國と輕工業國或は原料生産國、從來獨立してゐた國と列强の植民地であつた國、民族獨立運動の經驗を豐富にもつてゐる國と全然もつてゐない國等、實に多種多樣である。

かくの如き現狀にある時、そのすべてを、無差別平等の立場を前提して指導することはできない。歴史發展の段階、經濟の發達狀態、民族の統一狀況等を考慮して、各々その處を得しめる方針がとられねばならない。

以上は、民族政策の根本方針であるが、これを更に具體的な政治、經濟及び文化の對策について云へば、先づ政治については、前にも說いたように、各民族の政治的、經濟的、歴史的發展段階及び民族の統一狀況等を考慮して、自主獨立をなし得るや否やを判定し、然る後對策を講ずる。例へば、中華民國や泰國は既に獨立してゐるが、印度、ビルマ、フイリツピン等にも獨立を與へて、民族解放を實現せしむる。

それ故に、全アジア民族をして、一律平等に、獨立國家を形成せしめるといふ如き政策は採用し得ない。要は、如何にすれば各民族をして、最大の幸福と平和を享受せしめて、共榮圏の完成に協力せしむるかといふ政策が必要なのである。

次に、經濟政策として、開發される物資は單に日本のみが利用するのではなくして、大東亞共榮圏建設の爲に使用されねばならぬ。葡萄牙と西班牙の政策は、單にその領土の資源を掠奪する

にあつたため、資源は直ぐ涸渇し、その政策も忽ち行詰つて了つた。英米蘭等の植民政策は葡西のそれより一歩を進めて、植民し、開發し、開拓して搾取するといふ方針をとつた。それだけ持久性があつた。

之に反して、日本の民族政策は、一切かゝる方法を排除し、すべて經濟的開發によつて取得した物資は、大東亞民族の共存共榮の爲に使用せねばならない。

勿論、大東亞戰爭は、一面大東亞諸民族の一大解放戰爭でもあるから、作戰の進捗のため、更に大東亞國防の完璧を期するため、それに必要なる戰略物資が重點的に確保され、開發されねばならぬことは、戰爭完遂の現段階に於ては、洵に止むを得ないことではあるが、共存共榮の理想は必ず達成されねばならない。

最後に、文化工作としては、新しい世界文化、共榮文化の建設にアジア民族全體の文化的努力を傾注せしむると共に、他面、各民族の歷史と傳統、風俗と習慣を尊重し、各民族が歐米文化の積弊より脫却して、民族文化の自主性を取り戻さんとする運動に對しては、好意的、積極的に協力せねばならない。

以上が、日本を主體とする大東亞民族政策の根本方針と具體對策であるが、これらを總括して注意すべきことは、我が國が大東亞の民族政策を考へる場合、常に一應此方卽ち日本の立場から考へると共に、其方卽ち各民族の立場からも考へ、相互の立場を前提し、最後に、共榮圈としての大東亞の「場」に立ち、更に「人」を中心として、日本の指導の下に政策を推進せしめなければならぬといふことである。

第一五節　大東亞建設と日本の人口政策

大東亞建設竝に東亞民族解放戰に於て、日本の役割は主體的であり、且つその使命は世界史的意義を有つてゐる。この世紀の使命を遂行する爲には、當然日本の實力的內容が軍事的、政治的經濟的に充實されねばならない。

その爲には、機構の整備、生產力の擴充、技術の向上等物的方面の充實も、もとより重要であるが、それと共に、人的要素の充實强化が考慮されねばならない。實は、資源の開發も、資材の生產も、技術の向上も、「人」を俟つて始めて實現されるものであるから、戰爭遂行と建設の進

展と共に、益々人口問題の重要性が加はつて來るのである。

「大東亞十億の民族」と一般に云はれてゐるが、印度と濠洲を含めて大東亞には十一億二千萬の人口が密集してゐる。この十一億を超ゆる尨大な人間を、七千三百萬餘(內地人口)の日本人が指導するのであるから、日本の人口は幾ら殖えても、これで足りるといふことはないのである。

滿洲事變、支那事變を經て大東亞戰爭に飛躍するや、人口殊に靑壯年人口の必要が益々痛切となつて來た。

第一に、作戰の進展と擴大につれて絕えざる兵員の補充が必要とされ、それは最も良質にして能率の高い人口を、量的に多數要求するのである。

第二に、軍需工業、重工業への勞務動員は、兵員の補充と同樣な重要性を有するものであつて、この部面に於ても良質の人口を無限に要求する。

第三に、日本農業の適正規模經營への編成替へと、滿洲國の國防國家完成の爲に、二十ケ年百萬戶移住の、滿蒙開拓集團移民計畫は、大東亞戰爭の進展にも拘らず、實現されねばならないが、この點に於ても尨大な人口が必要とせられる。

第四に、大東亞十億の民族を指導して、大東亞共榮圈を建設する爲には、優秀な素質の日本人が、直接現地に行つて、軍務、行政、產業、輸送、文化等一切の公務、事業、啓蒙等の指導的活動に從事せねばならぬが、この部面に於ても多數の人口が必要なのである。

かく檢討するとき、現下日本の人口要求は實に尨大であつて、果してこの要求に應じ得るや否や憂ひなしとしないのである。

政府に於ても、問題の重要性に鑑み、人口問題に對する從來の消極的態度をすてゝ、既に昭和十六年一月「人口政策確立要綱」を發表し、國家百年の大計の下に、半恒久的な人口政策を確立するに至つた。

該要綱は、先づ趣旨に於て、「東亞共榮圈ヲ建設シテ其ノ悠久ニシテ健全ナル發展ヲ圖ルハ皇國ノ使命ナリ。之ガ達成ノ爲ニハ、人口政策ヲ確立シテ、我國人口ノ急激ニシテ且ツ永續的ナル發展增殖ト、其ノ資質ノ飛躍的ナル向上トヲ圖ルト共ニ、東亞ニ於ケル指導力ヲ確保スル爲、其ノ配置ヲ適正ニスルコト喫緊ノ要務ナリ」と述べ、右の趣旨に基き、我國の人口政策は、差當り昭和三十五年に總人口一億に達成せしむる爲、その目標として、「一、人口ノ永遠ノ發展性ヲ確保

スルコト、二、增殖力及資質ニ於テ他國ヲ凌駕スルモノトスルコト、三、高度國防國家ニ於ケル兵力及勞力ノ必要ヲ確保スルコト、四、東亞諸民族ニ對スル指導力ヲ確保スル爲、其ノ適正ナル配置ヲナスコト」の項目を揚げ、更に右の目標を達成する爲採るべき方策として、「一、永遠ニ發展スベキ民族タルコトヲ自覺スルコト、二、個人ヲ基礎トスル世界觀ヲ排シテ、家ト民族トヲ基礎トスル世界觀ノ確立、徹底ヲ圖ルコト、三、東亞共榮圈ノ確立、發展ノ指導者タルノ矜恃ト責務トヲ自覺スルコト、四、皇國ノ使命達成ハ、內地人人口ノ量的及質的ノ飛躍的發展ヲ基本條件トスルノ認識ヲ徹底スルコト」を强調するに至つた。

如上、現下の人口要求は增大の一途を辿り、また、それに卽應するため、雄大な規模の人口政策も一應確立せられてはゐるが、現實の人口問題は必ずしも樂觀を許さぬものがある。

昭和十五年の國勢調査によると、日本(內地)の全人口は七千三百十一萬四千三百八人となつてゐる。これを、日本が近代國家として新たな發足をなした、明治五年の人口三千四百八十萬六千人に比較するならば、その尨大な人口增加に見る大和民族の興隆發展は、眞に力强いものがあるが、しかし、我國人口の增加率は、大正九年の三十六人を最高として年々低下する傾向を辿り、昭和十三年には二十六人にまで低下するに至つた。卽ち、昭和十二年までは平常の增加傾向を辿り、十二年の自然增加は九十七萬人であつたものが、支那事變直後の十三年は六十七萬人、十四年は六十三萬人と低下し、前途を極度に憂慮された。十五年は再び上昇して九十三萬人と支那事變前の平年狀態に歸つたが、人口の增加率は減退或は停滯し、之に加ふるに、國民體位もむしろ低下の傾向にあり、前途必ずしも樂觀を許さぬものがある。

然らば、日本民族の量と質を低下せしむる根本原因は何處にあるかと云へば、結局自由主義と個人主義を基調とする資本主義的都市文明そのものにある、といふことができる。

都市の生活は極めて複雜であつて、神經を消耗し、精神を疲勞させ、不自然なる食物の攝取によつて身體を阻害し、加ふるに結核、梅毒その他の執拗な傳染病の蔓延等、種々の原因によつて知らず識らずの間に身心を衰弱磨滅せしめ、遂に民族の質と量を低下せしめる。

試みに、我國大都市の人口增加率の內容を調査して見るならば、昭和五年に於て、東京市は人口の五八・八%、大阪市は五九・二%、神戸市は六一・九が同市以外の地域で生れた外來者によつて占められてゐる。最近、東京市の人口增加率を、外來者を除外した純粹な東京人のみに限つ

て計算するならば、驚くべきことに、增加どころか逆に減少しつゝある狀態であつて、この傾向が續くとすれば、即ち、外來者年々の補充がないものと假定するならば、百十九年目には、東京市の人口は零となる危險性を包藏してゐるのである。

更にこれを別個の統計によつて見るならば、農山村の家庭に於ては、結婚後二十年にして五人三分二厘の子を產んでゐるのに、同じ期間に、敎員は四人六分、女子大卒業生も四人六分、銀行員は三人五分一厘となつて、所謂知識階級は餘り芳しくない狀態にある。

かくして大都市は、常に出生率の高い外來者を吸收してゐながら、何時の間にかそれを出生率の低いものに變へて了ふのである。「都市は民族の墓場」と云はれるのも宜なる哉である。

然らば、これが打開策は如何。東條首相も、人口問題の將來を慮り、且つまた大東亞建設に際し、日本人口問題の重要性を深く考へて、去る第七十九回帝國議會の施政方針演說に於て、「今や國民の素質の向上と人口の增加とは、戰爭遂行のためにも、將また建設完成のためにも絕對必要になつた」と注意を喚起してゐるが、如上の弊を除去して、(一)人口の量的增加を計り、(二)その質的向上をなさんとする、積極的人口政策は如何に具現せらるべきであるか。

それには先づ第一は、結婚を奬勵して結婚年齡を早め、それに對して經濟生活を保證すること、第二は、個人を主とする世界觀を排し、家と民族を基礎とする世界觀の確立徹底を計ること、第三は、結婚、出生、育兒等に關する國家的な厚生施設を完備すること、第四は、國土計畫の遂行によつて、大都市を疎開し、工業の分散を計り、都市には綠地を作り、健全なる社會を構成すること、第五は、農村が最も優秀なる兵力及び勞力の供給源たる現狀に鑑み、農村人口は日滿を通じて全人口の四割を保持せしむること、第六は、大和民族永遠の發展に對する信念を把持せしめて、人口增加の政策に協力せしむべきこと、等が考慮され、その實現が期さるべきである。

更に、人口增加の消極面である死亡率の減少を圖るには、(一)乳幼兒の死亡を防止する設備を完成すること、(二)靑少年を蝕んでゐる結核の撲滅對策を講ずること、(三)一般傳染病を防止する設備を徹底させること、(四)其他一般的な醫療及び厚生の設備を改善すること、等の對策を講ずべきである。

大東亞共榮圈建設の指導者として、日本の人口政策の將來は文字通り多事多難である。これを切り拔け、大和民族の永遠の發展を期するためには、雄大な構想の人口政策が確立せられ、それ

が謬りなく實踐されねばならない。

人口問題に關連して、次に、今後南方に發展せねばならぬ日本民族の適確性に就いて若干觸れて見たい。

白色人種は南方進出といふ點に於ては、日本民族よりも豐富にして優れた歴史的經驗をもつてゐる。しかし、熱帶地方の生活は、白色人種の素質に、肉體的にも精神的にも強い影響を及ぼして、白人は熱帶地方に於ては、到底本國に於けると同樣の知識と能力を保持し、發揮することが困難なる實情が證明されたばかりでなく、漸次土着人種と同樣に、精神的能力の劣弱、肉體的怠慢、行動の遲鈍といふ如き傾向を辿り、更に、肉體的精神的疾病に對する抵抗力も微弱となり例へば、印度に於ては、英人にして四代續いた家族はなく、白人の第二世、第三世等は所謂劣等白人と稱される狀態にまで素質が低下し、結局慘憺なる風土的敗北を喫するに至つた。

これは、要するに、白人の熱帶生活に對する適應性が弱いことに基因してゐる。植物でも、生命力の強いものは如何なる荒地に移植しても生長するが、どんな美しい花を持つ植物でも、生力の弱いものは移植に成功しないのと同樣である。

日本の地理的環境が南方と北方の中間に位し、冬の寒冷と夏の酷暑とを共に經驗してゐる點に於て、日本民族は元來あらゆる風土に適應する素質と性格をもつてゐる。名古屋醫大の研究によれば、日本人は白人よりも汗腺が多いことによつて、熱帶地方に對する適應性は白人よりも強いことが證明された。しかし乍ら、日本人と雖も、炎熱灼くが如き熱帶地方に永住するときは、多かれ少かれ、その酷烈な風土の影響を強く受けることは避けられぬから、その影響を最少限度に喰ひ止めて、日本民族發展の新しい天地を擴大すべく、日本民族の叡智を總動員し、科學技術の總力を發揮して、その對策を考究すべきであらう。

それには、(一)日本民族に適應する熱帶生活を合理的、科學的に研究すること、(二)熱帶地方に活躍する日本民族の指導的人物は、二年乃至三年に一度は內地に歸還し、身心を保養し、英氣を養ひ、且つ世界の情勢に觸れしむること、(三)熱帶醫學を確立し、マラリヤ對策その他熱帶特有の病源に對する克服策を樹立すること、等が考慮されねばならない。

日本民族の優秀性を保持するため、南方地域への集團移民は行はぬ旨企畫院によつて聲明されたが、日本民族といふ主體も、南方地域といふ客體も、聰明なる叡智と、科學技術の力と、不屈

なる意志力によつて、ある程度變改されるものであること、即ち、日本民族を南方地域に適應せしむるよう自己錬成することが可能であると共に、南方地域の生活を日本民族に適應する如くある限度までの變改が可能なることを考へるならば、大建設への日本民族の心構へは、更に積極的であるべきを希望せずにはゐられない。

第五章　大東亞經濟の協力建設

第一六節　大東亞經濟の協力建設

大東亞戰爭は、武力戰が一應終局に達しても、長期に亙る經濟戰となることが確實であるから、經濟的抗戰力を强固ならしむるため、經濟建設の意義は極めて大きいといはねばならぬ。

大東亞經濟建設の根本方針は、米英自由主義經濟の依存より脱却して、東亞が本來の東亞に還り、日本を中心として日滿支が根幹となり、それに南方地域を包含した大東亞の國土に、自給自足、有無相通、共存共榮を主眼とする一大廣域經濟を確立せんとするにある。

外、ブロック經濟結成の緊迫せる世界情勢と、內、高度國防國家建設の必至の要請に促迫せられて、殊に支那事變以後、米英經濟より離脱の必要が强く叫ばれて來たが、單なる經濟手段のみによつてそれを成就することはできなかつた。

然るに、米英の對日攻勢が强化されるに及んで、日本は意を決して樞軸側に參加して、日獨伊

三國同盟を締結し、つゞいて、米英の經濟攻勢に對抗すべく、その直後「日滿支經濟建設要綱」を決定し、「賴むはたゞ自力のみ」といふ深刻なる經驗と認識の下に、「舊秩序依存の舊體制を振り棄てゝ新なる編成を決行」するに至り、日滿支ブロック經濟の建設に邁進するに至つた。

その後、米英の對日經濟攻勢は執拗に續けられ、禁輸物資の範圍は日を逐うて擴張せられ、皇軍の南部佛印進駐となるや、その報復手段として、米英は蘭印をも誘つて對日資産凍結令を發布して日本壓迫を强め、經濟攻勢は遂に經濟斷交の擧にまで立ち至つた。こゝに至つて、日本は自存自衞の爲め、起つて一切の障碍を破碎せんとし、大東亞戰爭の勃發となつた。

かくして、經濟手段によつては實現不可能なりし、米英依存經濟よりの離脱といふ年來の宿願も、茲に軍事的手段によつて漸く達成され得たのである。

大東亞戰爭は、同時に資源作戰を併行し、印度と濠洲を除く大東亞の全地域は、瞬く間に神速果敢な皇軍によつて席卷せられ、將來の作戰竝に大東亞國防體制確立のための戰略的資源は一切確保され、大東亞戰爭の一つの目的は達成された。

しかし、資源地帶を單に占領し確保しただけでは、日本經濟にとつてマイナスではなくとも、未だ現實的なプラスとはならない。それを早急に開發して今後の作戰に資すると共に、大東亞國防の完成に役立たせねばならないのである。

こゝに於て、南方資源開發の成否は、大東亞戰爭の完遂に多大なる影響を及ぼし、延ひては皇國興隆の鍵をなすのである。更に、恒久的に考ふるも、大東亞の經濟建設が順調に進捗するや否やは、大東亞の諸民族を共榮圈の建設に協力せしめ得るや否やを決定する重大事なのである。

南方開發竝に大東亞經濟建設の必至的重要性と、指導國日本の總力を發揮して邁進せねばならぬ重大な使命と責務が實に茲に存するのである。

しかし乍ら、米英依存經濟より東亞自主經濟への編成替は、正に歷史的な大事業であつて、到底一朝一夕にして實現し得られるものではない。

加ふるに、現段階に於ては、武力戰に勝利を得ること、戰爭を完遂することが大眼目であつて戰爭遂行に必要な戰略物資を先づ開發し確保することが、經濟建設の根本方針となり、その限りに於て、大東亞自給自足體制の基礎を確立するといふ方策が採られるのである。

然らば、その具體的建設の根本方針は如何といふに、それは第七十九帝國議會の豫算總會に於

て、東條首相によつて次の如く明快に說明された。

即ち、第一は、資源獲得、特に戰爭遂行上緊要なる資源を確保すること、第二は、南方資源が敵性國家に向け流出するを阻止すること、第三には作戰軍の現地の自活を確保すること、第四は在來の企業の我が方に對する協力を誘導すること、これである。これにより、戰略物資を確保し、加ふるに現地軍の自活を完うするを得て、戰爭が如何に長期に亘らうともその遂行を可能ならしめる。更に、日本の指導と相俟ち、現地に於ける民族資本の誘導によつて、自給自足體制の基礎を確立し得る。

更に、この根本方針に立脚する具體的な開發方式については、鈴木企畫院總裁によつて、次の如く具體的に詳述された。

(一)南方資源については、急速に開發を要するものあり、我が方の需要に應じ漸進的に開發するものあり、又過剩生產のため開發を抑制するもの等あるが、これら資源の開發の順位は、先づ中央に於て計畫を樹て、然して戰局の推移に應じ、當該資源需要の緩急度ならびに輸送の狀況等を考慮の上、その可否を決定する。

(二)各地域に於て取得または開發したる重要物資は、すべて物資動員計畫に組入れ、一元的にこれが用途を規制して、國家的に最高度の效率を發揮せしむる。

(三)石油、鑛產、農林產等の開發については、差當り新たなる綜合會社、共同企業等の形態を避け、經驗、能力ある企業者の熱意と創意とを十分に發揮せしめて、能率的生產をなさしむることを原則とし、該企業者が眞に國家の代行機關としての使命を自覺し、衷心より國家的に活動することを期待する。

(四)通貨については、當初は、現地通貨表示の軍票を使用してそれを現地通貨と等價に流通せしめ、情勢に應じ、逐次現地通貨と軍票との機能を調整し、その統一に進む方針がとられる。

(五)物資交易は、主として物資動員計畫に基き、豫め計畫的に豫定せられたる品目と數量について行はれるが、戰爭といふ特殊な狀態のもとに實施せらるゝため、現地よりの對日供給は、差當り政府の會計において買取輸入をなし、また、我國よりの對現地供給も、同樣に買取輸出をなすことにする。

(六)南方物資の輸送は、需要の緩急に應じ、輸送の順序、數量が定められ、陸海軍の統制の下

に、船腹の最も有效なる活用を計る。

（七）南方地域には、ゴム、錫、マニラ麻、その他幾多の特産資源があるが、我國はこれら資源の敵性國家に對する流出を極力防止し、米英に對し、資源による經濟壓迫を加へて逆封鎖をする。

（八）要するに、現段階に於ては武力戰に勝つことが大眼目で、一切はこの一點に集中されねばならない。

以上が、東條首相及び鈴木企畫院總裁によつて聲明された、現實當面の大東亞經濟建設方略の最高指針である。

然らば、かゝる現當の建設方略に立脚しつゝ、大東亞經濟建設は體制的には如何に具體的に構想せらるべきであるか。

第一に、戰爭卽建設・建設卽戰爭の立前の下、長期戰を豫想して、如上說明せる如く、先づ戰爭完遂の經濟體制確立に總力を結集すべきである。

第二に、かくの如き現當の目的を遂行しつゝ、日本を主體とする大東亞自給自足經濟體制の確立を期すべきである。その爲には、國土計畫に立脚して、大東亞各地域の產業立地を決定し、綜合的、計畫的に建設を推進せしむべきである。

第三に、大東亞經濟建設の中核は、飽くまでも日・滿・支の地域に置き、軍需工業、重工業はこの地域に建設さるべきである。此の點については、南方建設の軍政方針を明かにした、去る四月十一日の陸軍省軍務課員加藤中佐談に於ても、「注意せねばならぬことは、日滿支を忘れてゐるものがありはせぬかといふことである。如何に南が大事とはいへ、何といつても南は大東亞の一環に過ぎぬので、日本の國防の基礎は、矢張り日滿支にありといふことを忘れてはならない」と述べ、大東亞共榮圈建設の重點が、日滿支にあることを强調してゐる。

第四に、重點的には運輸の建設に全努力が注がるべきである。單なる資源を生きた資源とするには、現段階に於ては運輸に俟つところが多いからである。

第五に、國防の見地から、日滿支に於て食糧の自給が確保される如く、南方諸地域に於ても、單一的植民地栽培の偏向を是正し、各地域に於て可及的に食糧の自給を企圖すべきである。なほ共榮圈內纖維資源の不足に鑑み、棉花の增產を早急に達成する努力が拂はれねばならない。

以上が、大東亞經濟建設の構想である。

かくの如き雄大な構想をもつ大東亞經濟建設に當つては、米英的な自由主義的性格は當然拂拭されねばならない。米英の支配に日本が取つて代り、單に肩替りをするに過ぎないなら、それは決して聖戰貫徹の趣旨に添ふ所以ではない。搾取と壓制の對照たりし東亞を眞の東亞、即ち共榮的東亞たらしむるところに、今次聖戰の意義が存するのである。

自由主義機構は內外共に腐朽した。そこに、世界的には新秩序建設が企圖せられ、國內的には新體制が要請されるのである。加ふるに、戰爭そのものが長期化して、作戰の遂行は勿論のこと軍備の一層の充實、更に高度國防體制の確立は、益々緊要さを加へつゝある。なほ作戰に併行し、今次征戰の特質たる作戰即建設の立前から、作戰しながら共榮的東亞の建設を進めて行かねばならない。

かゝる重なる緊急重要課題の解決は、腐朽した自由主義機構の絕對に堪え得るものではない。それがためには、如何にしても國內經濟の再編成、自由主義的傾向の拂拭が要請せられる。

一切の企業を戰爭完遂の爲めの國家目的に統一し、重點主義に立脚して、戰時緊要の產業部門に全力を集中し、統制會を强化して軍需の充足と、最大の生產力擴先を企圖し、中小商工業の再編成と轉換によつて、戰爭經濟力の强化擴充に資し、土地制度の改革及び適正規模經營の設定を含む農業の再編成を圖つて、民族興隆の基盤たる農業人口の定有と共に、農家の安定と農業生產力の增强を圖り、かくして必勝の戰時經濟體制を確立し、以て大東亞經濟建設の主體としての日本經濟を强化すべきである。

これを端的に云へば、(一)長期戰の遂行と大東亞國防の完成といふ見地から、(二)日本經濟の指導による大東亞自給自足經濟體制の確立といふ立前から、(三)將來に於ける他廣域圈との國際的競爭に對する準備といふ立場から、大東亞經濟の指導體としての日本經濟の再編成、革新は必至避くべからざるものであつて、豐富なる南方物資の確保による自主義機構への復歸の如きは、之を到底所期し得ないのである。

大東亞經濟建設の成否は、日本經濟が眞にその指導性を確保し得るや否やに掛つてゐる。自己を革新し得るものゝみが他を指導し得る。日・滿・支を根幹とし、北方と南方の資源的基礎の上に構築さるべき大東亞經濟圈は、日本經濟の內部刷新による指導性の確保によつてはじめて確立されるのである。

第一七節　大東亞金融圏の建設

大東亞戰爭の輝ける戰果の結果、大東亞の地域が米英依存經濟より離脱して、自給自足的な廣域經濟圏を結成する段階に立ち至り、產業に於ても、交通に於ても、貿易に於ても、急速に自主的な東亞的再編成が進められつゝある時、何よりも先に實現されねばならぬものは、經濟の脈管體系としての大東亞金融・通貨體制の確立でなければならない。

今日までの東亞は、米英金融資本にとつて好個の投資場であり、實入り多き搾取の給源であつた。世界を支配したドルとポンドは、全東亞の國家と民族に對して魔術的な偉力を奮ひ、金と物資と民族のエネルギーを奪ひ去つて了つた。

米英は名にし負ふ經濟的に裕福な國であり、世界の金の八割は米國に集積されてゐるといはれてゐる程であつて、殊に通貨・金融手段による對日敵性行爲は目に餘るものあり、支那事變發生以來、數次に亙る援蔣借款の供與竝に法幣安定資金の設定等は、その生々しい實例といはねばならない。

然るに、東亞に對する日本の軍事的、政治的指導力は、當然經濟の指導力を伴ひ、今やドルとポンドに代つて、日本圓が東亞自主經濟運營の鍵を握ることになつた。我國長年の待望であつた所謂圓ブロックが今正に結成されんとしてゐるのである。

即ち、大東亞戰爭勃發後、日本は早くも新爲替政策を確立し、續いて、日本銀行の改組を斷行して、米英の金融・通貨機構に連繫する金本位制度を完全に離脱し、新たに管理通貨制度を採用するに至つた。而して、共榮圏內各國の通貨は、日本圓を盟主としてこれに連繫し、爲替決濟は恰も歐洲經濟圏に於けるライヒス・マルクの如く、日本圓が基礎となり、日銀が中核となつて、東京に於て之を行ふ。換言すれば、日銀は廣く共榮圏內諸地域の各中央銀行及び爲替銀行と、爲替清算協定を結んで、日銀內にその清算勘定を設け、日銀が文字通り共榮圏內各中央銀行の中央銀行となるのである。かくして、圓を基礎とし、東京が中心となり、日銀が中核となつて、大東亞共榮圏金融・通貨體制を確立せんとするに至つたのである。

かくの如く、米英通貨基準を一擲し、敵性通貨より絕緣してそれを東亞より放逐し、それに代つて自主的な金融・通貨體系を確立し、以て大東亞に於ける資源開發、物資交流及び金融の調整

に油の役割をなさんとするのが、日本圓の使命である。

金本位制を廢止して管理通貨制を採用するに至り、通貨の信用に關し社會的經濟的不安を醸成しはせぬかと、若干危惧の念を抱くものがないではないが、しかし、通貨の信用を裏付けるものは金ではなく、一國の綜合經濟力、ひいては綜合國力即ちその軍事力、政治力、經濟力を含む國の總力であるから、金兌換が停止されようとも、毫末もその惧れは存しないのである。

のみならず、大東亞金融・通貨體制の確立につき、極めて希望に充ちた展望を與へる、次の如き諸種の條件が存在して居ることを見逃してはならない。

その第一は、南方地域は支那と異つて、何れも巨額の出超國であるといふことである。即ち蘭印は十億四百萬圓(昭和十五年)、馬來は五億三千萬圓(十五年)、ビルマは三億三千三百萬圓(十五年)、泰、佛印は何れも一億圓(泰十三年、佛印十四年)、比島は八千五百萬圓(十五年)であつて、合計二十一億五千三百萬圓の出超となつてゐる。從つて、これらの出超分が、從來の如く、莫大な利子・配當・恩給・俸給等諸種の形に於て、米英蘭によつて持ち去られることなく、東亞的に內部保留されるならば、それだけ大東亞の通貨的基礎は强化されることになる。

第二は、南方地域に對する各國の投資は概算百六十億圓に上り、その中米英蘭の合計は百五億圓見當であるが、これをすべて敵性資產として管理するならば、大東亞の經濟建設を助長し、新通貨制度を更に强固ならしめ得る。

第三は、南方地域に於ける通貨發行高が少い爲めに、その整理統一を容易ならしむることである。卽ち、昭和十五年乃至昭和十六年二月に於て、蘭印二億ギルダー(四億九千萬圓)、泰二億三千九百萬バーツ(三億八千萬圓)、比島一億六千九百萬ペソ(三億六千萬圓)、馬來一億六千八百萬海峽ドル(二億六千八百萬圓)、佛印三億ピアストル(三億圓)、ビルマ一億一千萬ルービー(一億四千二百萬圓)で、合計十九億四千萬圓である。

如上によつて明かな如く、東亞共榮圈新通貨制度の建設は、諸種の極めて有利な條件を具備してゐる。從つて、もし日本圓が、これら南方地域の通貨に連繫する中樞的通貨となり、東亞共榮圈に於ける必需物資の計畫的交換と計畫的決濟に當るならば、新通貨制度の基礎が愈々强固となることは極めて明瞭である。

然らば、次に、南方地域の資源開發及び物資交換のため、その必要とする資金を供給する目的

を以て設立された南方開發金庫は、如何なる組織と形態を具へてゐるのであるか。

(一)南方開發金庫の使命は、同金庫法第一項に明かな如く、「南方地域に於ける資源の開發及び利用に必要なる資金を供給し、併せて通貨及び金融の調整を圖る」を目的とするものである。

(二)本金庫の業務地域である南方地域とは、差當り皇車の作戰地域を指し、比島、マレー、蘭印、ビルマがそれに含まれて居り、泰と佛印特に香港は除外されてゐる。もつとも、この業務地域は、作戰の進展と共に擴大される性質を有つてゐる。

(三)本金庫貸出の通貨は、圓通貨を使用せず軍票を以てこれに當てる。即ち、今後南方開發に於て、政府は臨時軍事費特別會計から本金庫への貸付を爲し、それに軍票を供給する。しかして、これら南方地域には、比島には「ペソ」、英領マレーと英領ボルネオには「海峽弗」、蘭印には「ギルダー」等の通貨が既に流通してゐるので、貸付の軍票は、それぞれ各地域流通の通貨を表はし、或は「ペソ」表示、或は「海峽ドル」表示、或は「ギルダー」表示として供給される。

(四)南方開發金庫は本金庫を東京に、必要なる地域に支金庫及び出張所を置き、なほ南方諸地域に於ける現地金融機關たる正金、臺銀、鮮銀その他の機關をして、金庫の業務を代行せしむると共に、これら機關の親銀行として資金供給の一元的統制を圖らんとする。

(五)本金庫の監督には大藏大臣が當るが、融資に際しては民間統制團體の意見を參酌して、政府と大本營の協議會に於て愼重に決定し、現地軍司令官に指令することになつてゐる。

(六)本金庫は、南方地域の通貨、金融の調整に關し、日本銀行と竝んで、大東亞金融圏の中樞機關として活動する。

かくして、南方開發の根本方針として、自由主義に基く企業の進出を一切否定し、高度の綜合的計畫の下に、國家目的に適合する方法を採用するに至つた。

なほ、大東亞金融圏の確立には、我が國金融機構の綜合計畫的再編成が要求せられるので、政府に於ても、南方開發金庫の設立と共に、新たに日本銀行法を成立せしめて、日本銀行の劃期的な改組を斷行するに至つた。即ち、

(一)　日銀は從來の株式會社組織を揚棄して、公的性質を有する特殊の法人組織に置き代へるに至つた。

(二)　日銀は從來國內商業金融の調整を中心業務としてゐたが、生產力擴充の緊要さに應じて

產業金融の調整にも當り得るの途を開いた。

（三）　從來の國債のみに止まつた日銀の市場操作を擴張して、手形、國債、債券及有價證券等の賣買を行つて、積極的に金融市場の調整操作をなし得るに至つた。

（四）　日銀は今後、國際貸借尻の決濟、外國爲替の賣買、東亞共榮圈內各中央銀行相互間の貸借決算をなし得ることになつた。

（五）　今後、日銀を中心に金融統制會を組織し、國內信用制度の確立を計つて、國內の金融機關に對し、國家信用の積極的、全面的授與をなし得る立場になつた。

（六）　從來の兌換銀行券條例による金本位制度を廢止し、新らしい發券制度を打立て、管理通貨制を採用するに至つた。

かくして、新日本銀行は、內は、わが國の中央發券銀行或は國內金融統制の主體として、外は大東亞共榮圈諸國の中央銀行の中央銀行として、その使命益々重きを加へるに至つた。

如上、南方開發金庫の設立と日本銀行の改組により、大東亞共榮圈金融・通貨體制の基礎は一應確立し、今後、大東亞の全域に亙る資源の開發、物資の交流、通貨・金融の調整は順調に進められるに至つたのである。

第一八節　大東亞工業の建設

東亞共榮圈地域の特質は、第一に農業地域であり、第二に鑛產資源の地域である點にある。

日本は從來「持たざる國」であつたが、今や大東亞戰爭の輝ける戰果の結果、一躍して「持てる國」となり、國防工業、重工業、化學工業等を發展させる爲に、代用可能な數種の原料を除く大部分の資源を自給することが可能となり、將來產業的に大發展をなすべき基礎を確立することが出來た。

嘗て資本主義發展時代の英國の理想は、世界の資源を獨占し、自國を高度に工業化して「世界の工場」たらしめ、以て世界市場に君臨せんとするところにあつた。そのためには、自國の農村を破壞して牧場となし、或は貴族富豪の狩獵場と化することすら敢てなすに至つた。

かゝる英國の理想は、後れて資本主義發達の段階に入つた他の國々に於ても、多かれ少かれ模倣され、資本主義發展につれて、都市と工業は急激に發展し、農村と農業は急速に解體せしめら

れ、英國ほど極端ではなくとも、多少とも英國的な發展の經路を辿るに至つた。こゝに、階級對立と社會不安の根源を釀成した、資本主義時代に於ける都市と農村、農業と工業の發展の不均衡といふ現象を露呈するに至つた。

しかしながら、かゝる畸型的な社會及び產業の構成は、一種の病態であつて、その上には決して强固な國家は建設され得ない。資本主義、自由主義の批判として出發した新しい世界觀及びかゝる世界觀に立脚した高度國防國家確立の要請は、不敗の國家を建設せん爲めに、產業發展の極度の不均衡を是正し、公正と調和の原則に立脚して、人事の刷新と機構の再編成を企圖するに至つた。それには、「機械を作る機械の生產」・「生產手段の生產」(高度工業)が發展せしめられると共に、それと同時に、「食糧の生產」(基本生產)が充分に確保せられねばならぬ旨が强調されるに至つたのである。

我國に於て、昭和十五年十月二日閣議決定となつた「日滿支經濟建設要綱」は、謂はばかゝる原則が具體化されたものであつて、そこには、一方に於て我國に於ける重・化學工業の發展が指示されながら、他方に於ては、國家安定の基礎として「農村人口の定有」が企圖されるに至つた。

かくの如く、「農は國の大本なり」といふ瑞穗國傳統の思想が、近代國家形態の下に於て改めて復活し來りたるのみならず、それは國家社會存立の基礎として、今後益々强固に築き上げられねばならぬことは云ふまでもないが、大東亞共榮圈建設に於ける日本產業發展の基本動向が、高度工業化の方向にあることは、何人も否定し得ぬ處であらう。

元來、日本の工業は明治以來、纖維工業を基本として發展し來つたので、現在に於ても、その性格は拔け切つてゐるとは云へないのである。卽ち、日本產業の基本性格は生絲を輸出して棉花を輸入し、更にその棉花に加工して綿絲・綿織物を輸出して、それによつて軍需工業・重工業の資材を輸入し、以て戰爭經濟目的たる軍需工業の生產擴充をなさんとしたのである。この目的は豫定の如く達成せられ、殊に紡績業の發展は目覺ましく、日本紡績業は遂に世界市場に於て英吉利紡績業を壓倒し、名實共に世界一を呼稱するに至り、日本の「富國强兵」、ひいては國防國家確立に重大な寄與をなすに至つたのである。

かくの如く、過去に於ける日本工業の性格は輕工業的であり、それは現在に於ても脫却し切つてゐるといふことはできないが、滿洲事變、殊に支那事變以來、內外の必要に迫られて、我が國

は飛躍的に、一路高度工業化への途を驀進して來たことは紛れもない事實である。

かくして、「日滿支經濟建設要綱」に於ては、產業立地と日滿支ブロック經濟發展の見地から、左の如く日滿支三國の綜合的計畫經濟を指示するに至つた。

「產業分野ノ決定ニ方ツテハ、日滿支三國ノ立地條件ト夫々ノ經濟發展段階ヲ考慮シ、眞ノ有機的一體トシテ綜合的ニ之ヲ決定スルコトガ肝要デアル。

皇國ハ今後高度ノ精密工業、機械工業ノ劃期的振興ヲ圖リ、重工業、化學工業及ビ鑛業等ノ基礎產業ヲ大イニ發展セシムルコトガ必要デアル。

滿洲國ニ於テハ鑛業及電氣事業ノ劃期的發展ヲ期待スルト共ニ、重工業及化學工業ノ發展ニ對シテモ我國ハ必要ナル援助ヲ提供スルモノデアル。

支那ニ於テハ今後鑛業及製鹽業ヲ發展シ、工業原料ノ大量生產ヲ期待スルト共ニ、立地的條件カラ見テ、重工業及化學工業ノ發展ノ餘地アリ、今後ニ期待スルモノデアル。輕工業ノ大陸ニ於ケル發展ハ、之ヲ大イニ助長スル必要ヲ認メル。又將來皇國ハ輕工業就中纖維工業及雜工業ヲ逐次整理シ、之ガ大陸移動ヲ考慮スルノ要ガアル。」

如上の傾向は、大東亞戰爭によつて更に促進せられた形である。卽ち、日本は今や次の如き必然と必要とによつて、必至的に重工業化せねばならぬ過程にあるのである。

第一に、高度國防國家は精密工業、機械工業、化學工業等の重工業の發展なくしては建設され得ない。重工業は、正に、高度國防國家建設の物的基礎の鐵筋をなすものと云ふことが出來る。

第二に、日本が輕工業を大陸に移駐し、更に南方共榮圈の各國に於て、農業に於ける適地適作の如く、產業立地に從つて各種の民族工業、種族工業を育成せしむるには、それに必要なる生產手段、機械機具類を供給せねばならない。

南方共榮圈地域に於ても、從來、漸進的な工業化への傾向にあつたため、それに必要な生產手段等は、その大部分を米英に仰いでゐたのであるが、大東亞戰爭の結果、南方共榮圈に於ても必然的に米英依存經濟より離脫するに至つたので、此の點、日本は米英に代つて、而も搾取を企圖するのではなく共榮を目的として、その必要とする生產手段や機械器具類を供給せねばならない。

この見地からも、日本の高度工業化は必至の情勢にある。

第三に、高度工業化の必要が叫ばれても、それに必要な資源が缺乏してゐるなら、望むべくし

て行はれないことである。然るに、今や日本は、北方（日本・朝鮮・滿洲）の石炭と電力と南方の石油とを得て、高度工業發展の基本となる動力を充分に確保するを得、更に、あらゆる重工業發展のための原料資源を充足せしむることができるのである。

第四に、國防の點に於ても、政治・經濟の點に於ても、はた又文化の點に於ても、調和的な自給自足的安定圏を形成するには、英國の如き「世界の工場」であつては勿論いけないし、それかと云つて、丁抹の如き農業國であるだけでも不充分である。そこには、「生産手段の生産」が最高度に發展してゐると共に、尚且つ「食糧の生産」の基礎が強固で、農が依然として國の礎をなしてゐることが必要である。即ち高度工業と基礎農業が、兩々相俟つて確保され發展されねばならない。その時はじめて、眞に強固な高度國防國家が建設されるのである。かくして、調和的な安定圏建設のためにも高度工業化は要請せられる。

かくの如きが、日本に於ける高度工業化の必然と必要であるが、眞に高度工業化を達成するに最も緊要なものは、單に資源のみではなくして、資源を生かす科學と技術である。科學と技術の發展なくしては、如何に資源が豐富であつても、その目的を達成することはできない。

之に反して、科學と技術の武器を以てするならば、瓦石を變じて黄金となすことは出來ないにしても、獨逸の如く、空中の窒素を固定して硫酸アンモニアを製造することも出來れば、天然石油に代る人造不油を極めて豐富に生産することもできるのである。

この點については、後段「大東亞科學技術の建設」の項に於て、詳しく觸れるつもりであるから、こゝでは詳述を省くが、資源を生かすものは科學と技術であり、高度工業發展の眞の動力は科學と技術であることを强調したい。

第一九節　大東亞農業の建設

大東亞共榮圏地域の基本的特質は、前節にも述べた如く、その豐富な鑛産資源の存在にも拘らず、經濟發展の段階が、依然として農業國であるといふ點に存する。從つて、大東亞共榮圏建設に對する農業の役割は基礎的なものであつて、農業再建の成否こそ大東亞建設の鍵を握るものといふことができる。勿論、農業再建に於ても、大東亞經濟建設の根本方針に從つて、米英世界市場への依存より脱却して、東亞自主の立場に還り、自給自足の體制を整へねばならぬことは云ふ

までもない。

然らば、かゝる再建さるべき大東亞農業の特質は、如何なる點に存してゐるのであるか。

第一に、それは植民地的栽植企業である。これは東亞、殊に南方地域の植民地的性格から來てゐる。云ふまでもなく、南方地域は米英蘭の植民地であつたので、母國の資本は高利潤を求めて所謂栽植企業に資本を投下し、植民地的經營を發展させて、原住民の自給自足などを顧みることなく、植民地的單一作物の栽培を强要するに至つた。こゝに、栽植企業が發展するに至れる根據がある。

第二に、栽植企業の特徴として、それは住民のための生産、或は自給自足を立前とする經營ではなくして、母國である米英蘭等の諸國が支配する世界市場のための企業であり、經營であつて何時でも、世界市場の景氣不景氣の波に支配されて安定性を缺き、殊に、世界恐慌に際しては甚大な打擊を蒙つて、住民の生活は窮乏のどん底に突き落される狀態に立ち至るのである。

第三に、かゝる經濟は、支配國の要求に應ずるのみで極めて依存的であり、何等の自主性なく、從つて、住民はすべて未開のまゝ放置せられており、政治的、經濟的、文化的及び精神的に隷屬の狀態に置かれてゐる。

第四に、技術的な特徴であるが、南方農業は熱帶農業であるといふ點に存する。この點は、殊に日本農業とは著しく相異しており、日本農業と南方農業は對立關係にはなく、相互補足の關係にあるといふことができる。

以上が、大東亞農業の特質であるが、右により、大東亞農業の再建は、是非ともこの特質に立脚して計畫されねばならない。

然らば、大東亞經濟建設に卽應する大東亞農業建設の具體方針は如何であらうか。

先づ第一に、米英依存より離脱することによつて世界市場との關聯を立ち切り、單一作物栽培の偏向を是正すると共に、適地適作主義を原則としながら、東亞自主、東亞農業の自給自足體制を確立すべきである。

第二に、食糧は日本に於ても、東亞圈に依存することを止め、內外地（日本・朝鮮・臺灣）に於て自給自足を計るべく、他の共榮圈諸國に於ても、可及的に食糧の自給を試みるよう計畫する例へば、米英のために、ゴムや砂糖を生産するマレーや、フイリツピンや、ジヤバの農民が、一

方米の不足に惱まされるならば、その生活は決して安定し得ないからである。

第三に、生ゴム、麻類、甘蔗、茶、珈琲、煙草、コプラ等の過剩農產物の中、國防に不可缺のものは除き、相當程度の生產制限をなし、それを食糧或は棉花等の生產に轉換すべきである。

第四に、かゝる作付の轉換或は新なる開發、即ち南方農業の再編成、再建のためには、日本の資本と技術が導入され、その再編成を指導誘掖せねばならない。殊に、南方特有の熱帶農業に對しては、日本の農業技術は未經驗であるから、こゝに、日本農業技術の大なる試練が横はつてゐる。日本の技術は、こゝに於ても、その指導者としての使命と責務を完遂せねばならない。

かくの如きが、大東亞農業建設當面の具體方針であるが、かゝる方針が誤りなく實踐されるためには、何よりも先に、日本農業それ自體が再編成されることによつて、その指導者としての主體性を確立せねばならない。

日本の米作技術は國際的に高い水準にあり、それは、やがて、全東亞の米作技術を指導する立場に立ち至るであらうが、日本の農業それ自體は、必ずしも發展の高い段階にあるといふことはできない。それは、日本の農業が、日本の國防國家及び國防國家確立の基礎としての高度工業の育成のために、緣の下の力持ちの如き役割をなして來たゝめに基因してゐるのである。

しかし、現在世界史の動向は、國內の農業を完全に犧牲にし、淸掃して、一路「世界の工場」たらんとした資本主義的發展の時代にはなくして、極めて强固な農業的基礎の上に、精密にして高度な工業を建設し、以て高度國防國家と廣域生活圈を確立する時代であるから、農業と農村の重要性が、新らしい認識の下に反省されるようになつて來たのである。

然らば、かゝる觀點の下に、日本農業は如何に刷新され、再編成さるべきであるか。

第一に、日本農業は「民族の母胎」として、最も純潔な日本民族を育成する血と土として、國民の精神と身體を保持する基礎として、常に維持・培養・發展されねばならない。

第二に、高度國防國家の基礎として、食糧は內外地を通じて自給を確保し、外米の移入はこれを貯藏に當て、以て有時の際に具ふべきである。

第三に、以上の見地より、農村人口は全人口の四割を保持してその限界を破らず、永遠に生々發展の基礎を確保すべである。

第四に、日本農業の經營は極めて零細過少であつて生産力低く、また農民の生活も文化の恩惠に浴する機會稀にして、内外の駸々たる發展に即應しない憾みがあるので、滿蒙開拓民の集團移住によつて、過少農を整理し、適正規模農家を設定して、農業經營の合理化を企圖せねばならない。

第五に、それには、先づ土地制度を合理的に改革し、可能な範圍に於て、日本農業に適應する機械を導入して共同經營を進め、更に、有畜農業を加味して、共に肥料問題の解決を圖らねばならない。

以上は、日本農業再編成の、既に常識化した案であるが、大東亞農業の再建に即應して、日本農業を如何に再編成して、その主體性を強化し、指導性を確立すべきかといふことは、極めて困難な問題ではあるが、「瑞穗國」といふ農業の歴史的傳統を有する我國は、必ずやこの困難を克服し、アジア的モンスーン(季節風)形態の水田耕作の大地域に、大東亞國防體制をいやが上にも強固ならしむべく、鐵石の基礎建築を、「戈を執る鍬を把る一體心」(江渡狄嶺先生)の信念を以て、「米」を作る日本及びアジアの全農民によつて、必ずや築き上げるであらうことを信じて疑はない。

第六章　大東亞文化の協力建設

第二〇節　大東亞文化の協力建設

「東洋の理想」のために戰つた岡倉天心は、アジアは一つであると喝破した。

「アジアは一つだ。ヒマラヤ山脈は、二つの强力な文明、孔子の共同主義を有つ支那文明とエーダの個別主義を有つ印度文明とを、たゞそれを强調せんがために分つ。しかしながら、この雪の障壁を以てしても、あの究極と普遍とに對する廣い愛の擴がりを、たゞの一時も遮ることは出來ないのだ。この愛こそは、全アジア民族共通の相續財産ともいふべき思想なのだ。この愛こそは、彼等に、世界のすべての大宗教を生み出すことを得させたものなのだ。そして、彼等を、地中海やバルト海の諸民族、特殊に留意することを好み、生活の目的ではなしに手段を探究することを好むところの、これら諸民族から區別する所以のものなのだ。」

「萬世一系の天皇を戴くといふ無比の祝福、嘗て征服されたことの無い民族だといふ誇らかな

自恃、祖先傳來の觀念と本能とを、その擴大を犧牲として守りおほせた島國的孤立、これらのものが、日本を、アジアの思想と文化との眞の信託倉庫たらしめたものだ。」

「アジア文化の史上の富を、その秘藏の標本に依つて、連續的に研究することの出來るのは、たゞ日本に於てのみである。」

「それ故、日本はアジア文明の博物館なのである。いな博物館以上のものである。何となればこの民族の不思議な天才は、古いものを失ふことなしに新しいものを歡迎する、生ける不二元主義の精神に於て、過去の理想のあらゆる段階に注意するように彼を導くからだ。」（淺野晃譯「東洋の理想」、一頁―一一頁）

然らば、如何なる意味に於てアジアは一つであるか。都市に發達して「生活の手段」を追求する西洋文明に對して、農村に生成して「生活の目的」を探求する東洋文化はたしかに一つである。しかしその同じ東洋の中でも、ペルシ文化、印度文化、支那文化、日本文化と、その個性的な特徴を强調すれば、アジアもアジア文化も必ずしも一つではない。それにも拘らず、アジアを一つとゝるのは何んであるか。それは、日本文化卽アジア文化、アジア文化卽日本文化といふ意味に於て、アジアは一つなのである。

日本は東洋文化遺產の唯一の相續者である。岡倉天心の言葉を借りれば、日本は東洋文化の博物館であり、信託倉庫である。日本は東洋文化の一切を攝取し保持した。しかし日本は單に受動的に攝取保持したのではなくして、それを日本文化の中に主體化して、東洋文化本來の精神を更に發展させたのである。卽ち、日本は東洋を保持したのみでなく、東洋を發展させたのである。こゝに日本文化は東洋文化であり、東洋文化は日本文化であるといふ意味がある。卽ち、日本文化であると同時に東洋文化なのであつて、かゝる意味に於いてアジアは一つなのである。

かゝる、一つである東洋文化の中に、生活の目的ではなくして手段を追求する西洋文明が浸入し來り、それは過去四百年に亙つて、東洋文化の花園を荒し、正に東洋の西洋化を實現せんとした。東洋に對する西洋は、文化に對する文明、全一に對する個別、生活の目的に對する生活の手段、宗教に對する科學、精神に對する物質、生命に對する機械、王道に對する覇道の原理として一應區別せられるが、東洋の西洋化は急速に實現し、正に東洋は歷史的に沒落する運命に逢着したのである。

かゝる時、最後の抵抗者が現はれた。それは、東洋文化の唯一の相續者である日本そのものであつた。しかし、日本は單に西洋文明を全面的に否認し、それを對立的に拒否するといふ單純な方法によらずして、過去に於て、東洋文化としての印度文化と支那文化を攝取包容せし時と同樣に、日本的體系の發展のためには、外來文化・文明の長所は攝取して捨てずといふ、驚くべき賢明さと包容力を以て、西洋文明の長所を取り入れることによつて、一方、西洋文明の植民地となることを逃れ、日本文化の中に東洋文化の精髓を守り續けると共に、他方、更に新なる西洋文明を附加して、自己を豐富にすることによつて、歷史上前例なき豐麗多彩な世界文化としての日本文化を形成するに至つたのである。

かゝる、日本文化發展の歷史的經驗は、新なる大東亞文化の建設に際しても、一つの模範を示すのである。然らば、大東亞文化建設の目標は何處に置かるべきであらうか。

第一に、アジアは一つであり、それは日本に於て一つであるといふ意味に於いて、日本文化の指導性卽ち八紘一宇の皇道文化の確立と、その大東亞諸民族への理解の浸透が企圖されねばならない。單に印度文化、支那文化、回敎文化等を集積し、綜合したゞけでは、大東亞文化は確立されれ得ない。個別的な文化を內に含みながら、それが全體として生成的、有機的に統一されてゐなければならない。そして、その統一の原理は、我々自身がもつてゐる日本文化、卽ち日本文化であると共に東洋文化である日本文化でなければならない。謂はば、日本文化は日本の本來的な傳統的文化であると共に、東洋文化の凝集された文化なのである。日本文化は日本の「立場」の文化であると共に、同時に東洋の「場」の文化なのである。東洋文化を形成する原理とその紐帶は日本文化の中に存してゐる。こゝに、日本文化の東洋文化に對する指導性が存すると共に、日本文化の東洋文化的基礎がある。

第二に、各種の民族文化、個性的な各民族文化を發展させねばならない。この點、日本は日本文化の指導性を確認しながらも、單に偏狹な「日本主義」を押しつけてはならない。米英蘭の文化政策は、支配下の諸民族に對し、自己の文化を支配文化として强制的に押しつけるか、或はその民族文化に全然無頓着な態度をとつてそれを放任してゐるか、その何れかであつた。和蘭本國がその支配下のインドネシア民族に對する文化政策は、後者の典型であつて、同民族の中、讀書能力を有するものは、全民族の僅か六パーセント四（一九三〇年調査）に過ぎない事實は、これを

有力に物語つてゐる。日本の大東亞諸民族に對する文化指導はこれと正反對であつて、日本は、各民族をして各々その處を得しむるため、各民族の文化的自主性確立の運動に積極的に協力すると共に、更に、その民族文化の「立場」を、「場」に立つ大東亞文化にまで高むるよう、謬りなく懇切に指導すべきである。かくして、個別的な民族文化を生かしながら、全一的な大東亞文化を發展せしむることを得るのである。

第三に、新しい大東亞文化の特色は勤勞文化でなければならない。歐米文明の第一の特色は、搾取文明である。それはローマ法に立脚したローマ文明が搾取文明であるのとよく似てゐる。否歐米文明はその點に於て、ローマ文明を繼承發展させたものである。ローマ文明が結局沒落した如く、歐米文明が沒落する根據と必然が正にこゝにある。「搾取」は宇宙の理法、自然の法則に反するからである。

これに反して、生々發展して止まない日本皇道文化の一つの特徴は、實に「むすび」(生産)の原理であつた。これにより、日本文化は本來が生み産むの文化であり、從つて、勤勞の文化である。そして、それは宇宙の理法、自然の法則に合致してゐるのである。

加ふるに、高度國防國家の確立そのものが、勤勞を必要とする。國防經濟の二大重點である軍需品の生産と食糧の生産は、産業戰士と農民の勤勞なくしては達成され得ない。大東亞共存共榮の樂土を建設するために、ともに生産に勤しむといふ意識こそ、大東亞文化建設の一つの指導原理とならねばならない。

第四に、大東亞文化建設の原理は、「場に於ける行」の論理に立脚すべきである。これを一言にして云へば、西洋文明の論理は「有」の論理であり、東洋文化の論理は「無」の論理(西田哲學の論理)であると云はれてゐるが、日本文化の論理は「有」でもなく、また「無」でもなく、「有」も「無」も一つのありやうとしたる「事」を主體的に把握した「行」そのものの論理である。生活卽哲學として生きて來た日本民族は、本來が行的な民族であり、實行的な、主體的な、行的な立場から一切を攝取し、包容し、發展させて來た。行的であるから、西洋風にことごとしく「言擧げ」せなかつたのである。そして、かゝる日本民族の「行」的な特徴は、武士道其他數々の歷史的事例によつて說明することができるが、而も、その最も自覺した現はれの一つとして、道元や親鸞などの鎌倉時代の宗敎を擧げることができる。從つて、鎌倉時代の宗敎は、單に佛敎的な立場

からだけでなく、世界史的な觀點から新らしく認識され直さなければならない。

しかし、その「行」も、單に知に對する「行」(紀平正美博士)ではなく、また「知行合一」(王陽明)の「行」でもなく、行一つで見てゆく「行」(江渡狄嶺先生)であり、その特色としては、(一)知も行の働きとして見る「行」、(二)西洋風な「爲」(なすわざ)と「行」を混同せぬ「行」、(三)つまり、「なすわざ」を離れてある「行」ではないが、それとはつきり區別されたる「行」なのである。

かゝる純一無雜の「行」、そして「誠」そのものとしての「行」こそ、日本民族本來の「行」の姿なのである。そして、その「行」が、「場に於ける行」として、「行」を「場」の鏡に於て見るとき、それは、主觀的、獨斷的な「行」とならずに、主客合一した眞正の「行」となるのである。

「無上なる理念と、その具體的顯現としての日本國體は、普遍的にして中外に施して悖らぬ最高價値がある。日本民族の使命は、世界に行を解らせ場をわからすことだ。行と場から立つた新しい學を打ち立てなくてはならぬ」

と江渡狄嶺先生が云はれるのは、そのためである。(「場に於ける行」の哲學的解明については、何れ機會を得て試みたいと思つてゐる。)

日本文化は、今や單なる日本文化ではなく、大東亞文化としての日本文化であり、更に世界文化としての日本文化である。そして、世界文化としての日本文化であることによつて、同樣に自己を世界文化として主張する米英文化を眞に克服して、武力戰及び經濟戰に於て勝利を得ると共に、文化戰に於ても最後の勝利者となることが出來るのである。

前にも述べた如く、大東亞戰爭は單なる武力戰ではなく、また一律的な國家總力戰でもない。それは、正に「世界觀の戰」であり、「原理鬪爭」であり、嚴密な意味に於ける世界文化の爭覇戰である。卽ち、それは同質的な一の文化と他の文化の、單なる時代轉換の戰ひではなくして、舊文化體系と新文化體系の、異質的な世代交替の戰ひなのである。

かくして、新しい文化は、東洋文化と西洋文明を攝取、融合、統一して、更にそれを渾然たる形態に於て發展させた世界文化であり、そして、かくの如き世界文化創造の指導者、主者體は正に日本民族であり、日本文化なのである。こゝに、日本文化の世界史的意義と使命がある。

第二一節　大東亞宗教對策

「光は東方より」といふことは、二重の意味に於て世界史の事實となつてゐる。第一は、遠い人類の歴史の夜は、東方のヒマラヤの嶺より明けたといふこと、そして、世界の大宗教である基督教、佛教、回教は東方の世界に起つたといふことにより、第二は、今や「東方の君子國」としての日本が、世界の光とならんとしてゐることによつてである。

歐羅巴が希臘科學を生んだのに對して、亞細亞は、西亞の乾燥アジアにせよ、東亞の濕潤アジアにせよ、不思議に世界宗教の母胎となつた。亞細亞は、大體に於て水田耕作を主とする農耕社會であり、それによつて、亞細亞は宗教と結び付いてゐる。農耕文化は、必然的に宗教の形態を取るからである。農耕生産は自然に支配される部面多く、自然は威力としも、はた又恩惠としても、極めて神祕的な力を以て、生産者としての人間に迫つて來、更に、人間を自然の主宰者としての神に結び付け、そこに、人間と神の紐帶として宗教が生れるのである。

然らば、アジアに於ける宗教の特質は如何なる點にあるか。

第一に、アジアの宗教は實に多種多樣、複雜多彩を極めてゐる。そこには、世界宗教としての佛教、基督教、回教の三大宗教があり、民族宗教としては神道、儒教、道教、印度教がそれぞれ發生の地に於て根强い信仰を得、更にアニミズム、シヤマニズム等の自然宗教も存在してゐる。

第二に、これを地域的に見るならば、佛教は日本、支那、印度支那、泰及びビルマの地域に、回教はマレー半島、印度の一部、邊境支那、インドネシアの大地域にそれぞれ分布されており、基督教は比島に於てカトリツク教が普及されてゐる。民族宗教として、神道は日本、儒教、道教は支那、印度教は印度に信奉されてゐる。その他、邊陬の各地域に千種萬樣の民間信仰、部族宗教、自然宗教が原住民の信仰の對象となつてゐる。

第三に、大東亞地域の宗教の特質としては、かゝる多種多樣の宗教が、一つの國家或は地域に於て混成して、謂はば重層的に存在してゐることである。和辻哲郎博士は、嘗て「日本文化の重層性」といふことを言はれたが、東亞宗教も正に重層的に存在してゐる。日本に於ては、神道が終始一貫して三千年の間信仰されてゐるが、其間、佛教や儒教が傳來するや、それを取り入れ、明治以後は基督教の信仰も、信教の自由として、憲法によつて寛大に保證されるに至つた。かく

して、日本宗教は重層的である。

更に、重層性の典型的な例はインドネシアに於ける宗教である。インドネシア民族の一部には西暦紀元前二千年に源を發した、アジア特有の農耕的村落時代からの自然宗教、原始宗教が、今尙部落の祭祀、行事及日常生活一般に深い痕跡を止めてゐる。次は、約一千年以前に、中世印度の隆盛の時代に印度教が這入つて來て、自然宗教の段階にあつた種族を高度文化に導いたが、更に、四五百年前、回教が東南亞細亞に浸潤して來た時、民族の大部分が回教に改宗する至つた。

然らば、これ等重層化された宗教は、それ〴〵どのような形態に於て、民族の傳統をなし、住民の心性に影響を及ぼしてゐるのであるか。次の挿話は極めて興味ある事實を示してゐる。

「そこの漁夫たちは、事が上手に運んでゐる限り、回教の四大天使の名を稱すれば充分だとしてゐるが、少し形勢が惡くなると、今度は梵語で題目を唱へ、愈々絶對絶命となると、インドネシア語で精靈に呼びかける。」

これによると、回教よりも印度教の影響は一層深く、印度教よりも、部落から生れた自然宗教は更に一層深く、危機が切迫するに連れて、漸次より深い根柢に歸り行く有樣が示されて、興味深いものがある。

第四に、アジアの宗教は、農耕村落文化生活より生れたものであつて、觀念的な普遍的宗教などと違つて、宗教が民族生活と極めて强固に結びついてゐるため、單に宗教のみを切り離して考へては、その本質と眞相を把握することができないといふことである。民族・生活・文化・宗教は全一體として綜合的、聯關的に理解されねばならない。

第五に、如上の理由により、大東亞に於ては、世界宗教といへども、それが民族化されることによつてのみ、信仰の基地を得るといふ事實である。此點、キリスト教は個性を持ち續けてゐるが、他の世界宗教は、佛教にせよ回教にせよ、布教地の民族や國家に適應するよう改變されてゐる。例へば、佛教及び儒教の日本化はそのよき例であるが、回教にせよ、邊境支那の回教とインドネシアの回教は相當の差異を示してゐる。謂はば、普遍的宗教と云へども、特定地の民族、歴史、風土、環境によつて制約されるのである。

以上が、大體アジアに於ける宗教の特質であるが、然らば、これらの宗教に對する指導工作は如何に進めらるべきであるか。

第一に、これら諸宗教の特質に對して、充分に深い理解を持ち、それぞれ其の處を得しめねばならない。この點に就いては、政府に於ても、共榮圏内諸民族の宗教、風俗、習慣等には、無意味な干渉はせず、それを尊重すべき旨を屢々聲明してゐるが、これは極めて妥當であると考へる。前述陸軍省軍務課員加藤中佐談に於ても、「原住民の宗教を尊重する」旨說かれてゐる。

第二に、日本及び大東亞諸民族の目標は、相協力して共榮の樂土を建設せんとするところにあるを以て、宗教による諸民族の精神的結合を通じて、興亞理念の發揚に邁進することは、國防的政治的、經濟的建設に劣らない緊要事である。

第三に、そのために、東亞共榮圏宗教の指導者として立つ日本の宗教家は、共榮圏建設と興亞理念の實踐に模範を示さねばならない。まづ以て、日本宗教の大同團結と自己刷新が先決問題である。指導者としての自己を確立してのみ、はじめて他を指導し得るからである。「サヴイエルの力を南方から追はうとするものは、自らサヴイエル以上のものにならねばならない。」

大東亞宗教對策は、大東亞宗教の多樣性といふ點のみから考へても、極めて容易ならざるものあるが、更に、宗教が大東亞諸民族の生活の底深く喰入つてゐることを考へるならば、その對策は萬全愼重を期し、適切有效に進められねばならない。

第二二節　大東亞教育體制の建設

大東亞共榮圏建設の大業完遂は、政治、經濟、文化其他各般に亙つて、結局「人」に俟たねばならない。指導するのも「人」であれば、協力するのも「人」である。從つて、「人」の錬成こそ、建設の鍵を握るものである。こゝに、大東亞教育體制確立の要望がある。

更に、大東亞共榮圏の建設は、一朝一夕にして達成されるものではなく、その完成には幾多の年月を要し、次代の國民が、この大理想を繼承發展せしむることによつて實現されるものであつて、その爲には、この大理想の下に、若き世代を錬成することが絶對に必要である。こゝにも、大東亞教育體制確立の任務がある。

國策の綜合的な指導が政治であるならば、人間の綜合的な錬成は教育である。綜合的な性格に於て、政治と教育は共通したものを有つてゐる。しかし、政治がより現實當面の對策であるならば、教育は將來に望みを懸くるより恒久的な方策である。かくして、教育は政治に卽應し、政治

は教育に培はれ、兩々相俟つて發展されねばならぬものである。

然らば、大東亞教育體制は如何に建設せらるべきであるか。それは、二つの部面に亙つて建設されねばならない。卽ち、一は、指導者としての日本それ自體の教育を、大東亞建設の教育體制に再編成することであり、他は、共榮圏諸民族の教育體制建設に積極的に協力することである。この教育に於ける兩個の建設のためには、政治、經濟、文化の建設に於けると同樣、一方に於て日本の一元的計畫的指導統制の機構を確立すると共に、他方に於て、諸民族の協力體制の組織を確立せねばならない。

先づ日本教育體制の、大東亞教育體制への發展は如何にして行はれるか。

第一に、大東亞教育體制確立に當り、その基本となるべきは、肇國の大精神に則り、大東亞諸民族を指導するに足る、氣宇高邁にして、道義的にも、知識的にも、體力的にも優れたる世界的大國民を錬成することである。日本は、武力に於て米英に勝つてゐることを示しはしたが、東亞諸民族に對する指導性を確保するためには、建設の大業に於ても、米英に遙かに優れてゐることを身を以て示さねばならない。指導するといふことは、主觀的な計畫を單に押しつけることではなく、一切の責任を自ら背負つて、共に苦しみ共に樂しみつゝ、共同の目標を實現してゆくことである。こゝに於て、日本民族は、指導者として、皇國の民たるに恥ぢざるよう、身心共に熾烈なる自己錬成をなして、大國民的性格と襟度を養ふべきである。

第二に、大東亞教育體制建設に關する一切の方針及び立案は、一元的、計畫的に綜合統一されねばならない。此の點については、教育行政の最高機關としての文部省は、大東亞の文部省として、責任をもつて、大東亞教育に關する一切の指導監督の任に當るべきである。

第三は、大東亞共榮圏の建設は、高度國防體制の確立に俟つ所大なるものあるに鑑み、かゝる高度國防體制の確立に卽應するため、國防的教育體制が整備されねばならない。それには、教育に於ける自由主義的舊殼を脱して、國家目的に卽して、國防的訓練、科學技術の發達、生產力擴充のための勞務動員、建兵政策、思想戰準備、職域奉公等の時局的要因を、すべて教育の方法に結びつけて、國防國家の要請に答ふる教育體制を確立し、以て大東亞戰爭を飽くまで戰ひ拔かんとする氣慨をもつ皇國民を錬成すべきである。

第四に、大東亞教育體制確立のためには、舊套的色彩の強い、從來の教育方法及び機構の刷新

再編成が要請される。そのためには、(イ)皇國の民としての自覺を一層強く喚起すると共に、雄大なる氣宇をもつ世界的日本人たるの心性を養ふこと、(ロ)陸・海軍少年航空兵教育錬成の卓越性に鑑み、日本精神による鍛錬を期すると共に、世界的競爭に後れざらんため、科學技術の發達を企圖すべきこと、(ハ)從來の教育が記憶中心なりし弊を改め、今後は特に旺大なる創造力を發揮せしむるよう努むべきこと、(ニ)師道の確立は教育の前提たるに鑑み、「師嚴ならざれば道尊からず」の古の精神を强調すると共に、そのために必要なる人と機構の充實を圖ること、即ち、師範學校の改革に即して師範大學を設立すると共に、教育指導の任に當る教員の質量を向上せしむべき、物心兩面に亘る緊急の處置を講ずべきこと、(ホ)指導者的性格は綜合的なるに鑑み、知育・體育その何れにも偏せず、知力・體力共に優れ、心身ともに健全なる性格を陶冶すべきこと、(ヘ)次代國民の育成に重大使命を果し居る、女子に對する教育を特に留意すべきこと、(ト)內外の情勢飛躍的に發展したる實情に鑑み、文部省をはじめ教育全般の機構に清新潑剌たる氣風を注入すべきこと、等の點が特に留意さるべきである。

以上が大體、日本教育の大東亞教育への再編成の方向であるが、然らば、次に、大東亞諸民族は、如何に指導教育さるべきであるか。諸民族の教育に於ける協力體制に對して、指導者としての日本は如何に對應すべきであるか。

第一に、日本民族は大東亞の諸民族に對して、あらゆる點に於て模範的でなければならない。日本人は米英蘭人よりも、信念に於て、德に於て、創意に於て、技術に於て、根氣・忍耐・意志力に於て優れてゐなければならない。何よりも必要なのは、「前任者よりも高かるべき使命感意識」をもつて、諸民族の協力に對して懇切丁寧に指導してやることである。かくして、はじめて諸民族は日本民族を盟主と仰ぎ、日本に歸一し、日本人に悅服するに至るのである。

第二に、そのためには、日本の立場を單純に諸民族に押しつけず、諸民族の宗教、傳統、風俗慣行等を尊重し、一應諸民族の身になり、その立場に立つて、內部より指導する態度が必要である。英米蘭の諸國は、アジア民族の內部抗爭を使嗾し激成して、その間隙に乘じ、所謂分割統治政策によつて、諸民族を脚下に押へつけてゐたが、日本はこれと反對に、アジア民族が各々協力し得るよう導かねばならない。かくしてのみ、日本も諸民族の協力を得、その總力を結集して、世界新秩序の建設に邁進し得るのである。

大東亞教育體制の建設たるや、その內外に亙り、極めて重要なる使命を負ふてゐる。卽ち、それは政治の正しき前進、政治による協力體制の發展と相呼應して、遠大なる理想の下に絕えず推進せしめられ、一方、日本民族の皇國民としての信念と自覺をより一層高むると共に、他方、大東亞全民族に興亞の理念を徹底せしめて眞に日本に歸一せしめ、以て日本の世界新秩序建設に全面的に協力せしむべき重大任務を有してゐるのである。

第二三節　大東亞科學技術の建設

大東亞共榮圈建設に際し、科學技術の使命は眞に重大なるものがある。建設戰に於ては、科學者、技術者は謂はば第一線の勇士の役割を果さねばならない。過剩物資の處理も、不足資源の充足も、結局、科學技術の發達に俟たねばならない。極言すれば科學技術を離れた大東亞建設はあり得ないのである。

從來、日本は、政治經濟に於けると同樣に、科學技術に於ても米英追隨、歐米模倣の域を脫却することはできなかつた。それは、結局、自由主義の弊害であつて、例へば、日本の事業家は何時効果が現はれるか解らないような研究に多大の費用を掛けるよりも、外國の特許權を買收して、その優秀な技術によつて國內市場を獨占した方が、安價でもあり利潤も多かつたので、皆その方に走り、眞に日本的技術の育成に力を致すようなことをしなかつたのである。

然るに大東亞戰爭勃發の結果、是が非でも、外國特に米英の技術より離脫して、自主獨立せざるを得ざる事情となり、日本の科學技術はこゝに大なる試練に遭遇するに至つた。今や、日本の科學技術は、たゞ共榮圈の資源に依存し、獨力以て國防力の基礎を培ふと共に、歐米先進諸國を凌駕すべき、高度の科學技術を建設せねばならぬ段階に立ち至つたのである。

政府に於ても、來るべき大戰爭を豫想して、既に昨年の五月二十七日に、「科學技術新體制確立要綱」を決定するに至つた。

「高度國防國家完成ノ根幹タル科學技術ノ國家總力戰體制ヲ確立シ、科學ノ劃期的振興ト技術ノ躍進的發達ヲ圖ルト共ニ、其ノ基礎タル國民ノ科學精神ヲ作興シ、以テ大東亞共榮圈資源ニ基ク科學技術ノ日本的性格ノ完成ヲ期ス。」

右の趣旨に基き、緊迫せる國際情勢に卽應して、我國科學技術の總力戰體制を整備し、其の躍

進的振興を圖るため、(一)科學技術研究の振興策、(二)技術の躍進方策、(三)科學精神の涵養方策をそれ〴〵具體的に決定した。更に該要綱發表に當つて、次の如き企畫院總裁談を發表した。

「我が國科學技術の水準が、歐米諸國のそれに比して全般的には低位にあり、かつ、これら諸國への依存度の相當高い狀態にあることは遺憾ながら事實である。もとよりこれに對して、從來とても科學者・技術者はその克服に邁進し來つたのであるが、現下の緊迫せる國際情勢に鑑み、はたまた大東亞共榮圈における我が國の指導的地位に照し、この際急速に、科學技術の總力戰體制を整備して、その躍進的振興を圖り、他面、大東亞共榮圈資源環境に基づく、科學技術の日本的性格を確立することは刻下喫急の要事である。」

「科學技術新體制確立要綱」の意義は、從來に於ける科學技術の自由主義的、資本主義的性格を清算して國家目的に統制し、以て日本の商業國家、貿易國家より生產國家への轉換を、技術的に準備せんとするところにあつた。

この要綱に基き、それを具體化して「技術の急行列車的躍進」を齎らさんため、本年二月一日、「科學技術の國家總力を綜合發揮せしめ、科學技術の刷新向上を圖る」目的を以て、科學技術の指導的行政官廳として技術院が誕生するに至り、長年の宿願であつた科學技術の統一的指導の機構が一應整備されるに至つた。然して、技術院當面の重點的仕事としては、時局下緊急の必要と、綜合技術的性格を具有してゐる航空に關する科學技術の研究指導に、主力を注ぐ旨が官制によつて規定された。

然らば、大東亞共榮圈建設に於ける科學技術の任務は如何にあるべきであるか。

第一に、東亞共榮圈建設と國防國家の確立は、二にして一の表裏一體的關係にあるが、その何れに於ても、科學技術の劃期的な發展が企圖されねばならない。建設過程に於ける科學技術の役割は決定的であつて、日本の指導とは、日本科學技術の指導である所以を考へ、世界の第一流國家として恥ぢない、眞に先進諸國を凌駕した日本科學技術の確立を期すべきである。そのためには、科學の基礎研究、應用研究及び工業化研究のすべてに亘り、科學者、技術者の創意を充分に尊重しつゝ、國家目的の下に統合し、科學技術の一元的計畫的發展を期すべきである。

第二に、企畫院の要綱にもあるが、大東亞共榮圈資源環境に基く科學技術を建設すべきである。技術の高度の發展は、新なる資源を生成するが、技術によつて生產を起す場合、既存の資源

に依存することも事實である。大東亞の科學技術は、一應大東亞共榮圈の資源環境に基礎を置くべきは言を俟たない。從つて、それは米英の科學技術でもなければ、獨逸の科學技術でもなく、日本獨自、大東亞獨特の科學技術でなければならない。特に米英の科學技術依存より離脱し、獨逸との連絡が早急に望めないとするならば、自主獨立の大東亞科學技術の建設は喫緊の急務であると云はねばならない。それは錫、ゴム、砂糖等の過剩物資を如何に處理し、銅其他若干の非鐵金屬の不足資源を如何に賄ふべきか等の、現實當面の緊急課題の解決のためにも必要なのである。

第三に、如上、資源環境に基く科學技術の發展もとより必要であるが、それと共に獨逸に於ける如く、科學技術そのものを高度に發展させることによつて、新なる資源を創成する方法も考へられねばならない。獨逸は元來、石炭と鹽を除き資源は決して豐富ではないが、國家と國民の一切の力を集中傾頭して科學技術の向上發展に努めた結果、その躍進目覺しきものあり、硫酸アンモニア、人造藍、合成ゴム、人造石油等の國家有用物資の造成、人工的生産に多大の成功を收めて、全世界の科學技術界を驚倒せしめるに至つたのである。從つて、資源の濫用は愼しむべきであるが、不足資源必ずしも憂ふるに足らないのであつて、高度の科學技術を以てするならば、古の鍊金術者の試みた如く、藁を變じて黃金となすことはできないまでも、石炭を變じて石油となし、空氣や水を變じて硫酸アンモニアとなす底の資源の創成活用は可能なのである。日本科學技術の名譽にかけて、科學技術の高度發展を期し、以て當面の建設戰及び來るべき經濟戰に勝利者とならねばならない。

第四に、科學技術の發展も、結局人によつて達成さるゝものなるに鑑み、科學者、技術者相互の眞の協力が要請されると共に、國民の科學精神を啓培し、更に共榮圈內諸民族の協力を確保して、相共に自主獨立の大東亞科學技術の建設に邁進すべきである。

大東亞の建設は、單に部分的な、一方的な建設ではなくして、眞に全體的、綜合的な建設であつて、科學技術の建設も當然他の建設部門と有機的、聯關的に進められねばならぬ實情にあり、そのためには、綜合的にして高い政治によつて、その方向が謬られないことが必要であつて、高き政治の指導性は、科學技術建設の分野に於ても貫かれねばならぬものである。

第七章　大東亞建設の指導者としての日本

第二四節　日本の歴史

日本の歴史的發展には、他國に見られない一つの根本的特徴がある。それは己れを失はずして人と和するといふ傾向である。

日本はその歴史的な生長發展に於て、何時も、古きものを犠牲にしないで新しきものを取り入れてゐる。古きものを固守する、古きものを尊重するのは保安性、傳統性である。新らしきものを取り入れる、新しきものを追求するのは進歩性、創造性である。日本民族は、この保守と進歩傳統と創造といふ二つの性格、それだけとしては相矛盾する二つの精神を、生きた統一に於て主體的に把持して來た。

保守と傳統は進歩と創造の地盤である。保守と傳統の地盤なくして、進歩と創造はその足掛りを失ひ、進歩、創造を實現し得ない。之に反して、進歩と創造は、保守をして固陋なる保守ではなくして前進のための保守たらしめ、傳統をして停滞した傳統ではなくして生きた傳統たらしめる。保守と傳統は進歩と創造に結びついた時、はじめて歴史的創造の生きた地盤となる。保守と進歩、傳統と創造の生きた統一及びその統一の模範典型が正に日本歴史であつた。ある時期は保守、傳統の面に固執、停滞した時もないではないし、或る時期は傳統を忘れて進歩の面に先走つた時もないではないが、全體として日本歴史を見るとき、この兩者の生きた聯關、統一は見失はれなかつた。「半歩は前へ、半歩は後へ」とは、眞實の茶人の優れた現實的な精神であると云はれるが、この茶人の精神そのものが、過去三千年間歴史を守り、歴史を作つて來た日本民族の精神である。「古風新味」こそ日本精神の根本特徴である。

「大日本は神國なり」といふ「神皇正統記」の神國意識は、神代から大東亞戰爭の今日まで連綿として續いてゐる。歴史の一定の時期に、この意識が蔽はれるようなことはあつたが、地上に噴出しなくとも、豐饒なる地下水は何時も滾々と盡きないようにつきなかつた。

日本は上代より武の國、而も神武の國である。そして武の道、武の精神と云はれるものは、上代に於て皇室の御守護に當られた大伴家の「海ゆかば水づく屍、山行かば草むす屍」の精神から、

中世現實的に鍛錬された武士道を經て、現時ハワイ眞珠灣襲擊の特別攻擊隊の精神にまで、始終一貫して傳はつてゐる。

かくの如く、日本の主體的精神は連續的、永遠的であつて、そこにいさゝかの斷絶もなかつた。しかし社會の制度と文物、樣式と傾向は、時代と共に變遷し轉換して、常に歷史的な發展進歩を辿つて來た。

日本は、歷史上屢々、强大な力を以て迫り來つた外來文化と文明を攝取し消化した。然し、何時も日本的に、主體的に攝取し消化して來た。聖德太子は佛敎をはじめて日本的に攝取され、それは王朝時代を經て、鎌倉時代に日本佛敎として確立した。菅原道眞は儒敎を日本的に攝取したが、それは德川時代に至つて日本儒敎として完成した。かくして、印度文化と支那文化の精髓たる佛敎と儒敎は、日本化せられて日本人の血となり肉となつた。明治維新に際して、日本は、西洋文明を日本的に攝取し、それが百年に充たざるに完全に日本のものとなり、今回の大東亞戰爭に於ては、その成果は却つて先進國歐米を凌駕してゐるのである。

外來の進んだ文化や文明を攝取することは、後進の立場に立てる國家や民族にとつては、正に不可避的であつて、どこの國にも見出されることである。

然し、外來の文化や文明は强大な力を以て浸潤し來るものであるから、生きた傳統なき民族、主體性を喪失せる民族は、その外來の力に壓倒せられ、己れを見失ひ、甚だしきに至つては植民地的隷屬を餘儀せられるのである。

支那はかつて日本よりも早く西洋文明に接觸したが、生きた傳統なく、それ故に主體性を失つてゐたので、忽ち西歐的勢力に壓倒せられ、結局外來の勢力に對して買辨的に自己を適應させる以外に道がなかつた。また、印度はその買辨性さへも保持することができず、完全に自己の文化を喪失し、國家的獨立を捨てゝ了つた。

然るに、日本は、生きた傳統を有つことによつて主體性を强く把持してゐたが故に、富嶽の如く孤高毅然として己れを持し、採るべきはとり、捨つべきはすて、滔々として押し寄せ來る文化と文明を、一切自己發展のための資料とし、撥條として、すべてを自家藥籠中のものとし、絶ゆまざる自己完成を續けて來た。

かゝる外來の勢力が平和的に迫つて來た時、聖德太子は十七條憲法の首章に「和を以て貴しと

し、怍ふことなきを宗とす」と曰はれた。太子は隋唐文明の讃美者であつたが、その爲に國家の權威と自尊心を失ふことがなかつた。十七條憲法は大化革新に思想的根據を與へ、日本歴史の發展に大きな影響を與へた。これに反して、元寇の時の如く、外來勢力が軍事的侵略として迫つて來た時、北條時宗は斷乎たる決意によつて、蒙古を擊滅した。

世阿彌の「花傳書」に、「能も住するところなきを花と知るべし。住せずして世の風態に移れば珍らしきなり」と云はれてゐるが、これも日本精神のすぐれた一つの特徴であつて、如何なる事態に對しても融通無礙、適應し順應し、緩急、柔剛その場合々々、機會々々に應じて、何時も隨處主となり、自己を完成して來た。

かゝる日本的發展の典型は明治維新である。明治大帝は慶應三年十二月九日の王政復古の詔に「諸事神武創業ノ始ニ原キ」と仰せられて、肇國の古に復られることを曰はせらるゝと共に、「五箇條ノ御誓文」に於ては、「知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ」と仰せられてゐる。即ち古き傳統の精神に復歸すると共に、新らしき創造の規範をお示し遊ばされた。

岡倉天心は「日本の目覺め」に於て、「物の眞相を視る人には、日本が現代的の衣裳を着けてゐても、舊日本の心臟は依然として力强く鼓動してゐることが分る。」「善く駿馬を相する伯樂の如く、事物の眞精神を洞察する人は、時事の中に舊日本の再生を見るのである」と云つてゐるが、彼は傳統即創造、創造即傳統の、日本の歴史發展の原理を最もよく理解してゐた。

ウインデルバンドは「ゲエテのフアウストとルネツサンスの哲學」といふ一文に於て、ルネツサンスの獨創的にして情熱的な力が表現されるためには、規律ある古典的傳統、即ち古代希臘の學問と藝術の美しい標準と形式によつて抑制されることが必要であつたと說いてゐるが、かゝる新文化を生む形成の原理は、日本に於ては常に至高の國體そのものであつた。

日本に於ては、既に上代に於て、諸種族を錬成して混然たる大和民族にまで日本化した。次いで佛教を日本化し、儒教を日本化し、西洋文明をも日本化した。「國體」「日本」といふことが、迫り來る一切の勢力と文化に對して、强く一つの規制原理として働いた。

かくして、一切を攝取し、一切を包容して、自己を限りなく豐かにしながら、己れを堅持し、己れを失はずして毅然として高く立つてゐること、例へば「富嶽千秋雲表に聳ゆ。廣裾長く展ぶ東海の濱。東海の波西海の岸を洗ふ。」(江渡狄嶺先生)と謳はれた富嶽の如く、毅然として聳立し